寺領ニ錢穀ヲ課スルヲ禁ゼシコト、同四年十二月十八日ノ條ニ、東兵ト一條大宮及ビ久我繩手ニ戰ヒシコト、應仁元年六月八日ノ條ニ、勝元ノ爲メニ第宅ヲ燒カレシコト、同年七月二十三日ノ條ニ、伯耆ニ歸リシコト、文明四年六月十二日ノ條ニ見ユ、其他ノ事蹟ハ各條ニ散見ス、

瑞泉寺ニ田園ヲ寄ス

〔參考〕

〔花押彙纂〕ヤ之部　山名敎之

瑞仙寺文書（伯耆）

永享十一年九月廿八日公事免除狀

大聖寺文書（山城）

長祿二年五月十三日書狀

〔日本洞上聯燈錄〕五永平下第八世　伯州瑞仙寺竺翁仲山禪師、略○中文正元





年相州牧源敎之山名氏施田園若干頃、永轉食輪、略○下

〔伯耆志〕一日下會見郡村　久坂山瑞仙寺曹洞末○中略　開山ハ能登惣持寺百十六世竺翁、薩摩人、嘉吉二年惣持寺ニ入ルト云傳フ、建立年紀詳ラカナラス、開檀ハ山名兵部少輔敎之ナリ、敎之ハ時氏ノ玄孫ニシテ、倉吉城主大膳大夫熙之ノ子ナリ、系圖、又應仁記、應仁別記ニ相模守ヲヤ、略○下

〔伯耆民談記〕一倉吉久米郡灘之鄉　今城ナクシテ禁ニ屋敷ヲ建ツ、代ヲ領主ノ殿ナリ、古城ノ號ヲ打吹城ト云、是則當山ノ名ナリ、略○中

領主ノ屋敷ハ漸ク縣ノ中央ニシテ、左右ニ士中連綿シ、其外面ニ市町ヲ置ク、寺院ハ郭外ニ群立ス、地形延東西逼南北、後ハ循(傍)嶺層周シテ、前ハ廣活タル田塘也、古山名左衛門督師義及氏之在城ノ時ハ、大ニ處モ繁花タリシニ、山名衰ヘテ後、年々ニ衰微シ、亦ハ戰國ノ爲ニ亡燒シテ、弘治永祿ノ項(今)略ハ、漸ク人家三百余リノ邑里ノ如シ、略○下

十四日、丙午、醍醐理性院公嚴ヲ權僧正ト爲ス、

〔密宗年表〕下　正月十四日公嚴任權僧正、理性、

○コノ事他書ニ見エズ、姑ク本文ニ據リテ掲書ス、

二十一日、癸丑、美濃守護代齋藤妙椿、服及ビ金ヲ一條兼良ニ遺ル、

〔大乘院寺社雜事記〕五十三　正月廿一日

一、風呂在之、（一條殿御息）大閤入御、服庄役也、（齋藤妙椿）自持提院方、御服一千疋進上之云々、隨心（院尋實）院殿五百疋進之云々、

○妙椿金ヲ尋尊ニ贈ルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔大乘院寺社雜事記〕五十三　三月七日

一、自持是院三位法印方柿代千疋送之、不寄存儀迷惑者也、此外禁裏樣ニ三千疋進上之、

廿四日、雨下

一、三位入道來、昨日下向、持是院上洛事、以外物忩仍以綸旨等可相支之由、被仰三塔了、細川申入故也、如此成下上者、持是院進物事、只今可被納之條且如何之由、自廣橋方申下故下向云々、（此項ハ二月十五日ノ條ニモ見エタリ、）

幕府前政所執事伊勢守從四位上伊勢貞親若狹ニ卒ス、

〔南禪寺書留〕　伊勢家位牌銘

聽松院悅堂常慶禪定門





文明五癸巳正月廿一日死去、伊勢守貞親、五十七歲、（貞國ノ法名）常隆之嫡男也、正覺國師拜塔、

〔大乘院寺社雜事記〕五十三　二月朔日

一、伊勢守貞親朝臣他界云々、（松林院）雖親得業籠居歟云々、且如何、不得其意者也、去月廿二日於若狹國他界了、

〔大乘院日記目錄〕三　正月廿八日、去廿二日、伊勢守貞親朝臣於若狹國入滅之由、後日聞之了、（本書及ビ寺社雜事記、貞親ノ卒去ヲ二十二日ノコトトナスハ誤レリ、）

〔尊卑分脈〕平氏伊勢流　貞國　兵庫助、備中守、伊勢守、

貞親　兵庫助、備中守、從四上、伊勢守、

五、正廿一卒、五十七歲、號長松軒、（聽）

貞宗　兵庫助、備中守、從四下、伊勢守、

〔伊勢系圖〕　貞國　備中守、兵庫助、從四位上、伊勢守、文明

貞親　備中守、從四位上、伊勢守、兵庫助、伊勢守、

文明五年正月二十一日

文明五年正月二十一日
（政所、殿中惣奉行、御臨別當）
諸職同上、聽松院文明五年正月廿一日卒、(五)七十五歲(七)、

貞宗　兵庫助、從四位上、備中守、伊勢守、
貞就　權少僧都　松林院　兼雅僧正弟子、母權中納言兼顯猶子、〇尊卑分脈脫漏ニ八母ノ字ナシ、
貞助　左衞門尉、上野介、〇尊卑分脈脫漏ニ作ル、ニハ、貞助ヲ貞祐ニ作ル、
玄眞

〔親元日記〕五　文明五年六月大、去八日自坂本親元上洛、十一日出仕、十一日、辛未、天晴、東下野守常緣書狀京着、

蟾川式部丞貞相出仕還俗、此間爲聽松院御伴僧、名賢勝、
十二日、壬申、晴微雨東狀披露了、聽松院殿御事吊也、
元應寺惠忍御狀同披露之、聽松院殿御遺物繪像彌陀澤摩筆、被贈進候御返事也、
佐々木朽木所ニ被預置上樣御物京着、
十三日、癸酉、天晴、東殿へ御返事御判出、

〔大乘院寺社雜事記〕一　長祿三年五月三日
一、伊勢守息爲松林院弟子可下向室町殿御猶子分也云々、柚留木申下者也、



義政猶子分

比興無極事ナリ、予ら不和故、自然ノ可力故歟、故貞兼僧正申云、於向後以若輩可院主、貞兼事不可成例之由申置云々、

〔經覺私要鈔〕五十　寬正四年十二月十五日霽
一松林院弟子廣橋猶子、實伊勢守貞親子、良家儀可爲如何樣哉、然而先下向了、

〔大乘院寺社雜事記〕一五十　文明四年八月五日
一、伊勢守新造去月入滅云々、天下大亂根元一方女房也、

〔補菴京華集〕　書印寫金剛經後
僧太史明敎（契嵩）曰、天地與孝同理、鬼神與孝同靈也、此論公哉、文明乙未（七年）正月廿又一日、乃聽松菴主三周諱辰也、勢州府君（伊勢貞宗）平公、特抽丹誠、修諸白業、仍出先聽松平日所示諭之手敎數十通、命工接續其紙、印以金剛經、裝褫可見矣、公謂余曰、揚子曰、在則人、亡則書、吁先人手澤秘之篋笥、以爲家寶、々莫大焉、然而日往月來、去親寖遠、哀遺戚忘、人子之常也、夫三年者天下通喪也、故君子有終身之喪、是朱文公之所以每忌日服鬖衫也、抑印此經之設在此矣、翻則前佛所詮也、口之以報罔極之恩、覆則先人所筆也、手之以盡如存之奉、自今日到明日、自今世

貞親新造某氏死ス
景三ノ印寫金剛經ノ後序
三周忌
伊勢貞宗遺書ヲ裝幀シ金剛經ヲ印ス

文明五年正月二十一日

蟾川貞相
東常緣ノ弔狀
遺物ヲ元應寺惠忍ニ贈ル
其子松林院兼雅ノ弟子トナル

七周忌

到後世子々孫々相承、以務孝之本、結般若之勝緣也、則不啻終身、而盡未來際之喪也、顧理之當否如何耳、余曰、善、按吳顧愷得父書、乃整衣設案拜跪讀之畢復再拜、又唐李元賓居父之憂、刺血寫金剛經、感異香發其舍、余謂二人之孝互有得失、與公之集而大成遠而遠矣、天地鬼神同理同靈、可謂全孝矣、我佛心印、是名金剛般若印之時義大矣哉、昔黃面老子在般若會上、拈出此心印、以三惠磨靡焉、以六喻洗滌焉、一十八住蜜(密)々也、二十七段纍々也、於是乎人皆知金剛正體從自己胸襟流出、而森羅萬象一印々定也、其印文也、梵漢與倭字義炳然、以聽松菴主在金剛心印之上、得般若之體、得般若之用、吸盡生死海而不存涓滴、踢倒涅槃山而不立點塵、豈不快乎、公文武忠孝備乎一身、社稷功臣也、十腰之銀、三組之黃、國人榮焉、上以輔翼三台、下以撫恤万民、先聽松以爲不亡矣、加之傾誠我宗、佩佛心印、證眞俗不二之理、受父子不傳之訣、其若斯則口未開、手未舒之、先盡大地、一卷經一卷書、更何翻之覆之、佛之父子之々有矣哉、則箇公需係一辭貽之將來、命不可辭也、謹其後云、釋橫川景三、

〔補菴京華後集〕　聽松悅堂庵主七周忌拈香

社稷憂勤雪滿顚、功成身退聽松眠、春風許國心猶在、花柳無私又七年、(○梅溪稿、梅溪)



齋場等持寺

疎石

十三周忌

集ニ永瑾ノ作トシテ此詩ヲ收載セルハ誤レリ、

龍集己亥文明十一年正月二十一日、伏値聽松開基悅堂菴主七周忌辰、大功德主勢洲使君平貞宗、就京等持嚴飾齋場、作善品目件々、供僧官一款耳、

舉香　此沈水香、從孝心中流出、供養佛、供養法、供養僧、仍借手山野、讃揚佛事、酬罔極恩、吁大矣哉、

經曰、香爲佛使、佛在什麼處、(喝一喝)悅堂菴主來麼、五分法身、本然清淨、三昧等持、寂爾現前、喚作臨濟金剛王也得、寶主照用雷轟白日、喚作德山木上座也得、擒縱殺活月落碧天、此是在日、歸依三會正覺(疎石)國師、傳金縷超越釋迦彌勒之所以使然耶、此是在日、輔佐二世菩薩宰相、擧玉盃醉倒文殊普賢之所以使然耶、妙中妙、玄又玄、諸人者、於是見得、正法眼藏滅瞎驢邊、以何爲驗、(良久)父慈子孝吾無隱、一縷黃雲雨大千、

〔補菴京華別集〕　付絕句　文明十七年乙巳

聽松開基悅堂菴主十三年忌拈香

舉香　此香三世諸佛々々、說不得底、是爲本根耳、六代諸祖々々、傳不得底、是爲枝葉耳、這裏有悅堂庵主否、曰唯敢問、說不得底、傳不得底、此是甚邊道理、(擧拳)菴主

竪起拳頭曰、吾無隱乎爾、如此則山僧爲他露出五分法身、成就諸般佛事、抑此香在菴主拳頭上、與扶桑同本根、是故以太傅太保之道、輔佐准三宮、又此香在菴主拳頭上、與聽松同枝葉、是故以乃父乃子之功、襲封從四位、望之烈日嚴霜、近則仁風和氣、傳四姓於源平藤橘門地人物各拔其花、致三台於伊呂蕭曹、社稷經綸密掌其美、論豐聰十七箇條憲法、而參謀幕府、遠考推古聖朝、妥神明三千餘座英靈、而廟食國家、見任伊勢刺史、敬上恤下、望重百僚、偃武修文、責歸一己、如唐人言、誦員外詩、仰員外德、雖呻吟聲咳間、未嘗一日廢定策安危如宋儒言、後天下樂、先天下憂、雖歌舞戲笑間、未嘗一日忘盡心忠義、蓋大丈夫手提權柄、用于當世之所使然、非諸菩薩身乘願輪生于在家、何以臻此夙受鷲嶺方等勅滿六度行、莫愧有力檀那、直了龍華未來、因入三會室、不屑付法弟子、晩年示現老比丘形、日用漏泄活祖師意、茅舍臥雲二靈和菴主豈異人乎、蒲團坐月四海馮長老、卽我身是報齡六十猶缺三年、夢幻去來槐宮婚姻、轉眄一十又過三年、眞如解脫棘門兒戲、千峰萬壑不立點塵、失脚蹈飜若州山、千波萬浪不存點滴、驀口平呑洛河水、將謂以是因緣十方諦求、元來卽得菩提一切種智、這箇且置昨夜灯籠入北拘盧洲喫長粳米、今朝露柱在南贍部洲腹便々地、賓頭盧尊





者唉呵々驚起、胡張三黑李四不驚起、水邊楊柳三眠、洞裏桃花半醉、鶯日遲々、燕風旋々、唵蘇嚕嚩喇山僧恁麼道、尋常茶飯有何滋味、皮下有血底、聞之必蹙眉掩鼻、更有一段奇特、不惜口業、一々擧示、龍集乙巳文明十七年正月廿一日、適迎聽松開基悅堂菴主一十三白遠忌、大功德主平朝臣貞宗、特就小補財施法施々佛及僧、無所不至、設聖像也木刻金裝、造妙經也書積印累、圓通懺摩楊枝三献、水陸勝會蘭盆一器、自餘作善不遑僂指、大功德主一管筆束、身體髮膚、一丸墨磨、皮肉骨髓、一力書寫妙經六萬餘字、當其散場、集衆諷經之次、借手山僧、謹焚此香供養、今日敎主毘盧遮那、盡是此香本根、此香枝葉、佛々說不得底、祖々傳不得底、始乎菴主一拳頭上、議盡是皇現座道場、補陀大士等如上供勘難思難終乎大功德主孝心一念、子裏有始有終、至矣盡矣、拙偈一篇述其所以者、

昔日奉君輕一死、況參佛祖悟斯旨、丹心白髮九重城、碧眼黃頭十萬里、入俗入眞々俗融、生孫生子々孫貴、公家全盛不磨碑、吾國昇平無字記、止々香語太多、落在第二、召継那高聲擧稜嚴呪、已是爐薰繞几、

## 〔蔭凉軒日錄〕

長享三年正月廿一日○中略次往妙嚴有小宴、去年之嘉例也、及歸改衣裳赴小補遣力者於方丈、可同途之由白之、長老乃見出、自常德門同

十七周忌

法華經一部頓寫

途赴小補、無幾半齋、先拈香、侍者東雲頌云、

中朝人物莫如公　冠冕扶桑東海東
佛祖不知天又雪　鬢絲禪榻落花風

結句云、

試看一爐烟起處　鐵崑崙走上燈籠

維那顯(澄顯)首座、蓋聽松院殿十七年忌也、主位小補(景三)、妙嚴(洪暾)、仁壽、桂芳、永德(景杲)、江月(齊越)、廷材(慈祥)以下、賓位相國桃源(瑞仙)、愚(本偃)、子韶以下、三汁九菜、麵菓五種、茶了、皆在南緣、二番座了、與桃源同途歸、

〔補菴京華外集〕上　聽松開基十七年拈香○詩ハ略ス、上ノ蔭涼軒日錄ニ同ジ、

長享三年歳舍己酉正月二十一日、恭遇聽松開基悅堂菴主一十七年忌辰、大功德主伊勢守平貞宗、於小補軒特設齋會、法華經王頓寫一部、圓通妙懺一座、水陸淨供一會、自餘法事不遑縷陳、仍集現前淸衆、同音諷誦大佛頂神咒之次、小比丘景三謹焚此香、以伸供養云、共惟

悅堂菴主入眞入俗、克始克終、大哉日本國王世臣、代師傅保三事之職、倬彼廣(貞)禪(繼)寺殿、家譜論祖子孫万年之功、海內安危權歸手裡、天下英雄膽落彀中、南華

貞宗ヘノ訓戒

神佛ヲ敬信スベシ

奉公ニ志ヲ盡スベシ

神佛禮拜

修法竝ニ月詣

座主有謂、春八千秋八千、宴罷壽盃月白、西天祖師有謂、身十七性十七、夢醒孤灯花紅、菴主來也、昨日三會塔前傳金縷、受慈氏記莂、今朝小補室內抛華冠出大士圓通、敢咨聽松珍重、(揷香云、)進前揷香謹空、(又手云、)試看金爐烟起處、鐵崑崙走上灯籠、

〔伊勢貞親家訓〕　爲愚息敎訓一札

一、第一佛神を信敬し奉はるし、殊ハ王城を鎭守靈佛靈社、又ハ領中にあるを奉る所の神社堂塔の修造、分際ハ隨て可心得事、

一、日夜朝暮行住座臥、上意其外公儀御番衆以下に至まて、心をくたり覺悟をへき事、

一、朝ハはなくおきて身をきよめ三衣を肩きぬを上にあゆて、念珠をとり、信じ奉る所の佛神三寶、おとにも氏の神を禮しさてまつり、心さしに隨て法施をけゝけ、武命長久家門相續を嘉運をいのりさくまつはるき事、

一、每月護摩、於山門修行之儀、幷ニ伊勢大神宮、日吉、春日、八幡宮月詣て之事、退轉なく可申付事、

文明五年正月二十一日　三八九

平生ノ行儀

一、平生行儀之事、第一女中住居不可然、或語云、將願內則士卒亦淫云、上戒學ぶべきは、下に至まて無奉公になりて、主に不見い出仕ぉ為ても無益ぉり〻思ひて、彌うとむ者也、ゃのみも早旦より夕におをふまて面に出て、當番の者、又ゎ用あらん者に對して、直ょ公事をもきゝ、面々に目を見合て言をかくへき也、奉公戒心ょりくる者ゎ、主ゎ目にみゆる戒滿足〻ゎ、數日をふ〻ぬをも、目にも見ぇ給ゎ、出仕して用なしとて、奉公ょう〻むぉり、能々可意得事也、

御用ナクトモ出仕スベシ

一、御用ぉく共、毎日よも出仕申〻ゑ事勿論歟、去とも進退よい毎日の儀如何、是非〻をふ三日に一度ハ祇候申、御目ふ〻ゆへき也、

到來ノ珍物ハ進上スベシ

一、いたくよりを珍き物到來をは、多少にをらを、進上をへき也、殊初物ぉと云一二猶其興あり、予若年ゎ比、小笠原大仲（持清カ）よ或人茄子ゎ初物を數十送〻をしを、則進上を、十ぉ內を三進上しけるを、同名備前（政清カ）何とて十ぉうら進上ぉれそ〻いひゃれて、初物ぉとはぉやくハ進上きぬ物也、少を興にするぬ〻申せし尤之事也、

初物ハ多ク進上セズ

一、朝夕食事ゎ事、女中にて用ゎ不可然、面こ出て、同名寄子內の者ゎ前ょて食事ニツイテノ注意



世渡非僧

可用珍しからさる物ぉきょ共、美物到來せは、前ふて調美させて、肴ょしてぉ酒をすゝむるき也、內儀よて食をる事をぉやくきゝは、そう經つぉる心もち出き、又そ〻まゝに人前ふて食をる時、見苦敷くせあると人よ見えさるくせ出つる（イ出來也、人前にて食つけて何かわろき曲有抔人に見せて直すべき也）也、是御前ょてゎ覺悟ふかる也、人前ょて食それそ、人の來さるよも、我食（めし）をも分てくゎせて、肴ょして酒ををゝむるゎ、興ある物也、せとひ（世渡非）僧ぉと云心得持をうらに、

酒ヲ勸メ獻ヲ交フルニツイテノ注意

一、人よ酒ぉとすゝむる事第一人みちうはく中たちをを、強そきょふけるあきは人をぉそ〻、無音も知音ふかり、友よぉさし心ハなけきゝをを、風情あ

卑賤ノ者ト交ハルベカラズ

藝能ノ嗜ミ

しきる者に、別て心をうくるし、百姓等の進退いたゐゑに沈めは其はゝまつむ、如形も在所を領知する者い、一年過てハ又如元ふなり、是ハおもてすして、公界ハ仁義をうた、人ハ見ろくいたるゝて、無器用ハ至なり、一天ハ御主ハ始申て、其國の守護、ぜきに隨ての分際、たゐゑに沈て身をうしなふためし有間敷也、一代の後いせもあき、當代を本とすへし、

一、人(主と)ハ雜談するふも、相構々々、召仕者と常に雜談をはしき也、打くつろきて必無禮ハなり、心安所存出來て、主ハあなぼる也、隔心せん人と常ハ寄合て、天下ハ沙汰諸事に付て雜談を聞て、後學にすへき也、人ハ生きたき物ハ知事いれし、人ハ云事を多ゝ、人ハ多ゝすまひなと見て、智惠いたく物也、耳にきく事を第一ハ得益せす、本文ハも此界ハ得道い耳根ハ限るとゆゑり、いやしき者と雜談をしつきて、惡き道ハむうきて、聞ならふ事を、吉事ハれし、そきハならふ者、人中ふて詞を出すふ、劣なる事ある也、

一、能藝ハ事、若時すへき事、老してすへき事有なり、若者さのミくすみて、すまふ力ハさ鷹なと見きらふいふくき物なり、う樣の事いしらて叶ハぬ道なきは、人ハ目ハ多ゝぬ程ハすへき也、

弓馬ヲ最トス

歌道ヲ心懸クベシ

一、肝要ハ弓馬の二色也、此二道旦夕心うゆ、毎日をこゑるゑうらす、無器用なき共、年功入ぬきて、犬追物なとに越度なた也、いうふ器用なれ共、功入さきはかさくなれ事有なり、此外の稽古ハたけきは元よりの事、あしけき共不苦、此内猿樂なとハすは態ハ、人ハよりてよくしハせきるは還而見苦し、酒宴の時一さし舞事なと、一向ハ不知とも、弓馬を知ぬ樣ハ恥ハたならけきとも、當世人ハ翫物なきは、大體しハせさるう吉也、仁さる者の小利口ハ、猿樂同前にしハせさる、更ハ見事にあらす、吉程ハはうらふるき也、

一、歌道の事、器用なくとも如形を知るき也、予御前ふて當座の御會あるし、御座敷を立籠らきて、座を立すして題をけくり、人ハせてすして、自力によめと仰出さきし、予除夜と云題を取きるし、題の心いうふもしらすして赤面しゆるを、能阿氣色をミて、紙ハきれハ、題の心歌ハたみ樣なとかきて、そとふところへ入きるしを見て、心得て當座の恥をかくしゑるし、是を思ふハ、いうふも覺悟すへ多事也、此道ハ道よりを藝を專にせたせ先人申ゑりし、只作を心りかくるしと也、常に人せたりあいん時を、いさ

弓馬ニ次ギテノ覺悟

衣裝ヲ質素ニスベシ

刀劍ニツイテノ注意

隱劍

はら事をいはそんよりも、いひそてなとをもして、口付をゑ也、但右よりふうちおとく、弓馬の二をけしをたて、是のミにかゝ覽事ハ不可然、自余准之、

歌道ハ兩道也外此第一可心得也、

一、衣裝此事、さのミ人ゐすくきるゐ可ゑ也し、大かさ御前おてハ、常に人也着するはい、文おとハ目にゑゝす、殊こすゐうの文ハ、若き者もくすミゑはゝ可然也、惣して諸事よわゑり、人よ過きゑる事乃見事乃るハ、軍陣まての手柄高名乃ゐゝを不知、其外の事ハあるべき様よ可然と也、

一、刀此事、御前おて立居振舞よハ、若者九寸計乃刀上代より本やを、近代其様うせぬきは、長さ至極一尺八寸ハゝり可然、又當世あはゝ人を見るよ、ゐを指といひてさす、是を隱劍とて、人ゐかくしさを事ある也、御前なとまてハ、縱人のミぬ様に指さり共、若人よ見付らきゑるらは、上意へ對して、いゝゑる野心乃有おとゝ、いハきてハ可爲曲事、脇指を可用事ハ、軍陣物詣旅行おとハ似様ゑきなり、中間小者なとハ似合也、仁さる者乃ゐたさしと見せてけを事、いゝなる手からともおやゑを、當代をや人乃振舞ゝ様に劣になりくさはゝ、後世乃若者彌けゝと思をはゝゝ也、

應對

讒遞

一、軍陣乃出立は、若者は人ゐ勝やるも、仁よりて可然、但出立をゝりにて、けせる手柄をせを、くつきを口なとおてハ、おとゝゝ志愛物ゝなくり捨てにくる見くはゝし愛也、

一、上意乃よゐ者、又を口なと愛く者淺、常によひて知音して、物をもやらをゑゑし、か様なきは、云ゑをよ事をもいをす、方人よゑる者也、

一、いゝゑる不肖の者此尋來といふ共、ゝろゝ〳〵と出て對面をゑし、一食則三吐哺、一沐則三握髮云、やはゝ〳〵其主人にあいんやて、來きる人ゐ、あとすして歸を、本意乃き事に思ふ也、加様おきは、大切おる者もうやくなる也、又を世上にてあしさはゝにいひゐす程よ、聞傳へて其人をいひけす物也、たとひ病の床にふしやり共、等閑おゐた人乃とふらひ來らは、白衣おてもあふゑし、さ様おきは隔心おゐた様よ見えて悅物也、

一、人を分際よりを身を引さけて持さる（か脫カ）見らはゝゝ物也、心をはいをしく持て、身をは上薦おくをつゝ、符合せをして人ゐにくまるゝ也、唐にハ身もいやしくわさも賤やきを共、心賢おれを國乃主とおを、人をあいおゑふよを、けし下てあひしらへを、人も近付物なり、惣別に渡り、身此振舞をゝり

雪月ニ馬ヲ馳セ風雅ノ道ヲ嗜ムベシ



ふて、其仁をはくは、片腹いさくミゆる也、仁ハ心よありて、身をハ下て持るき也、

一、月乃暮雪の朝なとおハ、馬に心をうけてせむるし、乘ハ馬に打乘て、近所の若き友さちハ宿所へ音信していさなひ、我所へハひ入、酒宴當座なと興行しさる、心ハせなさしくミゆる也、いさはらに朝ふせり夕まとひして、若時ハ二度なれよ、四時に渡り、風雅の面白き光陰をせゝに送覽事、心ふとくあさはしき事也、人とお我よ智惠のはさり、人目をも見さる者をはむはうしかりて、我心おろうなるはゝに、同しとくなる丈をあさらぬ、うくありてハ、いはの日いつ乃時に、物をも見とり聞とらん哉、いうおも良朋にちうはくるきなり、古人云、欲見其人見其友云、人ハ知音する者よて、其人乃心底あらはゝ也、恥るし〳〵、人にちかはくとも、其人三日共無音せは、人をもはうハし、文をもなすてよふるし、古人云、三日不相看莫成給仕憾、う様になけれは、別而知音のうと乃く、只平人ハあひしらひせるへし、さ様に懇なれは別而悦て、世上に人をなる人せいはゝ也、



未練者ト交ハルベカラズ

氣ニ合ハザル者ニモ對面スベシ

無能者ト交ハルナカレ

一、未練の者ハ、其人ハ氣にあハんとて、あし事をもよくいひなし、ハた事をもほしくいひなす、前きゝめ(よカ)たの者よは、構而々々不可知音、惡き事をは面打おいひて教訓する人は、眞實大切也、氣にあはぬ事をいふと思ひて、眉をむそむる事、愚癡の至なり、

一、いうお氣に不合者來りせり共、對面をるし、聊其色を見をるうらを、其色を見すれは、いよ〳〵あさと成るし、いうお野心をはしはさむ者なれ共、甚深乃様なれは、思ひ直事ありて、歸伏をは物なり、可心得事也、

一、御前へ參らんに、女中より先はるゝ事ならは、承て速に退出をるし、老者ハ不苦、若き者ハ女中にしさしたれ見苦敷なり、其上に無實の科ををふ也、

一、人せ知音せんに、兼好法師云うしとく、無能なる者とよりあハん事、何乃詮うあらん、雜談にも、う様の者は、人乃上さう賤事より外ハ云るき事なし、一せして後學に成事あるへうらは、但無能なれ共、極心おして、人を鏡ともなり、酒宴なとの相手おなり、其席を取はやしなとする様なる者を、又大切也、能目ハうくるよ也、

宿老ト交ハルベシ

一、人を參會せんよ、若き者を宿老となり合く、常に雜談をゑし、何としても後學よ成事有なり、

宿老ヲ尊重スベシ

一、家中代々の宿老に別而目浅うくゑし、或語云、主任舊歯萬事乃理云、をと ひ其身無器用とも、有へき様よするゑき也、是家浅治する專也

家屋ニツイテノ注意

一、家の事、ちのミ材木ふしきき浅えらむあとする事無益也、侍い家と命を女と三を忘をとゑゑり、侍の家大うさゑら葺すうこもを敷をり共、馬武具取そろへく置さは、見らるゝ物也、座敷を結搆よして、過分ある繪さん の物、武士の嗜あい不似合、町人等此ゑさなり、

法師ヲ敬スベシ

一、法師よ對し無禮よするゑうらを、其身其性賤共、既解脫幢相の法衣を身に かくをは、そき浅敬ゑき也、關東よい諸侍馬上あて道浅ゆくよ、いうゑう の乞食沙門よも下馬を、有時目のうすミさは者ゆくに、牛此ありける浅 見て、黒々をは僧うと思ひく下馬浅しるをいゑり、

關東ノ士乞食沙門ニモ下馬ス

慈悲ヲ先トスベシ

一、若共生死一大事、平生心よかくゑき也、是則武邊の覺悟よ可成也、

蹴鞠ヲ稽古スベシ

一、鞠の事、御相手に召加らをは、いうあも稽古をへ爰也、是道も藝を同かる すへし、唯法界一理を心よかくゑき也、



和歌連歌ヲ學ブベシ

一、連歌の事、御所樣御をれるゑをは、人數よ召くをへ涯をんよ、餘ある を如何、縦句をからを共、若者よ似合ゑうよ宗匠よ、能尋く可覺悟也、毎月二日 和歌會連歌會をこさはゑうらを、

勝負事ヲナス勿レ

一、勝負にをく事、さのミ不可然、義家朝臣行儀よも常に不勝負とあり、碁將 碁楊弓あとけへ心劣よなる物あり、況其外乃事いふよおをはを、

從士ニ對シ禮ヲ守レ

一、侍たらん者縦召仕者なりとも、けのミ言きさあよ無禮あるゑうらを、因 果の理よより主從となれとを、皆性い一也、殊よ家中宿老あとゑふよお をはを、若き者あり共、杳あと浅をらせ、足なと洗をは事有ゑうらを、同朋 小者に可申付也、

大小事共氣隨ニ爲スベカラズ

一、大小事に付く可覺悟事、我心を本をして、人よもとい す、氣はうせにする ううを、人あとに利根さてをして、我手からみて物浅して、人よやめらを んをおもひて、そはをはらある事ありて、越度よなる事此ミあり、殊に書札 乃文言他家あとへ遣をよ、誤ありてい、永く不覺にある也、いう朽る不堪

書翰ノ文言ヲ愼ムベシ

文明五年正月二十一日

好ク人ニ問フベシ

贈答並ニ遠近ノ使者ノ接待

文明五年正月二十一日



志者にもとふべし、或語云、聖明慮負薪之言廊廟之語之(云カ)能知さる事をも、しらせうやして、人に問事是肝要也、必人を學ひいさらぬ者に、知ぬ事をもしりうほをする、學のいさりをする者に、よくしれをする事をも、一向しらせうやして、人に問て學ぶまぢ也、是利根なる者のわけ也、孔子も下問に恥をとありければ、誰にも萬事を問べき也、我學をいさらすして利根さて成して恥をかく也、

一、他家より人の物をくをあらんには、相當にはさる程の物を、返しにすへき也、又に國と成く來をる使なと成、用をなたこ日數を送らせ、まさする事不可有、我國にてわかくいひなせ也、他國に不限、洛中にても、其心得あるへき也、又國と成く來れる使には、下輩此者成共直にあひて、其國の事をもとひ、懇にあひし遣い返をへきなり、他國にて其かくをなた物也、

一、猶以右にいふうしとく、其家をきさて、子孫の榮よふを祈覽者、不信にて有べうら事、信心水澄感應月浮影なをは、信うしさへて、自然發得の證理あるへ事也、相搆而〳〵當世流布する未得已得未證已證の惡見の者にいたをて、邪路に入給ふべうらせ、淺間敷事也、取分此一ヶ條をよく守

我家ハ天下ノ鏡

らん事肝要をせ、弓箭にあけさわらん程の者、信なくしてにあるへうら事、細川武州(頼之)を、十六歳の時、七日の間斷食をして、七日の中不臥して、當途王經を一千卷讀誦し、我家の嘉運嘉名を天帝に祈奉れ、利生なくばさちまちに命をつめ給へ、不然は天下にひろまる程の運をあもさせ給へと祈念しけをは、天童降下して忽奇瑞有し、はのあさり彼家の冥加、今に殘れぬ、きこへある家をたうん者、千人に指成さゝ程なた、奉公にあけさたり、領知をふさけても何うせん、速にしをうべうすへき也、我家は殊天下の鏡ともなるへけをは、無器用にては、上意に對し不可然、鏡ともならに、異見をも申けを、あさら領知をふさけ、天下の口に詈べき事無念也、右に云、能藝才智はあらは元よりの事、只人の家をたうん者を、萬能よりを一心也、能藝にはすうををも、肝要人にすくべき也、人により合をは、公界にて人とはいたける物也、專一可心得を此一段也、穴賢々々、

右條々子成思ふ心の闇にくらはされて、曉の眠をすはを、殊思ひ出は事共を、愚なる心に、愚なる筆にはうせて、貞宗にあさへ侍る、元より愚息戒の爲なをは、他人の一覽に及事なるへうらを、

文明五年正月二十一日

子茂おもふ親此おゝ浴室を建て
いさむる道にまをいすをり形
于時長祿之比　貞近判
親後ハ是也

○貞親、父貞國ノ後ヲ承ケシコト、享德三年五月二十八日ノ條ニ、政所執事ト爲リシコト、寬正元年六月是月ノ條ニ、浴室造營ノ材ヲ土岐成賴ニ徵セシコト、同六年四月二十一日ノ條ニ、僧眞藥ト共ニ斯波義廉同義敏ノ部兵捕斬ノ曲直ヲ議セシコト、文正元年七月十六日ノ條ニ、義敏ヲ立テ義廉ヲ退ケンコトヲ、義政ニ勸メシコト、同年同月二十三日ノ條ニ、讒ヲ構ヘテ義視ヲ殺サントシ、成ラズシテ近江ニ奔リシコト、同年九月六日ノ條ニ、召還セラレシコト、應仁元年五月三十日ノ條ニ、幕府ニ出仕シ、故ノ如ク政務ヲ執リシコト、同二年閏十月十六日ノ條ニ、官ヲ棄テ薙髮セシコト、文明三年四月二十八日ノ條ニ見ユ、其他ノ事蹟ハ各條ニ散見ス、

〔參考〕

〔花押彙纂〕イ之部　伊勢貞親

賀茂別雷神社文書一(山城)
文安六年四月廿九日執達狀



離宮八幡宮文書二(山城)
(寬正五年)十二月七日院宣添狀

二十四日、丙辰、義政參內、

〔親長卿記〕四　正月廿四日、晴、參內、直衣、依奏事始也、○奏事始ノコトハ二十五日ノ條ニ見ユ、

但室町殿御參之由有其聞、仍退出了、

二十五日、丁巳、奏事始、

〔親長卿記〕四　正月十六日、雨下、自新大納言(勸修寺)教秀許申送元長許、可申奏事始、昨日風記載奏事目錄、可給所作人御點事、同可書加云々、遣奏事目錄宿紙了、其案在別、及晚政顯(勸修寺)來有申旨、

勸修寺教秀奏事始之式ヲ廿露寺親長ニ問フ

鴨社及ビ叙爵ノコトヲ奏ス

緣光ト改ム

冷泉爲廣

三條西實隆

十七日、晴、及晩新大納言來、奏事始之樣談之、去年予進退之樣尋之、粗答了、本儀於議定所構圓座着座、向目錄於御前方講進之由仰了、

廿四日、晴、參內、直衣、依奏事始也、

廿五日、晴、參內、申奏事之由、卽出御、參御前、御小袖御服如去年、可被召御引直衣歟、先讀職事藏人左少辨政顯目錄、言國朝臣申、諸大夫男中務少輔申付元長與奉了、次講進予奏事目錄、鴨社事、幷德大寺大納言申基數、持明院三位基保子爵事各勅許、次久我前右府申豐通朝臣前右府男從上四位事、不入目錄奏聞、其謂於年始之奏事者、無左右可有勅許事許載之、自然一級事有子細、存如何之由、不載之由申了、去年四品申如何之由有仰、予申云、淸華之人連年一級勿論之由申之、然者不可有相違云々、實隆朝臣爲上首令所望者、近日可有御沙汰云々、次退出、

## 正四位上武者小路種光ヲ從三位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四十二　參議正四位上藤種光（武者小路）　正月廿五日敍從三位、六月廿八日改名字於緣光、

〔歷名土代〕正四位下　藤爲廣（冷泉）　文明五、正、廿五、

從四位上　藤實隆（三條西）　文明五、正、廿五、

從五位下　藤基數（持明院）　文明五、正、廿五、

○安倍有憲以下ノ敍位ハ、今日ノコトニアラザレドモ、便宜左ニ合敍ス、

久我豐通

持明院基數

〔歷名土代〕從四位下　安有憲　文明五、正、廿、

賀敏平　文明五、二、廿八、

正五位下　藤冬良（一條）　文明五、二、六、直敍同日右少將、

〔大乘院寺社雜事記〕五十三　二月廿四日

一、成就院ニ參申今御（一條冬良）所令任近衛左權少將給、去十八日宣下、松殿少將（忠顯）叙從五位上、同日宣下云々、

安部有憲

賀茂敏平

一條冬良

松殿忠顯

〔歷名土代〕正五位下　藤忠維（フサ）　文明五、二、十九、改——著、

藤原忠維

〔親長卿記〕四　二月廿七日、晴、○中略敏平（賀茂）四品事同奏聞、勅許、

## 二十八日、庚申、幕府連歌會始、

〔愚句〕○後鑑百十九、義政將軍記附錄九所載　（文明）同五年正月廿八日會始連歌可、

ながめ盡る海は入日をかきりにて

まつら此おおよはゝくも後こし
　小屋の戸さつ於暮そさひしき
あし火さく難波此さとのうにけふり
　おもひいる山のふかきに身を捨て
ゆとけ此みちをたれ祢うふらん
　くるゝ日たりに舟よそふこゑ
旅人の淀野に駒をひおとめて
　くりかゑしなをしのふいにしへ
玉の緒のみたれある世になからへて
　かすミのそらのしろき朝あけ
花やさく雲こそ風ゆにほひけれ
　人もかよはぬ橋そふりぬる
夕さちのあとにのこれる虹ほそし
　きくたにつらしあらきなみ風
いそ山の花はかすみにみえわかて



かりはの弓をもてるかへるも
ひそ犬の鈴のをとせる夕まくれ
　木をきるかたにかすむ山かせ
そことなくきこえきにけりおのゝ音
　そるかなる野てらの雨に日はいりて
しほれてかへるすみそめのそて
　なけほとゝきせかゝるゆふくれ
むらさめのすくる雲まに月いてゝ
　老をかたらふ人そまれなる
よそおをもなけきし物を親の杖

二月 大盡 壬戌朔

四日、乙丑、興福寺別當經覺、近傍盜多キヲ以テ、沙汰衆ニ命ジテ之ヲ糺明セシム、

〔大乘院寺社雜事記〕五十三　二月四日

一、盜人增倍之間、仰遣衆中、巨細仰付堯善了、

近日於御近所盜人增倍以外次第候、如先例以落書起請、被經糺明候者可目出候、隨而福智院、東中院、九納堂、彼三个所、先以糺明可然候哉之由、可令披露衆中集會給之由被仰出候也、恐惶謹言、

二月四日　泰弘

衆中沙汰衆御房

於御近所盜人增倍事委細承候、仍落書起請事、早々可下知候、三个所之事得其意候、可有御披露之由評定候也、恐惶謹言、

二月四日　沙汰衆英兼

按察法橋御房

則以公人三人、來七日可有落書起請之由、加松谷鄕四个所ニ相觸了、

落書起請

野田鄕等ノ住屋ヲ毀ツ

力者慶市逃ル

就中今日衆中進發住屋十二个所（野田鄕十一間、下北小路一間、）也、十三重米倉盜人故也、湯起請難澁故也、筒井、古市、見塔院、興善院等之披官人共云々、

十三日

一、盜人在所自衆中追放了、

十五日

一、新參力者慶市盜心在之間、此兩三日前逃出了、父今色々歎申、可進上舍弟之由雖申入之、不可叶旨仰了、泰弘申次之、此物事興弘得業申入口入召仕了、此子細共可仰遣之由仰堯善了、

三月朔日

一、隨心院殿之德阿ミ於堺路次衣服等被取之由、一昨日申之、仍昨日各被指遣之、今日盜人召取參申、小泉住則披官人云々、

三日

一、一昨日召人渡衆中沙汰衆邊了、雜物事以注文被仰了、

〔尋尊大僧正記〕四寺社雜事記　四月十二日

一、白毫寺戒下兩人住屋破却、衆中沙汰、盜人故也、

六月九日　今曉大雨（電カ）雷光

一、御宿小盜人事、巨細仰付之了、昨日清賢小者逐電、神殿定使與次郎男子也云々、

〔大乘院寺社雜事記〕五十　四　九月二日

一、及數日召籠盜人等兩三人事、去月廿七日可被切之由治定之間、（處カ）如此寺務御入滅（經覺示寂ノコトハ、八月二十七日ノ條ニアリ、）折節被故實可被放之由予令披露、今日集會ニ一決可被放遣之由云々、千萬隨喜至也、衆中書狀到來、

籠召盜人召人事、可放遣旨被仰出候、大方惡行人事之間雖難義非一候、被仰出之上者、可加免除之由、可有御披露旨評定候也、恐々謹言、

九月二日　　沙汰衆英兼

按察法橋御房

六日、丁卯、前權中納言甘露寺親長ニ命ジテ增鏡ヲ續寫セシム、

〔親長卿記〕四　二月六日、晴、益鏡可書進之由有仰、去々年予書之殘也、

○親長、曩ニ增鏡ヲ書寫進獻スルコト、三年七月一日ノ條ニ見ユ、

十二日、癸酉、伊勢延應寺住持荊叟、同寺ガ武家祈願寺ト爲リシヲ以テ、更ニ勅願寺ト爲サンコトヲ請ヒ、是日勅裁アリ、尋デ綸旨ヲ召返サル、

大房庵荊叟座元勅願寺爲サンコトヲ望ム

〔親長卿記〕四　二月十二日、晴、伊勢國栗（河曲郡）眞庄禁裏御料所之內延應寺事、被成弐家若公之祈願所了、同者爲勅願寺之由可被下勅裁之由、大房庵荊叟座元望申、奏聞了、爲御料所之內間、有限課役等自然申請勅裁、有及難澁事歟可尋云々、仰之趣仰之、無其儀之趣出請文了、重奏覽仰之、此上者不可有相違云々、仰元長書遣勅裁了、

前年既ニ勅裁ヲ申請ス

四月廿三日、晴、依召參內、去二月申請延應寺勅願寺事、當住持去々年申請勅裁了、今度新命無謂申請之條不可然、去々年之儀有御忘却、今度被下勅裁了、可召返云々、可相尋之由申入了、

廿六日、雨下、延應寺勅裁尋本人之處、去年自武家被尋申之時、廣橋大納言非勅願寺之由申之、仍被成奉書云々、公私御無沙汰今如此被仰出之條不便、但可召返勅裁云々、重仰了、此子細申捨本人在國了云々、

安禪寺觀心尼

（觀心）安禪寺殿御申之上者可止申也、但可被經御沙汰歟之由申之、奏聞、不及是非

十三日、甲戌、陶弘護、周防興隆寺ニ祈禱料トシテ同國秋穗莊三郎丸燈油免ノ地ヲ寄附ス、

幡生盛忠給分

敵ニ黨スルニヨリ相續セジメズ

講和ノ噂ヲ聞コシメサレ防禦ヲ不可トセラル

〔興隆寺文書〕三

氷上山興隆寺灯油免秋穗庄三郎丸八段地事、依爲幡生藏人盛忠給分、先年奉寄進云々、雖然今度凶徒同心罪科跡之上者、不可及相續之儀條顯然也、然而任右件人申請之旨、去永享十一年六月八日、澄清（大内持世）○大内系圖ニハ澄泉トアリ、寺殿御判在之、云御國家安全、御武運長久之儀、云殊者屋形政弘、樣御在洛無爲無事御下向肝心、旁以爲御祈禱之、彼地事始亦奉寄附之狀如件、

文明五年二月十三日　多々良弘護（花押）

別當御坊

十五日、丙子、延暦寺ニ勅シテ、齋藤妙椿ノ兵ヲ率ヰテ入京スルヲ禦ガシム、

〔親長卿記〕四　二月十五日、晴、○中略、義政參内ノコトニカヽル、十六日ノ條ニ收ム、其次今度自美濃國守護代（齋藤妙椿）持定院僧都可上洛之由有其聞、被仰山門可被禦、可被立勅使之由被遣勅使於座主坊云々、被申、申和漢（談カ）之儀之趣粗被聞食了、今可被禦者退（返カ）而過失可出來歟、御難治也、再往被申間、被仰勸修寺（教秀）可被遣山門云々、就其條々有勅語、○下文ハ義尙元服ノコトニカヽル十、二月十九日ノ條ニ收ム、

齋藤新四郎近江ニ到ル

赤松ノ兵山崎ニ集ル

防禦ノ綸旨ハ細川勝元ノ奏請

男女混亂ノ酒宴

〔大乘院寺社雜事記〕五十三　三月廿日

齋藤新四郎一昨日立國着江州云々、赤松（政則）手者群集山崎云々、

廿四日、雨下

一、三位入道來、昨日下向、持是院上洛事、以外物忩、仍以綸旨等可相支之由被仰三塔了、細川申入故也、如此成下上者、持是院進物事、只今可被納之條且如何之由、自廣橋方申下故下向云々、○妙椿進物ノ事ハ正月二十一日ノ條ニ見ユ、

○妙椿、美濃ノ兵ヲ率ヰテ近江ニ入リ、六角高賴ヲ援ケテ多賀高忠ヲ擊ツコト、四年九月九日ノ條ニ、伊勢ヲ侵シ、梅津城ヲ拔クコト、本年十月二十一日ノ條ニ見ユ、

十六日、丁丑、和歌三十首ヲ詠ジ給フ、義政參内、酒饌ヲ獻ズ、明日又參内ス、

〔親長卿記〕四　二月十五日晴、○中略、賀茂氏人保輔等任官ノコトニカヽル、八月十七日ノ條ニ收ム、次被召御前、明日室町殿有御參内、其次久我前右府、右大將等可被召之由被申、前右府事、舊院御時モ更細々無參仕之聞、當時酒宴事、内々之儀、男女混亂之間、外人如何、於右幕者爲近習之間、不能左右歟、予申云、誠公私御進退無骨歟、其次後

職事ノ雜役ハ先規ナシ

三獻ノ後續歌アリ

祇候ノ輩

小松院之御代、一献等之趣見及之趣言上、舊院御時事等粗申上之、已爲武家被申之上者、今又不被召者、無面目之由可存之、前内府廣亞相等、能々可有御談合歟之由申入了、〇下文ハ延暦寺ニ命ジテ齋藤妙椿ノ入京ヲ防ガシムルコトニカヽル、十五日ノ條ニ收メタリ、

十六日、晴、今日室町殿御參内、一献申御沙汰也、久我前右府、(通尚、)(轉法輪三條)右大將公敦等始而被召加、御酒宴砌、(日野)先是、昨日前内府勝光申云、就一獻役送事、俊豐朝臣兼顯、菅在數等可被仰付云々、以民部卿申之仍仰廣橋大納言、亞相申云、凡被聽禁色之輩不雜役之條、古來先規也、殊職事事雖爲大臣之前所役之條先規希有歟、自然不斷祇候間、臨期無人之時、丞相ゐと祇候之時、愚老廣亞相も五位侍中之時存知了、更以不可叶云々、重無申送旨、其後達叡聞、有御心得之由勅定、久我前右府、前内府、右大將爲御請伴、廣橋大納言(綱光)自然只可祇候之由、同前内府命之、有同官何一人可及此儀歟、只召出之時可出現、一献之間座列難治云々、尤有謂歟、

三献之後、有三十首續歌、(出題右兵衛督雅康)有披講、々師兼顯(廣橋)、讀師前内府、廣橋大納言、予、右衛門督(四辻季春)、左衛門督(烏丸益光)、源中納言(庭田雅行)、右兵衛督(飛鳥井雅康)等講誦之衆也、

今日祇候之輩、

久我前右大臣、前内大臣、右大將、公敦、廣橋大納言、予、右衛門督、源中納言、左衛門督、益光、右兵衛督、雅康、民部卿、忠富、公兼朝臣(正親町)、俊量朝臣(綾小路)、兼顯、菅原在數等也、美聲之時、兵部卿(松木宗綱)、滋野井前宰相中將(教國)等祇候、不似合之事也、莫言々々、

雜役ニ從フコト足利義教ノ時ニ始マル

予兩三盃傾之後、沈醉無術之間早出了、

十七日、晴、室町殿内々又御參内、今夜予窮(休)息私宅了、

三月十七日、晴、入夜雨下、〇中略詣三條少將(實隆朝臣)旅宿、五靈殿、有夕飯、其後綾小路中納言入道參會、先度一献之時、役送事被除五位職事、俊景(量)朝臣、彼入道息、六位藏人許役送勤仕、不便事也、令文中辨近衛將不懃雜役之由被載之、被破令文之條不便之由申之、予云、職事雜役事幽玄事也、羽林役送事連綿、但自何比被破令文哉、何樣被聽禁色之輩、如此役送不懃仕、於室町殿不云高下致其沙汰事、自普廣院殿御代不能左右歟、沙汰外事也、予五位職事之時、舊院御在位之時、不斷祇候、内外一献之時、一度も不懃、其時祇候之輩、故三條内大臣、公保公、實雅公、中山尹大納言、定親、中御門大納言、宗繼、飛鳥井中納言入道、祐雅、俗名雅世、此外濟々也、予存過分之儀、雖不懃仕役送、彼人々背先例不可然之由可訴申歟、不及其沙汰、當時飛鳥井前大納言、雅親、于時中將、伯二位、資益、中將、民部卿、忠富、于時少將、山科故中納言顯言、于時中將内藏頭、等殿上人之時致其役了、今更無覺悟之旨返答了、

義政夫人(日野氏)安禪寺殿心等ヲ召サル

二十一日、壬午、室町第泉殿ニ幸シ、連歌會ヲ行ハセラル、義政之ニ陪ス、

〔親長卿記〕四　二月廿一日、晴、今日(義政夫人日野氏)御臺御招請安禪寺殿、曇華院、眞乘寺殿等、其次有行幸、泉殿、嚴密儀也、予依召祇候、今夜祇候人々、伏見(貞常親王)殿、前内大臣(日野勝光)、廣橋大納言(綱光)、予、源中納言(庭田雅行)、兵部卿(烏丸資光)、左衛門督(松木宗綱)、滋野井前宰相中將(教國)、右兵衛督(飛鳥井雅俊)、兼顯(冷泉)等也、有御連歌、一折半　右兵衛督執筆也、

〔愚句〕○後鑑百十九義政將軍記附錄九所載　二月廿一日いつとあるうぬ乃庭よ、梅の花をうりなるを御らんせむとて主上ゟたらせ給て、御連歌あそハしけるに、色香ゟ外友はまちえつゝと此梅と侍るホ

のこる雪ゟ月ゟうつろふ

たく火ゟけふりふひくと淺さとむら霧乃たえまよりみやるうに紅葉

いうにせよととてゟうれやゑ人

ちおころを見にてゝかゑる花の陰

入にのふみよううふ月かけ

ひく琵琶のふらゑや秋にかよふらん



野ハらゟ草ようらゝきてやく

ふく蟲のやゝよゝとりぬる夕まくれ

ふみの玉藻そ底ゟみえをく

池水ゟきしゟ見ゆるゝ柳かけ

〔參考〕

〔碧山日錄〕五　應仁戊子四月十六日、丙午、寶勝請曇華眞乘兩尼長老以見招赴其座、曇者太上皇之妹、而眞乃天子之姉也、盛膳豐腆、終日盡其驩焉、

義政、小笠原家長ニ命ジテ、同族小笠原政秀、及ビ木曾家豐ト議シ、美濃守護土岐成賴ヲ伐タシム、

〔小笠原古文書〕(勝山)乾　土岐美濃守成賴對治事、相談小笠原左京大夫政秀、令進發濃洲、可抽戰功候也、

二月廿一日　(義政)(花押)

小笠原(家政)左衛門佐とのへ

〔小笠原古文書〕(勝山)坤

文明五年二月二十一日

（春表）「市殿（マヽ）右馬政國」

土岐美濃守成頼御對治事、相談小笠原左京大夫政秀、令進發濃州、可被抽戰功旨被仰出候、恐々謹言、

二月廿一日　（細川）政國（花押）

小笠原左衛門佐殿　進之

細川政國

〔勝山小笠原古文書〕乾

濃州凶徒等對治事、被仰付木曾候、致合力抽戰功者、可在恩賞候也

三月九日　（義政）（花押）

小笠原六郎（定基）とのへ

小笠原定基

〔勝山小笠原古文書〕坤

（春表）「謹上小笠原左衛門佐殿　人々御中　「富嶋常陸守　爲仲」

就濃州御敵退治儀、被成下御内書候、目出令存候、木曾殿與被仰合、早速御出陣候者、西口儀伊勢衆與申合、可被（致カ）入國候（委カ）ゟ曲上使可令申候、恐惶謹言、

三月十七日　爲仲（花押）

謹上　小笠原左衛門佐殿　人々御中

富島爲仲

〔勝山小笠原古文書〕乾

濃州凶徒等對治事、被仰付木曾兵部（家豐）少輔之由、被成下御内書候、早速被致合力、被勵忠節候者可然候、恐々謹言、

三月廿日　右馬頭政國（花押）

謹上　小笠原六郎殿

木曾家豐

○此條ノ文書、皆年ヲ詳カニセズト雖モ、コノ後義政、家長等ノ美濃大井荻島二城ヲ攻陷セシヲ褒スルコト、十一月二十二日ノ條ニ見ユ、因リテ、本年ノモノト推定シテ此ニ掲グ、

二十二日、壬午、當座續歌三十首ヲ行ハセ給フ、

〔紅塵灰集〕　早春　續歌卅首當座　文明五二廿二

たごれ浦やうすこおまさきさゝゝぬ日れあまとも春となへて知るらし

忍戀

しらましないたての山ろやま人と身を成いてゝなゝきこるとも

窓燈

いさつらはうゝくる窓の燈をかさるあつむる人はしせいや

二十五日、丙戌、和漢聯句御會、

〔親長卿記〕四　二月廿五日、晴、於番衆所有連歌、又於御前可有御和漢、仍予祇候、不及廣御人數、

伏見殿予、民部卿、實隆朝臣、執筆元修藏主等也、

興福寺六方衆、有德錢ヲ新市ノ富民ニ課シテ、春日社神供ニ充ツ、

〔大乘院寺社雜事記〕三五十　二月廿三日

一、就御神供闕如事、自六方新市有德者用錢懸之、合百貫歟、此內入道慶德ハ當門跡御童子力者也、不可成之由申、惣六方儀之者申狀尤也、可閣之云々、然而舜善房一人及異儀之間、珍事之由惣六方申云々、

廿七日

一、一昨日六方集會在之、新市有德錢事、門跡御力者慶德、御童子入道丸、各閣之了、仍爲惣座錢、如先々百貫文出之、神供方ニ進之云々、沙汰人二十人沙汰之、但舜善及異儀之間、不相催集會、而止出仕了、失面目了、

二十八日、己丑、蹴鞠、

〔親長卿記〕四　二月廿八日、晴細雨下、依召參內、有御內鞠、予當番也、自今日童子慶德ヲ免ゼントス　舜善房異議ヲ唱フ



幕府執奏

到晦日相博源中納言(庭田雅行)了、雖然召之間參了、

三月四日、晴、有御內鞠可參云々、依所勞不參、

鴨社社務職祐香ヲ罷メ、祐尙ヲ以テ之ニ代フ、

〔親長卿記〕四　二月廿八日、晴細雨下、今日仰云、鴨社々務事祐香縣主讓與祐尙縣主、可被宣下之由武家執申、讓與之儀覺語(啓)歟、予申云、已廿餘年爲兩社傳奏、更以不存知事也、其上去十日日供、十九日日供、廿五日日供小闕怠、一段可及御沙汰之處、何職事令自專、讓與之條緩怠也、所詮日供闕怠事、爲向後堅可召尋、祐尙事可宣下云、〇中略、延久賀茂社務ヲ辭スルコトニ係ル、四月十日ノ條ニ收ム及晩祐尙事遣宣旨案了、仰元長令書之、

祐香ノ日供闕怠及ビ恣ニ社職ヲ讓與セルヲ咎ム

三月廿九日、晴、祐香三位去月日供闕怠事等、緩怠之子細等尋之、進上申狀了、

四月一日、晴、入夜參內、御祝如例、事畢被召御前、〇中略祐香三位事、今度與奪當職於次座事自由、日供闕怠事等猶可折勘之由有仰、

祐香闕怠ノ申狀ヲ進ム

十六日、晴、〇中略其次祐香三位不儀事等仰了、

十七日、晴、祐香三位來、條々仰之、當職之時日供三ヶ度闕怠事、幷職事與奪次座事、不可然之由仰之、趣仰之、度々雖仰遣、令難澁不參之間、去一日已不申御

文明五年三月二十八日

返事之由令奏聞之由仰了、





三月 小 壬辰 朔盡

六日、丁酉、正四位下荒木田氏經ヲ從三位ニ敍ス、

〔内宮引付〕

上卿中院大納言(通秀)

一、文明五年三月六日　宣旨

正四位下荒木田氏經

宜叙從三位

藏人頭左中辨兼文章博士藤原(柳原)尚光

上階事被宣下候、自愛候(之カ)至令察候、早可令存知給之狀如件、

三月廿一日　神祇大副判(藤波秀忠)

内一三位御舘

上階事、相副口宣仰給候之旨、謹承候畢、此條只非達身宿望、尊神威光、祠職

文明五年三月六日

宮司施行事、依近例望申間、同八月十五日被下知、十六日告狀到來、

繁榮、正相當此時候歟、歡仰之至無比類候、仍彌可抽御祈禱丹誠候、誠恐謹言、

五月十八日　　內宮一禰宜荒木田判

進上祭主三位殿政所（藤波秀忠）　　內宮一禰宜氏經

下知狀

一、內宮一禰宜氏經上階事被宣下畢、且存知且可令告知神宮給之狀如件、

八月十五日　　神祇大副在判

大司御館

告狀

使一志文

御上階事、口宣幷祭主施行如此、仍獻覽之、二宮一同可令存知給候、恐々謹言、

八月十六日　　大宮司在判

謹上內一三位殿　　氏長

使坂直忠

上階事、相副口宣幷祭主施行示給之條、爲悅候、此事依尊神威光、祠職繁榮、達身宿望候歟、祝着之至極候、恐々謹言、

八月十七日　　內宮一禰宜判

謹上大宮司殿

施行旹就近例、宮司氏長望申間被下知、仍告知口宣等、去五月注間署之

## 攝家淸華ト位階ノ爭論

十二日、癸卯、正四位下土御門泰淸ヲ從三位ニ敍ス、〔公卿補任〕四十二　非參議從三位安泰淸（土御門）　三月十二日叙、元陰陽頭、天文博士、博士如元、月日辭博士、父故從二位有鄕卿、母、

十八日、己酉、大炊御門信量、近衞政家ト位階ヲ論爭シ、是日勅裁アリ、〔諸家傳〕四下　大炊御門信量　元信　氏　寬正六年正月五日從二位　廿四歲　文明五年三月十八日正二位　卅一歲、去年五月七日分、○公卿補任ニハ文明六年ノ條ニ、信量ヲ正二位トセリ、〔親長卿記〕四　三月五日、晴、雖爲所勞、片時可參之由、有女房奉書、卽參內、直衣、仰云、就近衞大納言　政家　一級　正二位　先日勅許○四年五月七日ノ條參照、事、大炊御門大納言　信

廣橋綱光ノ意見

量、申同日、永享度鷹司故關白（房平、于時大納言、）一級之時、故大炊御門內府（信宗、于時大納言、）申同日之由注進之、此上者勅許、可仰職事由仰了、宣下事仰兼顯（冬綱）之處、廣橋大納言（綱光）申云、攝家與清華位階相論事、舊院之御時被經御沙汰、大炊御門一級事申入之時、永享例其時之儀御沙汰之樣いろゝあるへく候、已不可然之由被經御沙汰了、今又勅許如何之由申之、予所存可爲如何哉云々、予申云、攝家與清華位階相論事粗觸耳候、但攝家者於清華者不可懸目之由被存歟、清華者又何條可被超越之哉之由被存之、舊院御事、御沙汰之次第不承及、其時勅答、大炊御門大納言定可存知、但雖爲先朝之御沙汰、當時又爲叡慮被改之事勿論候、又可被守先御代叡慮之條、是又肝心也、申攝家之同日連綿之由、大炊大納言（御門脱カ）申之歟、已雖爲勅許、過改無憚本文不能左右之上者、重可被經御沙汰之由言上、御同心、此趣可有勅答云々、

再往ノ御沙汰ヲ仰グ

十七日、晴入夜雨下、朝間參內、（衣冠、）依召也、仰云、先度被仰談近衞大納言（政家）與大炊御門大納言（信量）位階相論事、永享例就幽玄、重被尋仰之處、重兩三个度例注進、（於御前拜見、）此上者兩樣之間、已云勅許、云理運、可有御沙汰歟之由在叡慮、舊院之御代不可相爭攝家之由有聖斷之由、雖被聞食、無分明之儀、此等可

甘露寺親長ノ意見

爭論ニ就キ親長ニ勅問



親長ノ奉答

爲如何哉之由有仰、予申云、雖有永享一度例、於其身者可（不被カ）立申所存、結句重勘申數个度例、此上者已前云勅許云先規、在何事乎、攝家與凡人不可相爭之趣、舊院聖斷不承及之間不覺語（悟）、可在御記歟、長祿三年七月廿五日當時二條大閤（政嗣）于時中納言、其時之儀定可有御沙汰歟之由申之、仍被御覽御記、伴日室町殿任大臣節會之儀許被遊載、被超越大炊御門大納言、于時中納言、件一級事不被載、寬正三年條々有勅問事、其內一條大閤被申云、童形之輩叙爵之後、令一級之條不可然、或大臣之子孫、或花族之輩等申所存、可爲如何哉、雖然童形事加級不可然之由被申定了、其時花族之輩無故亂階、殊同官同位輩超越可被停止之由被申、殊可然之由被殘宸筆了、以是思之、花族之輩不可越傍官之由被申、華族之輩又不可被超越攝家歟之由有仰、誠有其謂、此事雖可及勅問、被尋攝家者可立申彼所存、被尋清華者又可立申彼所存、其外之輩不幾由有仰、叡慮在勅許、道理又在勅許之間、旁不背理之由申入了、其次種々有勅語事、暫退出、

○信量等清華ノ輩位階昇叙ノコト四年五月七日ノ條ニ收ム、

右衞門督山名持豐（宗全）卒ス、

文明五年三月十八日

茶火
盡日

〔親長卿記〕四　三月十八日、雷鳴雨降、今日敵陣大將山名右衛門督入道宗全死去、七十歲云々、○大乘院日記目錄ニハ七十三トアリ、天下亂逆、仲禪門與管領勝元張行歟、

〔東寺執行日記〕十一　三月十八日曉、山名三位入道殿死去、宗全七十、七ヶ日茶火ト人々申也、七ヶ日已後也、北山禪院、（等カ）持寺ト申、死去十八日也、十一日北山頭大事ニテ、十八日治定歟、

廿三日、山名入道殿宗全、茶火、北山頭大事ニテ、十六日ニ大事ニテ、十八日治定歟、

四月廿八日、山名入道殿宗全、四十九日滿申、

〔東院年中行事記抜書〕○實曉記所收　三月廿四日、乙卯、山名金吾入道、七十歲、去十八日圓寂之由、自家門修南院へ之書狀到來、

〔大乘院寺社雜事記〕五十三　三月廿日

一、松林院僧正申給、十八日山名入道入滅云々、

廿四日、雨下

山名入道、去十八日入滅必定云々、

〔大乘院日記目錄〕三　三月廿二日、山名入道宗全圓寂、七十、西方大將也、○本書コノ條二十二日トシ、又下ノ見聞雜記等ニハ十九日トナセドモ、今親長卿記等ニ從フ、

〔見聞雜記〕○歷代殘闕日記八十四所收、　三月十九日



一、遠碧院、山名宗全入道ノ追號、

〔鎌倉大日記〕　三月十九日、山名持豐卒、號遠碧院、

〔和漢合符〕　文明五癸巳三月十九日、山名金吾持豐遠碧院卒、

〔應仁記〕三　山名入道逝去之事、付漢竇嬰事、

文明五癸巳年三月十九日、山名入道宗全七十歲ニテ逝去ス、一方ノ棟梁ナレハ、西陣ノ歎息限リナシ、○中畧、細川勝元卒去ノコトニカ、ル、五月十一日ノ條ニ收ム、山名七十歲ナレハ、精力モ盡ケル故、終ニ空ク成玉フ、遠碧院ト諡リ、○下畧、上ニ同ジ、

〔尊卑分脈〕清和源氏義範流　山名　時照（豊イ）

持豐　彈正少弼、左衞門佐、左衞門督、法名崇峯、又宗全

教豐　伊與守、彈正少弼　政豐

是豐　彈正少弼　賴忠　七郎

勝豐　因幡守護、左衞門佐、

時豐　二郎

豐久　七郎

## 〔山名系圖〕

○諸家系圖纂　三之三所收　時熙

持豐　左衛門佐、右衛門督、彈正少弼、但馬因幡伯耆備前備後播磨美作石見八州守護、後剃髮更名宗全、文明五年三月十九日卒、年七十、法名最高崇峯、號遠碧院道人、

教豐　○應仁元年九月九日卒ス、　政豐

是豐　彈正忠イ少弼

勝豐　爲熙貴所養

政豐　治部少輔、諸本不載之、

時豐　六郎

豐久　七郎

女子　細川右京大夫勝元妻

女子　斯波右兵衛佐義廉妻

## 〔寬政重修諸家譜〕

七十　時熙―持豐

小次郎　彈正少弼　左衛門佐　右衛門佐　右衛門督　從五位下

從四位下　正四位下　正四位上　從三位　入道號宗全

教豐

是豐

七郎　彈正忠　從五位下

勝豐

左衛門尉　左衛門佐

中務大輔氏冬三代乃孫、中務大輔熙貴の養子となる、

政豐

右衛門督

兄教豐ゥ養子

時豐

二郎　彈正忠　中務少輔　從五位下

師豐

六郎　宮內少輔

八箇國ノ守護トナル

- 某
  - 宗岷侍者
  - 女子
    - 細川右京大夫勝元ノ室
  - 女子
    - 六角大膳大夫高頼ノ室
  - 女子
    - 斯波左兵衛佐義廉ノ室
  - 豊久
    - 或豊氏　七郎

細川右京大夫勝元ノ養子トナル、後勝元男子ヲ儲クルヨリ、豊久ヲシテ之ヲ憤リ還俗セシム、

ク僧トナシメ、持豊これを憤リ還俗セシム、

持豊　應永二十年正月、ヒソカニ勝定院義持ヨリ諱ノ字ヲアタヘラレ、（時ニ十歳、嘉吉二年先ニ赤松滿祐ヲ亡ボス功ヨリ、播磨國ヲ賜フ、）

諱字ヲアタヘラレ、（時ニ十歳、嘉吉二年先ニ赤松滿祐ヲ亡ボス功ヨリ、播磨

石見兩國ヲサヅケラレ、但馬因幡伯耆備前備後美作ノ舊領ヲ併セテ八箇國



義政ノ夫人ノ託ヲ受ケ義熙ヲ擁護ス

守護トナリ、從三位ニ昇リ、右衛門督ニアラタメ、白傘袋、毛氈ノ鞍覆、及ビ網代ノ輿ヲ用ヒ、屋形ト稱セラレシト伝ユルサレ、（慕府播磨ヲ持豊ニ與ヘ、職功ヲ賞スルコト、嘉吉元年閏九月是月ノ條ニアリ、）寛正五年、慈照院義政諸士ノ品列ヲアラタメ、相伴衆、國持、外様、供衆、部屋衆、申次衆、ヘノ六等ヲサダメ、サテ持豊國持ノ内ニ列セラレ、ノチ義政ノ御臺所義熙ヲ生誕アリ、ヒソカニ持豊ヲメシテ、

公方家カツテ男子ナカリシヨリ、舍弟淨土寺門主タリシ義視ヲ還俗セシメ、嗣子トサダメラレシガ、ノチ時、カサネテ男子生ルヽトモ、出家ハセヘカラズ、今我此兒ヲ儲クトイヘトモ、成長ヲヰ必釋門ニ入ヘシ、トノ契約アリ、ヲヰ、今我此兒ヲ儲クトイヘトモ、成長ヲヰ必釋門ニ入ヘシ、

ノハヾ持豊ヲヰヲ保護シテ、ノチノチ天下ノ主トナシテヨトアリシヲ、持豊ノサクヲ諾セズ、（義政、義尋ヲ養子トセシコト、寛正五年十一月二十五日ノ條ニアリ、）其後細川勝元ト合戰ニ及ブ事年ヲヲサヌ、文明五年三月十九日京師ニオヰテ卒セリ、年七十、最高道峰遠碧院ト號ス、京師南禪寺ノ眞乘院ニ葬ル、ヲヰハカヲ持豊開基スルトコロナリ、ト號ス、

〔但馬村岡〕**山名家譜**　三　持豊　彈正少弼　右衛門督　右衛門佐　從四位下　持豊ノ右衛門督時熙ノ男ニシテ、應永十一年甲申五月十九日ニ誕生ス、母

薙髮シテ宗全ト號ス

大蔭西堂遺骸ヲ荼毘ス

ハ右衛門佐師義ノ女なり、少名を小次郎と言ふ、〇中略、持豐元服、及ビ父時熙ニ代リテ侍所ト爲ルコトニカヽル、應永二十年正月是月、同三十年四月是月ノ條ニアリ、

一、正長元年戊申正月十八日、將軍家他界あり、嗣子なきによりて、管領司職相計りて青蓮院門主義圓義持公の弟を還俗せしめ、幕府を相續なり、

一、永享十一年己未正月に持豐正四位下に叙し、右衛門佐に任せ、〇中略赤松滿祐ノ叛亂、兩畠山ノ確執等ノ事ニ係ル、各其本條アリ、

一、(寶德二年)同年持豐職を辭退ひて、將軍家なり嫡子伊豫守教豐に職を繼せらる、持豐剃髮して宗全と號せ、然れともなを國政を與り聞ある、〇中略

一、(文明)同五年癸巳三月十九日に、持豐入道宗全陣中におゐて卒去ひて、行年七十歳なり、終りに望まして一族家人を召て、國を富し兵を强くすゑの謀を示さる、大蔭西堂此時陣中にあり、遺骸を火葬し、靈骨を遠碧軒に收む、法名宗峰、道號最高、遠碧院殿と號せ、

持豐に七男三女ひり、嫡男伊豫守教豐、次ハ左衛門佐勝豐、次ハ彈正忠時豐、次彈正忠是豐、次ハ宮內少輔師豐、次ハ宗岷侍者次ハ細川勝元の室、次ハ六角高賴の室、次ハ斯波義廉の室、次は七郎豐久なり、

〔山名家譜略纂補〕〇但馬

初名滿熙　右衛門督　彈正少弼

持豐　從四位下　正四位上　從三位

號宗全入道　司職

時熙之子、仕足利家爲右衛門督、又爲彈正少弼、〇中略

(文明)五年三月、宗全卒于西陣、歲五十七、其子政豐嗣宗全之黨、

今按家說、歲作七十、又以政豐爲子誤也、政豐者教豐之子、持豐之孫也、然承祖讓、〇中略

按系譜、宗全有六男、曰教豐、曰是豐、曰勝豐、曰政豐、曰時豐、曰師豐、而以政豐爲孫、今據舊記、系譜又云、教豐仕爲彈正少弼、列于國持衆、應仁元年九月卒云々、未辨是非、

補文明五年三月廿日、卒于洛中西陣中、年七十、法名宗峯、道號最高、號遠碧院殿、〇中略

▲今按、宗全有六男、曰教豐、曰是豐、曰勝豐、曰時豐、曰師豐、曰豐久也、而古編加政豐、脫豐久、政豐者教豐之子、宗全之孫、豐久者則爲細川右京兆勝元

嗣子、後廢爲僧、宗全又命令還俗之人也、

〔山名系圖〕○但馬　時熙（右衛門督、大明寺殿、巨川凞公大禪定門、）

持豐（右衛門督、遠碧院殿前右金吾督最高峯居士（マヽ）、大ウ内文明五癸巳年三月十九日卒、）

九畊院（應仁年中於眞乘院内建遠碧軒、此時香林和尚迁化、以香林之法弟大蔭西堂爲開基、持豐公病死于陣中、大蔭亦在陣中、火葬遺體收靈骨於此院、）

勝元犬追物ヲ講ズ持豐綱頭ト爲ル

〔碧山日錄〕一　長祿三年四月十九日辛未、左（右）京兆勝元公於城西桂邑之野射犬、會其場者一百餘騎、左金吾宗全公爲之綱頭矣、

〔蔭凉軒日錄〕　文正元年正月廿四日、○中略前廿二日、山名金吾所御成、御發句云、

八千年ノ影モアラタマ椿カナ

連句

金吾亭主曰、

立枝數ソフ梅ソ木タカキ

第三曰、今出川（足利義視）殿、

紅ノ霞ニヽホフ日ノイテヽ

今晨參侍之次、宗匠能阿彌逍遙、語愚老曰、仍記之、公方樣每句奇絕之由宗匠歎美之、

鞍馬毘沙門化身

〔狂雲集〕下　山名金吾鞍馬毘沙門化身

鞍馬多門赤面顏、利生接物現人間、開方便門眞實相、業屬修羅名屬山、

持豐某大臣トノ問答

〔塵塚物語〕六　山名宗全與或大臣問答事

山名金吾入道宗全、いふ〜大亂の比をひ、或大臣家にまいりて、當代亂世にて、諸人これにくるしむなど、さま〳〵ものかさりして侍りゝる折ふし、亭の大臣、ふるきまいをひき給ひて、さま〳〵かしこく申されけるゝ、宗全たけくいさめる者なれバ、臆したる氣色もなく申侍るゝ、君のおほせ事一往ときまへ侍れど、あながちそれに乘して例をひかせらるゝ事まかるべからぬ、凡例といふ文字をば、向後は時といふ文字にかへて御心へあるべし、それ一切の事は、むかしの例にまかせて、何〳〵を張行あるといふ事、此宗全も少々いまる所也、雲のうへの御さたも、伏してかんがふるに勿論なるべし、夫和國神代より天位相つゞきたる所の貴をいはゝ、建武元弘より當代までは皆法をたゝしあらたむへき事なり、乍憚君公もし禮節をつとめらるゝに、いふしへ大極殿のそこ〳〵にて何の法禮ありといふ例を用ゐ

先例ニ換ヘテ時勢ヲ說ク

時勢ヲ知ルノ要

ば、後代其殿ほろびたるにいさゝりては、是非なく又別殿ゐてゐこなはるへき事也、又其別殿も時ありて若後代亡失せは、いさゝつらなるへきか、凡例と云は其時が例也、大法不易改道は、例を引て宜しかるべし、其外の事いさゝかゐも例をひかるゝ事心へに、一概に例ゐおづみて、時をおられざるゆへゐ、あるひハ衰微して門家とぼしく、あるひは官位のミ競望して其智節をいはす、如此して終ゐ武家に恥うしめられて、天下うばゝるゝ媚をなに、若ゐゐねて古來の例の文字を今沙汰せは、宗全ときの匹夫、君に對して如此同輩の談をのべ侍らんや、是はそも古來いづれの時の例ぞや、是則時なるべし、我今いふ所おそれおほしといへとも、又併後世ゐわれより增惡のをのもなきにはあるべからぼ、其時の躰ゐよらば、其者にも過分のこびをおさるゝにてあるべし、いまよりのちハ、ゆめ〳〵以てこゝろなきふびすにむかひて、我方の例をのたまふべからぼ、をし時をおり給ハゞ、身不肖なりと云とも、宗全かはさらきを以て、尊主君公みゐ扶持したてまつるべしと、苦々しく申けれは、彼大臣も閉口ありて、はじめ興ありつる物がさりも、皆いたつらに成けるとぞつたへきゝ侍し、是ゟ非か、



山名持豐庵室ヲ建ツ

神仙佳境

惟肖之ガ記ヲ作ル

## 〔東海璚華集〕記　栖眞軒記

余讀普許邁傳云、自山陰至臨安、多有金堂玉室仙人芝草、漢末得道者皆在焉、及閱內典、又云、賓頭盧等九十億大聲聞住壽於世、蓋在諸山海中、護持正法、論者乃謂竹林方廣是其驗矣、仙釋雖不相謀、而隱見誘世、其道則同、吁宇宙間靈山傑岳化人所寓班々、皆是昧者何緣覩焉、龍阜之奥沿磵以登里許、雪瀑絕厓、三伏凜然、構亭於下、題曰神仙佳境、余聞諸譚客、昔者有雲五采發其地、守臣候異、開于朝中、使物也以臻見一叟焉、衣製古雅、鬚髮可繪、一揖凌虛騰去、意非仙而何、故題亭云爾、百年以來潛邸化寶坊、爲天下禪叢之魁、本朝宋元名師、於此弘化得非衆聖降神乎則彼烟霏杳靄降苗形祕跡、燕坐經行者、詎道元其人不然、茲岡巒紆餘之態、泉石清淑之氣、徒設而已矣哉、以客所譚推之、昔史內典可徵也審矣、山名金吾公貨它一區其傍、命狎遊僧松上人居之、仍掇栖眞二字扁于軒焉、公務或暇命駕來邀、上人請余以記、且解軒扁之義、嘗介上人、蒙公引待、易以不文爲辭、按道家書、崇褒有德必號眞人眞君、江西有館曰栖眞、以李八百見名、臨安有堂曰思眞、固許遠遊所稱、如此類弗勝枚擧、茲軒之扁不爲偶然、夫室廬隸乎龍阜也、不啻數百、左之右之、以引以翼、各得其所哉、然而嵐光翠色遠

近淡濃、鍾其勝獲其全則莫我栖眞如者、人皆偉公來差遲而獲最勝也、余也拘居海寺、兀待及瓜不能引去、預乎未至之列、无爲矣、然有諗於公者、上人幸而傳人乎、凉風好月之夕、郤騎從解弓刀、野服蕭然、開軒以至、隱几以望之、吹簫仙子耶、飛錫應眞耶、歆艷公得勝地、而飄然過訪、從容延之、扣焉以養神之訣、治性之方、不亦希世遇也歟、

## 〔和漢禪刹次第〕 瑞龍山太平興國南禪禪寺

諸塔頭

横獄派 棲眞院 遠碧軒 松風軒 浮香閣

## 〔京都府寺志稿〕 禪宗南禪寺ニ 陵墓

### 山名宗全墓

斯塔眞乘院ノ墓地ニ在リ、臺石ノ上ニ一ノ圓石アルノミニシテ、別ニ字ヲ刻セス、蓋シ舊墓ノ石ハ失セシ者ナルヘシ、

案スルニ、眞乘院ハ宗全生存中創立スル所ナルヲ以テ、沒後此ニ葬リシナルヘシ、今別ニ傳フル所ナシ、聞ク舊來ハ今ノ金地院東照宮ノ邊ニ在リシヲ、金地院ヲ擴張スル時ニ、此ニ移スト、蓋シ此墓モ共ニ移セシ者ナルヘシ、



○持豐、父時熙ニ代リテ、幕府ノ侍所ニ補セラルヽコト、應永三十年四月是月ノ條ニ、但馬備後安藝伊賀ノ守護ニ補セラルヽコト、永享五年八月九日ノ條ニ、山名刑部少輔ヲ備後ニ擊ツコト、同九年七月三十日ノ條ニ、赤松滿祐ヲ播磨ニ伐チ、首ヲ京都ニ傳フルコト、嘉吉元年七月二十八日、九月十日、十八日、二十一日ノ條ニ、幕府功ヲ論シ、播磨ヲ與フルコト、同年閏九月是月ノ條ニ、赤松滿政ヲ播磨ニ伐チ、首ヲ京都ニ傳フルコト、文安元年十月二十五日、同二年正月二十日、三月二十四日ノ條ニ、南禪寺塔頭眞乘院ヲ創建スルコト、寶德二年四月十九日ノ條ニ、赤松則尙ヲ播磨ニ伐ツコト、康正元年五月十二日ノ條ニ、畠山義就ヲ擊チ、兵ヲ河內ニ出ダスコト、寬正元年閏九月二十八日ノ條ニ、義政ニ請ヒ、勝元ヲ諭シテ畠山政長ヲ助クルコト勿ラシメントスルコト、應仁元年正月十五日ノ條ニ、勝元トノ間ヲ義視調停セントスルコト、同年二月是月ノ條ニ、持豐勝元各其黨與ヲ招集スルコト、同年五月二十日ノ條ニ、分國ノ兵ヲ徵スルコト、同年六月四日ノ條ニ、兵ヲ播磨ニ遣シ、赤松氏ヲ攻ムルコト、同年十月二十八日ノ條ニ見ユ、其他ノ事蹟ハ

各條ニ散見ス、

〔參考〕

〔花押彙纂〕ヤ之部　山名持豐



○牧田文書（但馬）
寬正四年十二月廿三日宛行狀

（時熙ノ二男也、生年十六）

但馬出石ニ在城ス

〔但州發元記〕馬○但　應永十六年ヨリ山名右衛門督持豐（○子有山、セラレタリ、）歲ニテ家督相續在テ、但馬ノ國主トシテ則チ出石ニ居城

十九日、庚戌、伊庭貞隆、近江得珍保內商人ノ鹽荷駄ヲ押收スルヲ禁ズ、

〔日吉神社文書〕四○近江

鹽荷駄別事、於大塚（蒲生郡）押取之間、先度雖被仰付、不能承引云々、言語道斷次第也、早任御奉書之旨、堅爲商賣人相支不承引候也仍狀如件、

文明五
三月十九日

（伊庭六郎）
眞隆（花押）

（近江蒲生郡得珍保）
保內



傳記

薩摩福昌寺正獻ヲ師トス

爲壻ノ室ニ入リ法ヲ嗣ク大寧寺ヲ領ス

商賣人中

二十三日、甲寅、長門大寧寺須益大庵寂ス、

〔日本洞上聯燈錄〕六永平下第九世　龍文器爲瑤禪師法嗣

長州大寧大庵須益禪師、薩州人、妙齡投竹（正獻）居於福昌下髮、服勤多歲、曁居遷大寧、師亦侍從掌記室、居一日示衆曰、參禪衲子須向三條椽下、七尺單前了了常知、師曰、某甲知得、居曰、作麼生知得、師曰、坐則蒲團、行則艸鞋、居曰、佛祖開示只是妙心、爲什麼施門不同、師曰、金稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝、居然之、乃指遣龍（周防佐波郡登窪村）文左右器之、一日師問曰、進則迷理、退則背宗、敢問不進不退時如何、器曰、羝羊觸藩、師曰、和尙行履作麼生、器卓拄杖曰、扶過斷橋水、伴歸無月邨、師便禮拜、依止久而造詣增深矣、寶德元年己巳六月初一日、器令師入室、付法衣幷從上相承圖、時座下有七千指、唯師一人稱登龍也、已寬正四年領大寧、上堂、森羅萬象、艸木叢林、皆是無不具妙明天眞、犀因翫月紋生角、象被雷驚花入牙、巢知風穴知雨、不知泥裏蚌滿懷是明珠咄咄、上堂舉梁山示衆曰、南來者三十棒、北來者三十棒、雖然如是、未當向上宗乘中事、山僧不然、南來拽石、北來搬土、東來擔水、西來燒柴、要知向上宗乘中事麼、拍手曰、夜半和月賣珊瑚、上堂有僧出禮

龍文寺ニ遷リ住ス
大寧寺ニ歸住ス
耕雲軒ニ退居ス
示寂
法嗣東純

拜、師曰、瞎睡作甚麼、僧曰、生死事大無常迅速、師嘘一聲、僧擬議、師便喝出示衆曰、誰知遠煙浪別有好思量、衆多下語、師曰、總是惡思量、僧曰、如何是好思量、師曰、一波纔動萬波隨、僧問、今日自恣東去西去、若有人問山中事如何祇對、師曰、暮樓鐘與曉堂鼓、誰定山中十二時、僧曰、問、和尚家風如何祇對、師開胸曰、蓋膽毛有多少、問、那吒大子返骨肉於父母、然後現本身、爲父母說法、骨肉既返了、本身在何處、師曰、旛竿尖上鐵龍頷、應仁二年遷住龍文、纔及朞年而還、上堂、一世界清淨多世界清淨、出龍文、入瑞雲、毫無隔越、諸人卻委悉麼、良久曰、江上晚來堪畫處、漁翁披得一簑歸、文明二年辭衆退居耕雲軒、一日囑諸徒曰、老僧今日行脚去也、只如南泉道百年後作一頭水牯牛去意作麼生、衆無對、自代曰、銀盌盛雪、明月藏鷺、翛然坐化、實文明五年三月廿三日也、壽六十八、臘五十三、火化塔於大寧龍文兩處、

〔日本洞上聯燈錄〕七永平下第十世　大寧大菴須益禪師法嗣

長州大寧全巖東純禪師、羽州大江氏子也、母藤氏、一夕夢僧與鏡、乃有孕焉、後問之於相者、曰、此兒必出家人也、及產肌體鮮明、不依師訓、善誦般若心經、兒戲常唱曰、不生不滅、不垢不淨、不增不減、遠近聞者敬愛之、至舞勺一旦因病歿矣、

羽黑山ニ登リ祝髮ス
鎌倉ノ圓覺寺ニ留錫ス
京師ニ至ル
龍澤ヲ訪フ
爲播ニ謁ス
須益ニ事フ
仲心
龍文寺住持トナル

冥中親受能除上人化導而還魂、於此潛發脫俗之志、明年春登羽黑山、祝髮事佛、果合相者之言也、十六下山、周流諸寺、學教習律、經灌頂後將遊學京師、路過鎌倉、見禪林軌則整肅、而深慕之、留錫於圓覺、改服參禪三過夏了、終到京師訪天隱於南禪、隱時以翰墨鳴、師不喜、無何謁器之璠禪師于永澤、璠德望尊一時、堂中七百衆、曾無得一顧者、忽見師至太甚器許、及退還龍文、師亦隨從焉、一日在視雲亭侍次、師問曰、清淨行者不入涅槃、破戒比丘不墮地獄、意旨如何、璠曰、黃金不鑄黃金像、師廓然契悟、便禮拜、璠曰、汝見甚麼道理、師曰、雲在青天、水在瓶、璠然之、乃命登瑞雲事大菴、師問菴、韶陽見睦州、爲什麼還嗣雪峰、菴曰、有意氣時添意氣、師曰、只遮箇別有、菴曰、我儂不恐拽泥水、捨得渾身待作家、師便禮拜、從此服膺益到玄微矣、菴一日示衆曰、二龍爭珠誰是得者、衆下語不契、師曰、陷虎機關各自施、菴肎之、遂入室親付衣法、時應仁二年戊子正月十一日也、是年五月菴移龍文、師留司院事、〇下略

防州龍文爲宗仲心禪師、初參大菴、便問、經曰、唯獨自明了、餘人所不見、如何是明了底事、菴曰、蟻聚臭處、驢屎溼處、師曰、恁麼則各自守封疆去也、便禮拜、菴卻問師、大集會上有一魔波旬、爲什(庶脫カ)不發菩提心、師曰、至寶不雕琢、又問、法眼曰汝

平室安

是慧超、又作麼生、師曰、烏不染黑、鷺不曬白、菴冥之、後住龍文而終、

道會

平室安禪師、參大菴、菴問、大集會上一魔波旬、爲什麼不發菩提心、師曰、大冶精金無變色、菴曰、入水見長人、又問、二祖昔日立雪斷臂、若道爲法亡形、只成得座主、畢竟作麼生道、師曰、捲荷忽被微風觸瀉下清香露一盃、菴冥之、師郤問菴、心佛衆生共不立時如何、菴曰、牛放東林野、師便禮拜、菴書平室　大字付之、幷說偈曰、牛放東林野馬嘶北苑春、干戈曾不動、歌謠堯年辰、後僧問、竺土大仙心東西密相付、如何是密付底事、師曰、夏天雨水多、秋後滿田黃、

泰伯康

海雲道會禪師、參大菴問、轉凡入聖時如何、菴曰、蝦蟆吞郤青天月、師曰、轉聖入凡時如何、菴曰、馬鳴化爲蠶、師曰、和尚尋常入聖入凡、菴曰、似虎無玄斑、如牛欠雙角、師曰、恁麼則百年後教誰摸索眞容、菴曰、叮嚀褒君德、師禮拜、後受印記、僧問、如何是淨法界身、師曰、披毛戴角、僧曰、如何是向上一路、師曰、徒步騎水牛、示衆靈山會上獨許迦葉、曹溪路上正傳靑原、正統的傳作麼生、衆下語不契、師曰、待我不語話時卽聞、

泰伯康禪師參大菴問、開拳無一物、應用不會欠時如何、菴曰、自領出去、師作舞出、菴呵呵大笑、又一日菴問曰、鷄見鬪、犬見咬、屋上鴟吻爲什麼不鬪、師曰、如兩



鏡相照於中無影像、菴曰、正恁麼時如何、師便禮拜、菴曰、如是如是、後僧問、如何是過去心、師曰、日午打三更、僧曰、如何是現在心、師曰、楊花九月飛、僧曰、如何是未來心、師曰、鐵鋸舞三臺、僧曰、畢竟如何、師曰、萬古長空、一朝風月、

需糠禪師、久參大菴、菴一日問曰、一人精進勇猛、一人懶惰懈怠、那箇卽是、師曰、支枕幽齋聽雨奇、菴曰、不妨聲色裏安眠、師曰、風吹不鳴條雨灑不破塊、菴印之（可脫カ）、住後示衆、療病不假驢駄藥、諸人直下要識得病根、卻識得也無、擲下拂子、僧問、百骸潰散時如何、師曰、三千刹界一成秋、明月珊瑚冷相照、

道圓禪師參大菴、菴問曰、如何是空劫已前自己、師曰、欲知正覺場、元是六塵上、菴曰、未在更道、師曰、眼在何處、師曰、山門燈籠、菴曰、瞎、師便禮拜、一日入室、菴打一圓相、師不顧曰、出圓通又入圓通、從此機契遂受付囑、僧問、如何是圓覺伽藍、師曰、採菊東籬下、悠然見南山、僧曰、如何是伽藍中人、師曰、兎角杖打潭底月、龜毛拂縛樹頭風、

須益卜杉重隆、世姓平氏、少而略有勇名、曾醉心於祖道、好爲法喜之遊、久參大菴和尙於長之大寧、一日問曰、弟子入僧中不修僧儀、在俗家而出俗

用兼

情、還有咨參也無、菴便打、士當下領旨便禮拜、菴曰、何不道取一句、士曰、山是山、水是水、菴印可之、龍文器之和尚掌賛其像曰、肥馬輕裘付昨非、閒還竹椅著蛙衣、菩提佛果眼中屑、別有一機機外機、

〔日本洞上聯燈錄〕八　永平家第十一世　龍文爲宗仲心禪師法嗣

藝州應龍山洞雲寺金岡用兼禪師、讃州戸田氏子、十一投教院髪髮、後更衣徧扣禪門、因參龍文大菴禪師、親炙積年矣、菴寂後依師兄爲宗心和尚深遡禪源、終瑞世永平、爲心和尚之嗣、〇下略

〔參考〕

〔長防風土記〕二百三十五　前大津宰判　大津郡九　深河村ニ　寺院　禪宗　瑞雲山　大寧寺　湯

本村ヨ在、

緣記無之、由緒書、竊ヨ舊記茂相校るに、本州大津郡深川庄瑞雲山大寧護國禪寺ヲ、石屋眞梁禪師草創の勝地ヨして、西海法窟日本の廬山といへヒ、〇中略第五代器之璠和尚ヲ竹居和尚の高徒ヨしテ、初防の龍文寺ヨ住持ヲ、〇中略、大寧寺ニ住スルコトニカヽル、寛正四年癸未の秋、丹刕永澤寺の請を得て進山開堂相從禪徒七百余員ヲ也、大庵益和尚大寧の席を繼て住職ヲ、數年の後席を全

岩純和尚に讓る、

二十四日、乙卯、石清水八幡宮護國寺大法師龐清ヲ權別當ニ補ス、

〔親長卿記〕四　三月廿四日、陰、參內、下奏、八幡宮護國寺權別當事、大法師龐清（善法寺一族）

清增望申、（景益）執申、奏聞、勅許、

六月廿九日、晴、及晚聞、先度龐清（新善法寺）之間、奏聞宣下了、殊今善法寺申云、爲新善法寺、故新善法寺亂之始爲違勅之者、今又如此及新官之條、不可然之由訴申云々、予疎骨奏聞、景益可及御罪科云々、有申仁之上者、予雖不驚、當時不肖之質、又朝政之體非本儀之間不審、卅日、晴、早旦尋遣廣亞相之處、誠昨日及此御沙汰、來月二日可被仰出云々、七月一日、晴、自今日爲予番、一昨日御沙汰之次第不存知、疎骨參候、恐懼尋申、女中之處無殊儀先可參云々、仍祇候、（下奏、無裝束之故也、）

二日、晴、新大納言、廣橋大納言等祇候、有此御沙汰、無殊仰、仰云、件事予兼日申沙汰之上者、おとや不申入哉、已今度之儀有傳奏之仁、執申仁體申入之上者、遮予非可申入之由申了、景益又依有執申仁申入之由出狀、此上者景益事不及御罪科、

〔參考〕

〔石清水八幡宮祠官系圖〕三〇諸家系圖纂三十之上所收

農清 新善法寺

嘉吉二年十月廿九日、自五臘權別當補社務、〇中略長祿四年四月廿三日入滅、四十三

宥清 第八十九新善法寺、別當、

康正元年十一月廿日、補別當、長祿四年五月三日、補社務、廿一歲、文明五年四月十日入滅、四十異本四歲、農清入滅以後、廳清幼少之間、坊領等恣之、號新善法寺、宥清入滅以後、廳清請之、

廳清

母伊勢國人、寶德三年八月十五日誕生、卯日卯時

昌清

補權別當、

二十六日、丁巳、島津立久、日向櫛間ニ於テ犬追物ヲ行フ、

〔前編舊記雜錄〕廿九立久公御譜中 正文有之、





十 十 十 

廿六日、晴、以量來、玄通法印事、以盛卿猶子事約束了、無相違之由出書狀、
廿七日、晴、讃州坂田無量壽院事、以盛卿猶子之由申之、進上以量書狀了、此上者勅許、

## 備中華光寺圓忠大功寂ス、

〔日本洞上聯燈錄〕五　永平下第八世　闢雲覺隱永本禪師法嗣

備中州華光寺大功圓忠禪師、隅州人、幼歲投園林寺、禮了巖明公落髮、參覺隱於闢雲、扣請既久、而盡發其祕、永享辛亥春、隱令師入室、付衣偈、有從此靈光分照去、他時獨耀一天中之句、初出世總持於防州宮野莊創龍華院、寶德改元嗣補闢雲、享德癸酉隱將順世、定輪番住持、使師初任之、囑曰、爲吾徒弟者須以輔弼大教爲志、不妨涉獵諸宗、巧盡善權、師拳々奉持不墜所囑、數載之間法席大充、康正改元遏退鼓讓位全庵、寬正壬午再住闢雲、於文明二年爲三登、三年辛卯備中鬼妻城主上田氏、淑華光寺請師爲第一世、冬至上堂、拈拄杖曰、一陽生盡大地草木崩動、拄杖子不知、一線長微塵刹日月斬新、拄杖子不覺、諸仁者還會麼、良久咄曰、放過文殊普賢、靠倒石頭南嶽、卓杖下座、上堂、保壽開堂三聖推出一僧、兄第闘墻外禦其侮、壽便打大小保壽、忒煞眼華不打三聖、亂棒此僧、直饒打得三聖、保壽背上還有痕捧、聖云恁麼爲人瞎卻鎭州一城人眼去在、豈啻鎭城、三千沙界不分緇素、壽便歸方丈、喪車背後掛藥袋上堂、慈明圓禪師、僧問、既是護法神、爲甚麼張弓架箭、明曰、禮防君子、慈明大似爲這僧演義、山僧則不然、而今有人致此問來、便咄道去去、若不與麼石鞏爭得三平、開爐上堂、擁之不聚、撥之不散、聽之不聞覩之不見、且道與南方火爐頭話、還有優劣也無、擊拂曰、遇貴則賤、除夜小參、嶺梅殘雪後、雲鬢未梳時、春風別有巧工夫、吹綻百花品類殊、明日東村王大老、成群成隊賀新正、文明五年三月廿七日唱滅於華光、得法者有英巖雄一人、防州妙喜、豐州安樂、豫州高昌、以師稱開祖矣、

備中鬼妻城主上田氏請ヲ受ケ華光寺ノ一世トナル
周防龍華院ヲ創ス
闢雲寺住持トナル
大隅圓林寺ニ入リ僧トナル

〔日本洞上聯燈錄〕六　永平下第九世　華光大功圓忠禪師法嗣

備中州華光英嵓希雄禪師、奧州人、下髮於廉仲公、掇賾方外、參大功於防之闢雲、機語契合、享德癸酉臘月廿七日、令師入室、付信衣、尋授覺隱和尚所傳竹篦、已而出世總持、懷香歸功師、至防州住龍華數載、付席西湖、移尸華光、〇下略

〔長防風土記〕二　山口宰判　宮野庄七房村　吉敷郡四　一、寺院

禪宗吉祥山龍花院

本堂、桁行七間半　梁行五間半

釣屋、桁行弐間半　梁行四間

法嗣希雄　龍華院住持トナル

龍花院

庫裡 桁行四間 梁行五間半

右寺家營作

本寺江良村眞如寺

開山、關雲寺四世、大功圓忠和尙　文明五年三月廿七日寂、

中興開山、眞如寺十一世、全頓和尙　慶長六年十月寂、

開基不分明、

寺傳、當寺ハ大內家の盛んなる時、大功圓忠和尙、七堂伽藍を造建し、關雲寺覺隱和尙を請して開山とゐ、寺產三百石、寄附の山林境內多かりしに、大內家沒落の時、當寺炎上、其後小寺を建、今も舊跡山林を龍花山といへり、〇日本洞上聯燈錄ニ、防州眞如（舊名妙喜）トアリ、蓋シ是レナラン、（吉備郡）下道郡下山田村

〔備中話〕十一　一、禪宗　慈雲山　華光寺

周防山口泰雲寺末、田地二十三石九斗一升、四合、山十町余有、寺に昔し梅の名木有しよりしう名付しなん、此寺に今川上總介泰範、上田孫四郎實（親）近等の位牌有、



## 四月　大盡　辛酉朔

一日、辛酉、日蝕、

〔東院年中行事記拔書〕〇實曉記所收　四月一日、辛酉、陰、日蝕、但不蝕、〇東京天文臺回答、四月一日ハ「ユリウス」曆一四七三年四月二十七日ニ當リ、亞細亞ノ北部一帶ニ日食ヲ見タリ、京都ハ食甚時刻眞太陽時午後五時三十一分、ニシテ食分ハ六分四厘ナリ

三日、癸亥、甲斐某、越前ニ下向ス、甲斐氏東軍ニ通ズトノ說

〔大乘院寺社雜事記〕五十三　二月十五日

西方甲斐內々申通子細在之歟、山本□□以下在細川方云々、

〔尋尊大僧正記〕四寺社雜事記　四月十二日

一、去三日甲斐下向越前國云々、西方大名可合力云々、

〇甲斐八郎、朝倉孝景ト越前ニ戰ヒ、敗レテ加賀ニ走ルコト、四年八月六日ノ條ニ、越前細呂宜ニ戰ヒ孝景ヲ破ルコト、本年八月八日ノ條ニ見ユ、

七日、丁卯、稻荷祭ヲ停ム、

〔東寺執行日記〕十一　四月七日、稻荷祭無之、每年半分定、各御供半分備之、

中綱座定觀、性增、明年性守、職掌衆孫太郎、（マヽ）國後明國御酒備役懸秀、明後榮粽座與左右次郎、國澤明未滿赤飯座唐橋大工、八幡座定忍、性守明舍カ合兄定金跡鳥、大炊役必八幡方定忍、大炊役初度

西將甲斐ヲ授ク

座入事ハ先例、定金ハ去年（文明四年四月廿四日）寺家追出也、仍跡定忍也、稻荷御出之無之、近年如此候、

自八幡座前分、（大井御分、）中綱職掌兩座中ヘ悉半分取之、又赤飯座ヨリ大井ニ一前備之、職掌方頭人備之テ取之、武内御分同取之、兩夜刄神分二前ハ守取之、中綱座五前之内二前執行方ヘ取、三前座衆取之、（カモ一、ツエ物二、クキヤウ二前、又二前、菓子四、小ホツカイニ各四種有之、此方分、）

職掌座五前之内一前別當方、一前導師方、一前執行方、二前座衆取之、（御カン一、ツエ物二、クキヤウ一前、又菓子一前、四種有之、此方分、）

御酒座五前之内二前執行方、（各有酒之二瓶子）三前座衆方ヘ、（各酒在之、）（菓子二前各三種有之、小ホツカイ此方分、）

粽座（寄分座兩座廻番、）五前之内二前執行方分、（各酒有之、）（一マヽ）ハ三前兩座、（各有酒之、）（菓子二前各三種有之、小ホツカイ此方分、）

八幡座五前之内一前執行方、（有酒之一瓶子、）クキヤウ已上十一前有之、（小ホツカイ〆廿九、酒三瓶子、）（菓子一前三種有之、此方分、）

赤飯座五前之内四前分師取候、一前座衆方分、

〔東寺私要集〕　一同（文明）五年（癸巳）三月、無御出之、四月七日、祭禮無之、御供御札供之、

土寇屢寺内ニ陣ス

光明院ヲ殘シ置ク

義尙出座

〔東寺長者補任〕五　文明五年、（癸巳、）稻荷祭無之、於御供者如去年半濟分殘供之、

八日、（戊辰、）朝倉孝景、越前稱念寺ヲ他ニ移シ、寺領ヲ安堵セシム、

〔稱念寺文書〕（○越前）

當寺事、動牢人出張之時、楯籠寺内之條、被曳移他所、至寺號者、如元可被稱長崎（坂井郡）稱念寺候者也、於光明院者、可被殘置故舊云々、然者任綸旨幷公方樣御判已下古今一々證文等旨、惣別寺領古屋敷諸篇、如元來聊無相違所々領主頗止違亂、可有懇祈之狀、仍執達如件、

文明五年（癸巳）四月八日　左衛門尉（朝倉孝景）（花押）

稱念寺

○稱念寺移轉ノコト、他ニ所見ナク、又行ハレザリシモノノ如シ、

十日、（庚午、）足利義尙乘馬始、

〔常德院殿御乘馬始記〕　文明五卯月十日午刻、花乃御所よく召初らるゝ記、

松の庭よてめすなり、若公（義尙）樣御ちやうゝんを召て南ゟ竹簀子ゟと茂りの、

乗馬ハ政元ノ進献

御ゐた戸より御出有て、西の御ゑんの上より御立あり、其時へい中門より管領右馬頭(細川政元)殿、其外役者參、伊勢守(伊勢貞宗)をい中門をあけらる、管領御參ありて、若公様御出、伊勢守御懸ゐ南より參、若公様をゑつこのそこゐ松のもとすこし南東よりいさきおろし被申候而、御庭より御ゑんの上へ御あがり、御ゑんの上にて御鞭を、小笠原民(政清)部少輔持て參、御左ゐにおるさより御腰よさし申也、御鞭ハくゐ柳ゐ御鞭なり、とつら有、其後伊勢八郎(貞陸カ)左衛門御沓をまいらせて、如常めさそるなり、若公様西むきよ御立有也、伊勢守御介錯也、御沓ハ赤松進上、播磨皮ともこせ也、御沓ゐ内へこうはいのきぬ也、御馬ハ管領より進上、のうゑらけ、但辻あるよつて、そうめい(政元)殿進上ゐ黒よめすなり、御鞍ハかおのい御鐙共に伊勢(貞陸)左京亮作也、へい中門の外迄次郎四郎ひきてゐいるを、左京亮請取東のしらよむつさて候茂、若公様を伊勢守いさき申、御馬よめさせ、御側よ伊勢守、小笠原民部少輔両ゐ御ゑきふ參也、御馬乃両口よ、右の方よハ伊勢八郎左衛門、左ニ左京亮付申て、御馬を北之松貳本のあいへうち御出しありて、そこより西南へ三へんうち御まハしなり、三へんめ茂ちとひろひろとめしてもとの如く懸の内へ御馬をめし入るなり、南の方へうちハねされ、懸の四本をこ

義政及ビ管領以下參列

役人

義政對面

められ、三へんうち御まハし候て、又懸乃中程よりうちと東に御馬を立らる、初ゐことく南の方へ伊勢守いさゐたおろし申候而、頓而下にく御鞭をも、御沓をも、初の役人給られ候く、以前のとく御ゑき戸を還御ある也、御馬めさるゝ間は、御所様(義政)御中門より御出あて御座ある也、管領へい中門より南西のへいの際に被畏也、右馬頭殿計御供衆の中にハ伺候也、是を西の方へい中門乃際ゐ被畏也、御劔は大館十郎殿御うち刀もさるゝ也、未申ゐそこの松よりすこし東に被畏なり、御うさ衆ハ北のやのきのきハよおの〳〵畏、皆々ゑおうし上下也、此外ハ御庭こハ誰も伺候なきなり、

役人

小笠原民部少輔御鞭をまいらせ、同御ゑきこ參、伊勢守、御ういまやく、同御ゐたよ參、

伊勢八郎左衛門、御馬の口にゐく、

伊勢左京亮、御馬ひきて參、同御馬乃口にゐく、

大館十郎殿、御劔乃御役あり、

此後東の御七間よて御對面有之、先御所様御對面也、管領御馬太刀進上、そ

のまゝ御前ニ伺候、其外國の衆進物、同公家御供衆、外様奉公方奉行、山法師少々、醫師陰陽家の者、御太刀進上、外様奉公方奉行衆をもう小袴此衆もあるしるなり、但御かさ衆、又者奉行も、御前衆ハ悉ゑかし上下なり、御かさ衆ハ奉行同前ニ、皆々御太刀進上候て後、管領被出候也、悉御太刀進上おもつて後、又若公様御出あり、御對面、同管領重而御太刀を持參被申、さしめ此とく御七間の内中此せうし此西のもき、北のもゝに伺公也、申次御供衆少々、若公様御對面之間、御所ニ伺候也、御座敷せたまよつて、西の御ゑんにも伺候の方もあるゝ、後代のさめに註置者なり、

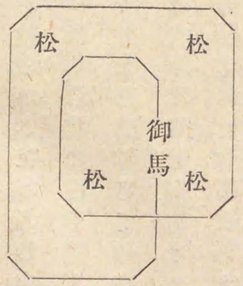
乘馬始ノ繪圖

かゝる御召候繪圖

御中門内

御所様御座候也、

軒　東




加様ニ三度めす也、

如斯うち御入候也、

翌日御太刀助兼拜領、高尾張守跡給之云々、

祇園社ニ神馬ヲ進ム

次座ニ命ズ

〔祇園社記〕一八 大將軍家牽進神馬之記

祇園社御神馬一疋、青毛、就若公様御乘馬初儀、可引進之由、所被仰出也、仍執達如件、

文明五年卯月廿三日　伊勢守判 貞宗ト云

祇園社御師

## 賀茂社務延久ヲ罷メ、尋デ敏平ヲ以テ之ニ代フ、

〔親長卿記〕四　二月廿八日、晴、細雨下、今日賀茂神主延久縣主來、職事辭退、無幾程謙退之條不可然之由種々仰之、雖然難治之由種々命之、何様可奏聞之由仰之、〇中略、祐香鴨社務ヲ辭スルコトニカヽル、二月二十八日ノ條ニ收メタリ、次延久縣主社務辭退奏聞、可仰次座云々、遣一行、

四月一日、晴入夜參内、御祝如例、事畢被召御前、〇中略賀茂社等事可仰云々、

九日、雨下、〇中略延久來、辭退事申之、去六日日付也、

十日、晴、賀茂社務延久縣主辭退奏聞、可仰次座云々、仰敏平了、

十一日、晴、敏平縣主來、社務職難治之由申之、爲正禰宜度々固辭、不可然之由返答、可廻計略云々、

十二日晴、〇中略及晩遠平縣主來、敏平使云々、社務職事存知云々、

十三日、陰、〇中略今朝賀茂輩來、貞久、榮久、遠平、敏平、當社務在久等來、

五月五日、晴、社務敏平送一桶、

〔賀茂社家總系圖〕乾久之一流　神主延久　文明四年十一、九補社務職、同五年二、

廿八辭退之義申上、同四十勅免、

〔賀茂社家總系圖〕乾平之一流　神主敏平　文明五年四月十二日補社務職、

十一日、辛未、美濃守護代齋藤妙椿、同國善惠寺住持圓海、尾張曼陀羅寺學頭泉榮ト、連署證狀ヲ兩寺僧徒ニ授ケ、協力シテ法門ノ紹隆ヲ圖ラシム、

〔善惠寺文書〕〇美濃

美濃國米田(加茂郡)島細目鄕解脫山善惠寺者、忝依爲後花薗院御在位時勅願寺、同當今樣被成宣下處也、然而尾州飛保(惠栗郡)鄕曼陀羅寺者、爲門徒之上、爲興隆佛法、從今身至佛身盡未來際、住持幷衆僧等相互成同侶之儀、致水魚之思、於佛法世法令相談兩寺、無退轉之樣可致芳契者也、仍爲後證所記之狀如件、

檀那持是院法印

文明五年癸巳四月十一日　從三位妙椿(花押)

曼陀羅寺眞珠院　學頭泉榮(花押)

善惠寺　住持圓海(花押)

解脫山衆中

曼陀羅寺衆中

〇善惠寺ヲ敕願寺ト爲スコト、四年十月十四日ノ條ニ見ユ、

十二日、壬申、御鞠アリ、後屢之ヲ行ハセラル、

〔親長卿記〕四　四月十二日、晴、〇中略及晩於殿上前有鞠、新大納言(勸修寺教秀)、廣亞相(廣橋綱光)、予、源中納言(庭田雅行)、滋野井(教國)、藤宰相(高倉永繼)、右兵衛督(飛鳥井雅康)、兼顯(廣橋)、以量(薄)、政長、其外武邊之輩也、赤松兵部少輔、當年始而可參御鞠云々、

十三日、陰、〇中略於殿上前有鞠云々、予不出合、

廿四日、晴、於殿上無名門前有鞠、新大納言、廣橋大納言、予、園(基有)前中納言、源中、滋野井、右兵衛督、兼顯、以量等也、

廿五日、朝間細雨下、於殿上無名門前有鞠、予談右兵衛督雅康云、香狩衣幷直

垂上等可着鞠場之條如何、於香者種々有其沙汰、但如予可着之條不可有相違之年齡、此道爲數年之事、旁以無餘儀之由命之、

十三日、癸酉、東西兩軍相和セントス、獨畠山義就等肯ゼズ、

〔尋尊大僧正記〕四寺社雜事記　四月十三日

一、遊佐申下云々、東西和與大略無爲、畠山兩所中計也云々、

○此條、月日詳カナラズ、姑ク本文ニ據リテ是日ニ揭グ、持豐、和ヲ勝元ニ求メ、赤松政則之ヲ拒ムコト、四年正月十五日ノ條ニ、東西諸將互ニ和ヲ議スルコト、六年四月三日ノ條ニ、大內政弘、九州ノ亂ヲ憂ヘ、東軍ニ屬セントスルコト、九月十八日ノ條ニ見ユ、

十五日、乙亥、正四位下舟橋宗賢ヲ從三位ニ叙ス、

〔公卿補任〕四十二　非參議從三位（舟橋）清宗賢　四月十五日叙大藏卿如元、月日辭卿、父故入道從三位業忠卿、母、

○一條冬良等ノ叙爵ハ、本日ノ事ニアラザレドモ、便宜左ニ合叙ス、

〔歷名土代〕從四位上（一條）藤冬良　文明五四十三越階、

（綾小路）源俊量　文明五四廿五、

一條冬良
綾小路俊量

安倍有永
安倍有就
大澤久守

正五位下　安有永　文明五四廿六、

安有就　文明五四廿六、

大澤長門守藤久守　文明五四廿八、

〔神階已下口宣綸旨御教書〕○柳原家本　寫　敬言卿注進　各有眞筆

上卿源中納言

文明五年四月廿八日

宣旨

從五位上藤原久守

宜叙正五位下

藏人右少辨（甘露寺）藤原元長　奉

〔歷名土代〕正五位下　藤懷兼　文明五五廿三、同十二月廿八左京大夫、

同家博　文明五五廿三、

從四位上　源仲淳　文明五六五、

丹重長　文明五六十九、

丹羽重長

〔丹羽系圖〕成長（改重長、宮內權少輔、典藥頭、侍醫、）　院內昇殿、施藥院使、○中略　文明五年六月十九日從四位上、

文明五年四月十五日

二十三日、癸未、足利義視書ヲ一條兼良ニ遣リ、進退ヲ謀ル、

〔尋尊大僧正記〕四寺社雜事記　四月廿三日

一、成就院ニ參申、今度自今出川殿御身上事巨細以御書被申大閤(一條兼良)了、自持是院方取進上、則被上于京極云々、今日聞之、先日事也、

○コノ事、月日詳カナラズ、姑ク本文ニ據リテ是日ニ揭グ、

二十四日、甲申、日吉祭ヲ停ム、

〔續史愚抄〕卅九後土御門院上　四月廿四日、甲申、日吉祭無沙汰、親長卿記追

二十五日、乙酉、賀茂祭ヲ停ム、

〔續史愚抄〕卅九後土御門院上　四月廿五日、乙酉、賀茂祭無沙汰、親長卿記前、宣胤卿記追、

五月　大盡　辛卯朔

二日、壬辰、太白輿鬼ヲ犯ス、尋デ歲星ノ變アリ、因テ諸門跡及ビ大和七大寺ニ命ジテ祈禳セシム、幕府モ亦之ヲ命ズ、

〔親長卿記〕四　五月十九日、晴、　今度變異占文

今月二日戌時、太白犯輿鬼、相去一寸所

天文要錄云、太白留輿鬼、大臣有疾病愼、

又云、太白犯鬼、萬姓勞、兵革大動、

又云、五星入鬼、天下有喪、

又云、五星入鬼、女主愼、

同十日、戊時、歲星犯房鈎鈐星、相去五寸所

郗萌曰、木星去房四表五寸、留不行五十日、天子失勢、大臣內亂、遂臣見誅、期四十日、

錢樂曰、歲星居舍房、經七十日不動、傷寒熱病多水災、卒死不出二年、

韓楊曰、五星犯房鈎鈐、王者有憂、后皇胎懷病、期半同、

文明五年五月十一日　　正三位賀茂朝臣在盛



齋藤妙椿ノ取次

變異占文

十日歲星房鈎鈐星ヲ犯ス

賀茂在盛

歲星房宿ヲ犯ス

今月十日戊時、歲星犯房宿、相去五寸所、
天文要錄云、歲星犯房、則天子愼之、
又云、歲星與房合、而大將軍愼之、
又云、歲星留房者、人君不修、而其臣有兩心、
又云、歲星犯房、國主不定、有內謀、而天下大亂、
又云、歲星犯房、天下有疾疫、而白衣之會連、

土御門有宣

歲星月ト會ス

五月十二日

今月十三日亥時、歲星與月會、相去一尺所、
乙巳占曰、月與歲星同宿、其年疫癘、大臣病死、
又云、多盜賊、刑獄煩、
又云、歲星犯月、卽有飢亡、
天文要錄云、月與歲星合、女主愼、
又云、强兵卒起、天下愼、
又云、歲星與月幷出、中國兵弱、
天地瑞祥志曰、歲星犯月、臣謀弒君、子逆殺父、

散位有宣(土御門)



御祈奉行

御教書ヲ諸寺ニ配賦ス

內典祈禱結願

又云、宮室大事、

文明五年五月十五日　正三位賀茂朝臣在成(盛カ)

〔親長卿記〕四　二月廿三日、晴、御祈奉行事、元長可存知之由、自新大納言(勸修寺教秀)許有奉書、令領狀了、

五月十六日、雨下、就變異諸寺御祈事、今日少々書賦御敎書了、相代元長也、元長小瘡之故也、

十七日、晴、朝雨下、神光院僧正(偸海)來、自一昨日三寶院御手替歡心院僧正御修法參住(仕カ)、武家御祈、爲見訪出京云々、羞湯漬張行一盞了、

廿一日、晴、就變異可被致懇祈之由、申諸門跡了、元長御祈奉行之故也、

廿七日、晴、參安禪寺殿、有御時、今日內典(就變異)御祈結願、自所々被進御卷數、

〔尋尊大僧正記〕四　寺社雜事記　五月晦日

一、天變御祈禱、七大寺被仰付云々、奉書到來、十七日奉書云々、淸水別當未補也、

〔大乘院日記目錄〕三　六月一日、天變御願事、七大寺被仰付之、去月中旬事歟、

亂ヲ奈良ニ避クルコト六年

〔東院年中行事記抜書〕○實暁記ノ所收

奉書到來、自寺務樣案文送給了、

六月一日、辛酉、晴、、、、變異御祈事、御

晴小雨下

三日、癸亥、變異御祈事、西大寺へ申了、

晴

十二月廿日、丁丑、變異御祈事、西大寺へ申下了、○十二月二十日變異祈禳ヲ西大寺ニ命ズルコト、大乘院寺社雜事記、大乘院日記目錄等ニ見エズ、依テ姑クコヽニ附載ス、

一條兼良、奈良ヲ發シテ美濃ニ赴ク、守護代齋藤妙椿之ヲ饗ス、

〔ふち河の記〕

後成恩寺關白（兼良公）

胡蝶此夢乃中よ百年の樂を貪り、蝸牛此角乃うへ二國此諍を論じ、よ一といひあしといひ、さゝかりそ兒乃事そのゝ、とふつけのくふつ夢てむと つ心をなやまじこ世をろう奈良、應仁乃むゝ一兒世の亂しより此のさ、花此都の故郷をい、あらぬ空の月日乃ゆきめくる思ひをなし、あらのゝ此名よ おふみとゞよ一てゝも、六の巻ゞ此春秋をおくりむのへにゝ、うた ふ一志夢きく竹乃、そ一にあゞぬる身をうれへ、おひちりおふるあやめ草乃、袂をのみそふる比よもなりぬれを、山の東みのゝ國よ、むさ一此ゝをけ此ものゞゞとのおけへきゆへあるのみ奈らに、高砂の松乃一ほ人おたよ一もあら



奈良ヲ發ス

さきは、さみさきうゞ此かきくもらぬさたよと、みのしろ衣思ひたり事あ ゞ此り、お此月のよろけにいひおる物をといふ人乃りゞれと、人此事をお らに、我身よとりてゝ、おの七日にむまきたれゝ、このへりてよた月と思ひ侍 る物をと有しうゝ、きく人おきそりとやおもむゞきゞ、さ起やとふ二日此あ 夢うさり、おらの京を立て、般若寺乃をえ、梅谷（山城相樂郡）おといひて、人もおれお ろすおき所々茂へて、かものゞ奈ゝの原ゞふまけなら此都出つゝ

三日ノ原

ゝめて、思ひつゝけ侍り、（同上）

かきふきゝあにを五月此ゝうの原ゞふより旅乃衣う芽山

泉川を舟にてゞさゞて、

渡一舟棹さに道ふ泉川ゞふよ

行旅新關ニ苦ム

おきよりー て、新關共を、世此ゝ奈れおおとよせて、おもふさはよたてをた

川ゝ、旅行乃さゝりと成よゞゞ、仁木なといへる領主のおさ〳〵をおー ら

へて、事もへおくゝとをり侍れと、心くるー き事のゝありゞゞ

さもおきそうき世乃旅おさにらゝめ道さはさけ此せたおとゝめきゝ、

近江朝宮ニ泊ス

伊賀の國（近江甲賀郡）あさ宮といふ所ふいさゞぬきゝ、日もやう〳〵をれうさよなり、

雨そゝふりて前路をとゞめんとすれども、夢のさく、行かゝんとてやとりもとゞくゝ、中々ねーとの
りぬへーと人々申侍れば、いそぎ、そのあさりに小家乃ある筏うりて、一夜をあら
ー侍る処、

行暮て雨も降きぬ朝宮をなさゞめりまして此宿やうらまし

三日、あさゐやをさちあ、野まり、とひのた、くらやをあと、きゝをならいぬ木
こゝ草うりならあは、かよはぬ所々筏過て、道のゆくあわ石山寺にまうて
ゝ、大悲者を禮し奉ほ、

さいきあ川世よをうこかぬ石山いあよなひうさた誓ひ也々り

濱乃關とうやい青蓮院の座主に申あとをり侍る処、松本をそた大津よい
ゑりて、過おしかさ筏うへりみて、俳諧の體をおもひにゝあ侍り、

をらほねいそやく過てた荷うき駄を大津の里にまいー休まむ

かくあそ此夜を坂本此宿よとはりぬ、七此会しろは柊乃さとというりあり
ゐ奉りて、

四日坂本筏出あ舟にのあとく、

老う身をまえむ千とせ乃坂もとお杖とそ頼む七乃神うた

濱ノ關

坂本ニ泊ス

舟行



堅田

けゝ浪やゝふを日よし乃船出をむおひ風おくまうらけきの松

されとも順風おけまを、ひねもす艫をおしてゆく、堅田（滋賀郡）乃浦よ船をよせく、
おーうさい堅田此うらにほすあゐ此めおうゝ乎川る山乃もおし

山あひ筏過る時、あらしいけしけきを、うさ帆よのせをうけてそーらまむ、
時の程あ三四里そかり過ぬといふをきゝあ、

朝妻ニ着ス

舟人此心つうひをゐえくけりはやをうさはもうせに任あ

醒井

よあ乃四時まそ川（犬上郡）さうといふ里に舟をよあく、まそらく休息に、おまより
夜舟筏いをーて、五日此やの〳〵（坂田郡）にあさ妻につきぬ、

柏原

やの〳〵とおさ川乃おこそはきよゝまさ夜をこめて舟出をしゐち
さ乎うち井といふ所、清水いそ祢よりおうは、一そちそ上より、一すちそ下を
乎なうれて、末ふあむとつよおうれあふ、まことやらむ、ゐ此ゝ養老乃瀧に
つゝきたりといへり、おいらくまゝますゝみく、

夏の日をむすへいうすき氷まて暑さやをうあさめうけ井の水

岩うあを別れく出はさ乎うね此流れや終よあふゐちの末

かしむ原よあ、（伊吹山）

文明五年五月二日

長比

伊増峠

鶯ノ瀧

吹風やまさしぬ秋を柏原はむろうしさは名はいうくれは
たけくらへ（長比）といふは、あふミすみ乃とは山ハ、左右ハ見す行所なり、
右ひさりミす過行はなふミちの二乃山そたすくらへはる
伊増たうけといふ（所イ）はみのはさうひはて、堅城とみえたり、一夫關はあさは
い、万夫すきうなぶ所といふへし、
此山は神やいまはと手向をむもミち乃ぬさいとりあへすとも
鶯の瀧といふ所ハ、とほりて、
夏きすいなく祢をはうぬ鶯は瀧乃ミないや流はあふらむ
藤川乃はしはけなはおちたるをみて、
すつまいやいすとしなミをわさはいうなうい絶ぬる藤河の橋
思へ君はなしなうはのさえはして万代ちきはをは乃藤うは
くはちはしといふ所を、
白浪いきしは岩まはかゝれとはすろちはしは名こそういらま
山中（同上）といふ所ハ過て、
かとゝきはをはうさ月乃山中はおほつうなくも音を忍ふ哉

山中

不破ノ關

不破の關屋をミ侍るに、なはとなくむうしおほえて物あはれなり、中御門（九條良）
攝政（羈）乃、あははし後はすゝ秋は風とよミ給し事なと思ひあいをられて、
なはいつなふはは關やはいさひさし久しくは名ハとゝめ々な哉
關屋の中はちいさはかこらはある哉、里人に尋ま侍はは、おはなすきよミ
いらをいはひ奉なといふ、まことやうの御代は、いくさ哉ふせうんとてさ
あられし事なれと、今は關のなうはもあらぬをミ侍りす、
清ミ原遠はまかりの名をとめい關のうさめはけはあらはあは
野上乃茶やにこし哉すすゝ、又されうさ哉、
旅人はめさはし草をすゝはにい野上は里にむるまをやさん
むうしきよミいらは天皇、東宮の位を辭し出家しす吉野山はいられ（入り給ひイ）しか
とも、な哉ゆなしなくて、大友の皇子にをそいは給ひしとは、むそかは山を
はうは出て、伊賀伊勢乃國哉をて、みのゝ野上は行宮をさてらはー事い、日
本紀なとはしはし侍はと、事遠ぶ事なれい、宮の舊跡なすすしうにしる人
い有かなうはへし、いまは草かりわらいは、あさゆふふミかよふミちとな
りはなるをみ侍りて、

垂井ニ泊ス

あけはなきい野上ゟ草茂ゟ宮の跡ともいふに分入ゝ往行

南宮ノ祭

五日のさはゟ時計に、雫る井(向上)のおゆくにつゑ、南宮ゟ祭とて、見物ゟ

ともゟら物さとかしくたちはよひゟり、風流ゟ山ゟさあ(かイ)とゟゑ、むゟーゟことくおらゑ、此所に遊女なゑあるへきにや杜牧ゟ珠簾十里楊州

路といへ事を、おもひおゑらへ侍りて、

青野原

あさいゟふ心おかけそ玉簾たるゐゟ水に袖もぬゑおん

又軒よゐやめ茂ふきゑさにこと、都よをいらさゑゝおゑ、

赤坂

我宿ゟ妻ふいあらぬゐやめ草今夜かり紙よゟさーきの床

六日ゟ早朝、雫る井をさちぬ、さちすゟら名所とをおくおわゑおゑ侍り、

あ茂のゟ原を過侍るは、むゟーゟ、うちおよーさゑ所と

かやいへり、

分行ゑ四方ゟ草木ゟ色も猶あをのゟ原ゟ夏ゟ一ころ

あゟさゟ茂おもとあ、(向上)

たゝのむゟ昔ゟ庭もふた鳥ゟあゟさゟ越て思ひ出つゝ

をねせ川といふ所茂、舟よあわさりて、



江口

渡ー守ゆきゝにまもはく井せ川月ゟ兎をよるや待らん

(妻渡和泉部)江口とゟふおゑ、攝津國よあゑ同名也、されと遊女なとゑおくく、夜よおゑはゝ

鵜飼ゟくるおと云をきゝあ、

鏡島ニ着ス

うかひ舟よる茂契きい是も又おおー江口ゟあそひなりゝり

七ッ打やとに、(向上)鏡島ゟ小庵よりく、院主かさらく、このほと共庵おけてる事

なりて、この二日こゝにうつゑはへり、おゝをい長寧院といふ僧の所をう

れるとおゑ、むらさたのゆゑのりともをさく所おゑい、よろりまおつ心やを

し、

齋藤妙椿來謁ス

七日、(向上)うれての持是院よ、かくをさゑたるよしをつく、三位ゟ大僧都(齋藤)妙椿、を

おいちきさりて、思ひよらけるよし茂いふ、さらはあをよりおを正法寺に休

所をのおふへきよしをおめを、旅のたゟゑおと紙むおろよ下知をくいふ、

をゑゝゝしゝれおもらしり、

正法寺ニ寓ス

八日、正法寺ようつる、此寺い禪刹の諸山也、由良門徒ゑて、山號をい靈藥山

といへり、國中最初の禪林おり、かさいらよ新造ゟ一寮ある茂、休所よのお

へて、うつゑすましむ、朝夕のおうけおと、くさゝゝしゝれゑ、おゑをよおよ

歌會
百韻連歌
妙椿ノ居城
法城庵
妙椿ノ猶子利國
利國傘良ヲ饗ス
土岐成頼ノ子美伊法師舞ヲ演ズ

なもさりなのら、鳳のあふり物、麟のやしまのなきたのりよや有々ん、

九日、歌の披講あり、

十日、連歌百韻あり、

十一日、正法寺詣むのひよ、城をつき池をふりくして、軍壘ののまへ(城イ)成おせまも、それいち舟をうかへてかりの(假イ)うちまいゐる、僧都つねよ居庵あり、山居此もまゐをまおひ、後園おとあまえさり、名作の本尊ともおほし、此たひ庵號をもと先一のハ、法城といふ二字をのきたりむし侍り、齋藤新四郎利國も僧都此姪おのら猶子よせまも、其乃人の館お行くみ侍きい、いつをもまたもらひく、武具ともとまならへ、なよ事もあらいそなもち打立へき用意也、さまおのら又風月歌舞の道をもそてさると見えさり、此所よしてと(政房)美伊法しといふ土岐美濃守源成頼の息男、生年九歳なり、回雪此袖をひるのへを、むまれなのらよして天骨淺得たり、むのし長保此比、東三條女院此御賀の試樂よ、御堂關白の長男、(道綱)宇治關白也、十歳のまらいまて陵王をまひ、次男(頼宗)堀川右大臣也、九歳よく納蘇利を舞し事思ひ出さま侍まま、古の舞と今此舞とを、手にのひあしふミな



とのたるへゝをともも、少年の人丹の骨をえて、人を感嘆をしむる事を、異曲同工といふへきよや、

十二日、猿樂あまま、彦春(松イ)といふ猿樂也、一場いてて後、美伊法師又舞臺よしてそでおとたりと覺えさり、

十三日、正法寺よて短冊の評あまま、詩の題を龍尾(尾イ)硯也、おの硯ハ東坡ゟ詩集よみへさるよや、さる硯のあまましゆへなま、抑作文乃事、久一く筆をさーおきく、ゐとゟゑもなく、韻聲なとも(ヒ)もまをてぬまと、僧都(都イ)おきりよをゝ先侍まい、廿八字をやう〳〵のきにゟ紙さるたのりなま、又方丈の前よ二株乃松をうゑて、みさひ鋤をまさをま事有き、追述一偈云、

鷲峰正法遍塵々　靈藥毒人還活人
五祖山中誰作主　栽松道者是前身

十四日、かゝミーまへのへる、たまたま〳〵下向の次(てにイ)、國中の名所舊跡をも歷覽したくも侍まと、此十一日よ細川左京大夫勝元朝臣卒去乃聞え有、東軍の棟梁かくのことくなまも、此きさゝに國さゟひよさ蜂起そることもやあ

芥見ニ到ル

らむ、おのらい通路思ふやうになおましたうさのひなるよよりて、後會期遙といへとも、前路やとをのるへくまいい、（勝元妙禮）僧都おものをもむきをおもひやーく、歸馬ふむちうつものならー、〇勝元卒去ノコトハ、十一日ニ其條アリ、

十五日、おとおおとことおー、

十六日、竹の内（曼殊院宮良尊）の僧正のあくた（同上芥見）ミの庄を一見をゑきよしおめに、よおり江口より舟にのりて、二里ばかり川つたひまさうのやる、因幡山（芥見郡）のふもと淺をくは路なり、此山と奥州より金の化來をゑよー、因幡社の緣起よ有とうや、峰に生る松といおゑやゆおそ山こうね花さく御代の榮をさなへとる麓の小田よいそくおり捨よくいおそ跡峰跡秋うせけふそ小雨巻ゝをそく、風いさゝうぬく、日入てうしおよいゑる、ぬ禄の中跡窮屈たへを、すおいち偃臥を、前後をしらを天明よ及ふ、あくる日僧正申けるハ、昨日そ涯分奔走をいさし、谷跡底まおりもと洗しうひをおく、にねにおとろかそとおりしうい、睡眠のきさしゝふ、やうて枕をかたむおし心よさゝハ、邯鄲遊仙のたのしひもかくこそと覺し也、そおよはさゑやとのもてなーい、こいろよくゝをおほえぬとおわらひ侍りき、

鵜飼ヲ江口ニ覽ル

十七日、又うゝみしはへうゑは、月出のやと、江口にいおゝ鵜飼をミおと六艘乃ふねにかゝりをさしおのやる、又一艘をはうおて、おれよのりて見物を、おやをそ此川乃のやりくさり、ゑみになおき、獵舟數をしらぬといふをきゝおゝ、

ゆふやゝに八十とものおのうゝをさしのやる鵜舟い數もおらおそ鵜乃魚浅とるをうゑ、鵜飼の手、繩をあつうふ躰おせ、おふいしめくゝ侍おを、おとのはよものへうさく、なをそれともおほえ、又興を催すものなり、

鵜飼人をるや手繩のゝーう夜もむそやゝおおいとくいあおしを

すおそち鵜乃そねさる鮎を、かゝりゝを火にやきて賞翫を、おおおうゝをやき

といひおらいしたるとおん、

とりなへぬ（ネイ）夜川乃あゆ此ほゝり燒めつらともゝ川哀とをみつ

十八九日、おとおることおし、僧都おそ〳〵來る、

廿日、歸南さんとにゝふすおそちち鏡島をたちて、もと北路をへて、垂井にいさは、民安寺といふ律院にとまおし、駄餉おとい、僧都乃被官人をうや此なよかしにおやをりきて、禄むところおる事ともあり、をゑ〳〵しけおはもら

鵜飼ノかゝり燒

歸途ニ就ク

垂井ニ至ル

後光厳院小島行幸
其御舊趾民安寺ニ在リ
御手植ノ松
美江寺

じけ、はとや文和の比、後光厳天子、南軍におそはれし〳〵あま、小島よ行幸
乃ありし次ま、此寺よをわさらさ給ふまとあま、行宮比いしすゑなと今に
あり、楼のとた身つゝらうへさ勢給へる松の老木とありてゐる茂きて、
世ふおやふ君ゝ御ゝ夢に壹くふらし民やそかまとうへし若松
あふたゝやいふそ、たはゐよりおりさなり、名崎（寄イ）に青墓（不破郡）里といへる、おひ比事
よや、

契あまい此里人ふなふいゝゝ又もたてみむ

美江寺（不破郡）といふた、かゝゝまおまよりも五十町たゝりをへ壹てたる壹いへ里、本
尊い十一面観音計、帳おとひ中ふをはゝまさす、うちあらい壹て人ふおゝ
ま往させ給ふ、利生茂ゝうぬるものおやしとなむ往来比壹をりに二度ま
うあゝ禮拝をいさそ、えんきなとをいしくたりぬるまいとはあらす、
壹比もしな佛ゐ人ゐみえ寺比とゝりをさ壹ぬ誓おもへい
廿一日、たる井茂壹ちての、道そゝらひ比名所、おろ〳〵さたゐおゐしをはり
ぬ、いふき比明神の鳥井そ北にあり、南宮乃鳥ねゐ南ゐあり、をの〳〵壹比
まへ茂そく、



歌枕ノ名所

美濃ノ御山
笠ぬひノ里
荻覧ノ里
喪山
わさみ野
舟木山
おふさノ橋
うるまノ清水
洲ノ俣川
養老瀧

又こむといふき比山比神ゐらハさしを契りし事お忘れそ
名を高た南比宮乃ちゝひとて山のむゝーの道そたゝしき
ゝ比ゝ國の歌枕ゐ名所、楼比所ゐいつくともしらねとを、よゝ茂にうかふ
事とを茂、筆のにゐゐゐたあけめ侍るへし、
まゐにきてみのゝお山乃松のうゐ比う経しさゝにもあま比そ衣
なゐ衣ゐ比ゝ中山こえ行そふもとふゝゆる笠ぬひ乃里
いつゐおそよおさはれる世茂まけとゝゝ比ゝお山乃むとつおゝろよ
時鳥荻覧比里におとらすいゐ、おゝ聞む夜半比一こゑ
そゝきゝ比梢有ともみえなくにさゐかも山とおつゐ初おん
明をれゐおけきうたゝ比ゐさみのよ猶分はよふ夏草比露
五月雨比もゝちを染るためしあらハ舟木の山のいろよこうれん
七夕乃逢せハ遠おろさゝ花のおふさ比そしをまつや渡らむ
東路のうはま比志水名茂うへゐおらしお旅よゐけ乃市人
鴎鳥比そのまゐ川よ月をめいあらハゐゐさは浪比下道
わうえけゝ見るよしも哉瀧の水老をやしおふ名にあうゐない

ぬき川

小島ノ里

近江番場ニ至ル

磨針峠　竹生島

西行法師ノ墳墓トノ説

席田茂織物あらいまき浪やいけぬき川のさまとあらまし

いく千せせらぎねらぬ御世を席田はつゑ此齢をまうしと推思ふ

芦うき此まちかき跡を尋ても小島此里にもたやすきぬ

世乃人のあさを結ふ此神あらといふ此らを心とけさらめやい

近江國ま番馬（坂田郡）といふ所より、路をうへあ南へ行番馬を物此名にとりなし

あ、

ゑくはのゝまさ末遠たくさいまを日かき此駒よまをしといまれ

そりいり峠茂南へくさゑとあ、右まうへりミきを、筑夫島（東浅井郡）なとかすかふみ

えく、遠望はあこ茂あらば、ふもとふを神田といふ所此一にな此田なとミ

も、又左のうさゑを拂ひえさる岩に松一木あゑ、そ此下に石塔あり、西行法

師うつうといひにさへせはとあん、

南行數里下陽坡、西望平湖遠不波、孤島屹然何所似、琉璃万頃一青螺、

旅衣やころひぬきやそり針の峠まをてもぬふ人のあざ

西行か歌に、ふういくは花乃もとまゑて春しあむ万此きさらを乃もち月の

比とを免ること茂おもむ出あ、



小野ニ宿ス

いかふして松乃このきにさやとはらん花のもとゝうい庵しとのそ

かをてさうし此むらふとはるへしとはさめしうとをとかくしあ日をくき

うさにありぬきさ、小野（坂田郡）といふ所まく行て、そ此夜さまは小庵ふ一宿しぬ、

今春太夫來逢く、一聲を出して羇愁をあくさめ侍り、

枕ゆふをのゝをさゝ此ミしうよを旅ふしあきいあうしかをつゝ

高宮

廿二日、小野茂ちく、たうと（犬上郡高宮）といふ所茂く、登しろあり、

ぬりいあゝ神さひよきりゑうあ此宮誰世まろくいゐをひ初きん

四十九院

かり人さ山ふまゝふくいむ事、（同上）四十九院を物此名よあらい妻、

みゑき行世ふ石ふミちの乃を此うしゝうくいむへきい此身也々り

愛知川

きかゝやういらは、水のあとをかりなり、

過行そゑうゝやういら水もなしまとしいおそを五月雨此比

觀音寺

えち（愛知郡）河をそくとあ、

えち川乃さあさ浪瀬々よ行水の哀をまらぬ袖もぬきゝり

觀音寺といふ山寺茂ミ登りて、お此名を諸國にゐゑよや、ゆさゝうう聖廟此

御詩歌思ひ出て、

あふことを心にくし此旅おれやたゝ鐘を聞古寺乃前

おいてもりよあ、

老蘇ノ杜

我袖よ駒もすさめぬまくひよてておいてもりよあ、

武佐ニ宿ス

わきおもひ老楽此杜の郭公をのうけうり此聲おおしこそ

妙椿伊庭某ニ命ジテ兼良ヲ送ラシム

其日は武佐(向上)といふ所よやとれ、

もゝしゝふ此ゆうきいさて楽なひくなるむへこそむさ此名も殘々き

廿三日、猶むさにとうまう浪、うちをくり此事、法印(俗都イ)かさより伊庭(良隆カ)ふ申つ事

水口

侍るう、三里をかりをきさあたゐ所へにうひみいあゝ、留守おりゝきも、伊

庭うさへつうひ乃行かへゐあいゐ、時刻うけるによりて也、楽此日も雨ふ

り風そけしくて、そよふの小屋此うまふし、おらいぬ旅乃ものうさ、いそす

とをきゐへし、

南來北望漢宮天、一夜紅邊聽雨眠、白髪更添新白髪青氈不是舊青氈、

廿四日、伊庭うさより兵士きされ、そ此日を雨風やま浪、水口(甲賀郡)浅もくと事、

雨ふきも小田此水口せ此もあへ浪もゐく蛙のおゐそあらそふ



馬場ニ宿ス

からうしあ五十町そのり行て、新宮乃馬場にいされ、禪侶の庵浅うりて宿

す、新宮ゝ山王よてましはもとかや、所此こゝり司なとれきり事、警固をい

さも、終夜雨風もおゝさし、

廿五日、馬場をさつとく、庵室よのさをく、

憶得三生石上縁、一庵風雨夜無眠、今朝更下山前路、老樹雲深哭杜鵑、

契りおらきも又あふこち乃うり枕結やすてん一夜もかりに

かきくは水口より伊賀(阿山郡服部)乃もとりにつくゐき支度なれと、洪水よ路と浅ゐ

事ゐもそうら浪、おおし國のうち、玉瀧(阿山郡)寺といふ律院ゐとはる、本尊ゝ藥師如

來にくまーはもといへり、

洪水ニ由リ伊賀玉瀧寺ニ宿ス

おうめむや玉瀧寺の空それて瑠璃の光ゐうけゐ朝日浅

廿六日、ゐふは日此きしれおをきり、玉瀧をきちあ、うは井(向上河合)といふ所をと浅

ゐ、むとつもしあり、高松宮も右ののさよありあこやは、牛頭天王にあまし

ま浪とのや、

河合

わさりえぬうれ世此波ゐおやゝゆふうきて猶おうれの光やとゝさも手向此てゐ此高松のこや

高松宮

北川といふ川（いまたイ）へさ水落ち、法印伊賀の住人におほせつけたるによりて、藤長あといふ者ともきたりて、おしをうたよろけくわさす、

いのへをを此五月雨に北川乃あさ瀬ぬき渡る人あらりせハ

又服部川をはさりて、菩提寺よいある、是も招提門徒乃律院あり、はう也此事ハ法印申にまかせ、伊賀のとをらけさせしむとなん、

菩提寺ニ宿ス

廿七日、なを菩提寺よ逗留ち、伊賀のものとをさはあさく抑留そる故也、

逗留

菩提樹下古精藍殿閣微涼來自南、暫借藤床兼瓦枕、駒々一睡味方甘、

活計乃うちよも、故郷此心を又わをきのさたよや有々む、

旅衣きのふも今日もをきをとはあやよ戀したなら此古郷

廿八日、菩提寺をたちて、上野小田寺なと云所茂とをる、さやまこゑ名き川此（同上）

水いまさはさはさはさのさうおへーとてうさたとをはにおもむく、島乃原川と（同上）

いふ河をはさはて、

島ノ原川

おまの乃原川を此浪乃うちわさりたやまこえをい余所ふなーつゝ

大河原といふ所き、伊賀と山城と此さのひなは、河原乃木石、さあうら前栽

なと茂ることくなをい、

大河原



苦むきる岩をふ松き大河原うい（山城相樂郡）笠置川をい舟よてわさは、ならよりむのへ此ものきをるよよりて、いう此をくりをいおをより返しぬ、歸落をいそくよをはて、山をい見やりたるもの り也、ことさらよこそおうてめとおもひ侍はきのふふふき雨ふらに、

奈良ニ歸着ス

ええおらぬと此山過ち、降し雨此うさたよきてき又をきふふり

妙楮兼良ノ上洛ヲ拒ム

雲乃上よそ此曉を待やとや笠置乃みね乃有明此月

秉燭乃時分、南都此宿坊よをく、お此後雨をおをさをさる、よくをにき笠置

まとまるへうはなり、

〔大乘院日記目錄〕三　五月二日、大閤殿下美乃國御下向、同廿八日還御、

〔大乘院寺社雜事記〕五十三　二月十九日、彼岸

一、關左衛門相語、〇中略、兼良夫人ノ美濃下向ノコトニカヽル、下ニ收ム、大閤御上洛事、不可然旨、河手申腹立云々、

〔尋尊大僧正記〕四寺社雜事記　四月廿七日、雨下

一、大閤三乃國御下向、今日御出門、吉日故也、來月二日可有御立也、

五月二日、夕雨下

文明五年五月二日

一、早旦大閤御出門、隨心(院脱實)院同道被申、御共松(忠顕)殿、新左衛門、判官以下也、依仰宗順召進之傳馬大市庄一疋、服庄一疋、自一乘院一疋被進之、人夫自松林院五人、自筒井方五人、但一人(山城相楽郡)歸之、和東(越)可至石山給云々、近日物忩之間、方々申遣之、梅谷事、自木津進人、賀茂、三日原渡等事、土橋參申、自和東至石山ハ和東北可參申云々、自古市申付故也、每事無爲珍重々々、御輿舁三人、馬三疋、人夫九人也、

五日、雨下

一、御輿舁等歸參、御書等在之、二日夜ハ朝宮ニ御宿、三日石山ニ着御、自青連(蓮)院被仰付、山門使節衆罷出、淀關以下悉以無爲云々、四日自坂本可被御般(渡カ)於朝(潮)端云々、就中、和東北方御送事無正躰云々、

廿六日、雨下

一、大閤還御事、昨日石左衛門來申、今日夕山ニ遣善賢、大川之間罷歸了、爲可有大水也、馬同遣筑前守方了、

廿七日

一、伊賀服荒寺ヨリ隨心院殿御書到來、御迎事也、巨細仰付巨(行)細、古市(黒榮)自身可參之由雖申入之、筑前(家侍)守可進之由仰了、畏入云々、

廿八日

一、大閤自三乃還御、予成就院ニ參申、無爲珍重々々、

○兼良美濃ニ如カン(ママ)トシ、其國亂ルト聞キテ、伊勢ヨリ還ルコト、二年九月五日ノ條ニ見ユ、又兼良夫人ノ美濃ニ往キ、遂ニ逝去スルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔大乘院日記目錄〕三　文明四年十月廿五日、東御方美乃國御下向、○東御方ハ大乘院尋尊ノ母ニシテ、兼良ノ夫人タルコト、三年八月三十日、寶壽院權僧正示寂ノ條ニ見ユ、

文明五年十一月十八日、小林寺殿入滅、六十九

〔大乘院寺社雜事記〕五十二　文明四年十月廿日、雨下

一、成就院ニ參申、東御方三乃御下向事申入之了、不可有子細云々、

廿五日

一、早旦東御方美乃國御下向、龍光院御共、赤丸每月爲御使令下向之間、爲案內者、萬吉、番阿ミ同下向御共、御輿綱以下召上進了、就中立(直カ)志院殿御上洛、至京都御同道、御輿舁以下召進了、人夫(野田一人、乘院一人、法)一人、自一乘院一人到來云

夫人東御方奈良ヲ發ス

逝去

夫人一行

々、此人夫幷輿舁八明日可歸者也、至美乃者京都之輿舁人夫等也、(大和生駒郡)至秋篠、北面以下御送ニ參申、自秋篠至下狛(山城相樂郡)者秋篠ニ仰付之、自下狛至京都者自下狛古市陣可奉送之由仰付之了、無爲珍重々々、

廿六日、自夜前風雨

一、昨日御送人夫等歸參、八幡(綴喜郡)幷院殿ニ著御、鳥羽米商人與山名當取事有之故、路次不叶云々、今日可爲無爲云々、

十二月十五日

一、赤口自三乃上洛、(中略)、東御方八幡ニ御座、明春早々可有御下向云々、

〔大乘院寺社雜事記〕五十三　文明五年正月十八日、大雪下

一、赤口進八幡了、東御方三乃御下向事申沙汰故也、粮物五百疋引違進上之了、此次御樻一荷、圓鏡一面進上之、人夫七鄕二人申入寺務了、

廿三日

一、東御方自八幡幷院、御下向三乃國加賀(石川)嶋殿今日也、

二月六日

一、東御方去月廿三日自八幡三乃ニ御下向云々、無爲祈念申、每日仁王經讀

夫人八幡ニ寫ス　美濃ニ著ス　尋尊無事ヲ祈ル



之了、

十八日、雨下

一、關左衛門　赤男自三乃罷上、自足心院殿書狀到來、東御方當月二日御着給、路次無爲珍重云々、畏入者也、此間每日仁王講行之、其驗也、可仰、

十九日、彼岸

一、關左衛門相語、東御方御下着則自河手(京都紫野)院持譽米二駄、料足五百疋、紅梅鹽引等濟々進上之云々、龍光院書狀同前、

三月十日

一、龍光院三乃より上洛、

廿七日

一、石左衛門三乃下行、蚊帳二帖遣持是院方了、

〔尋尊大僧正記〕四　寺社雜事記　四月廿一日、風

一、石左衛門自三乃上洛持是院返事到來、先日蚊帳悅入之由也、

〔大乘院寺社雜事記〕五十四　八月五日

一、美乃龍光院書狀到來、去月廿三日書狀也、去月一日より東御方御違例御

妙椿醫師ヲ進ム　瘧氣云々、一向不食迷惑云々、四日竹内門主龍光院等馳參鏡島殿、持是院方より醫師福富召進之云々、老躰返々無心元者也、書狀則進覽禪閣了、

回復　〔大乘院寺社雜事記〕五十五　十月十一日

一、石左衛門持是院書狀持來、三乃綿五把送給之、東御方御不例悉以本復之由同人書狀、千萬々々忝畏入者也、祝着不可過之、可悦々々、

十九日

一、松殿、石左衛門、宗順、河合今日三乃國下向、持是院方禮用云々、自堯善方樝三荷色々遣之、人夫五个所二人、上下向七十文延食卅文宛下行了、別段事也、京上延食ハ二十文宛下行也、

十一月十七日

一、松殿少將等自三乃上洛、條々被申事、〇中略、齋藤妙椿、伊勢梅津城ヲ攻陷スルコトニカヽル、十月二十九日ノ條ニ收ム、

一、龍光院違例以外也、

一、東御方御違例珍事、去十二日御出家、大略不可有正躰云々、珍事迷惑事也、巨細竹内梅津殿御狀在之、

夫人復タ病ム出家

逝去　小林寺ニ葬ル

十八日

一、成就院ニ參申、姬君カミ置在之、二歲、

東御方間事無心元、松殿物語分大略不可有正躰云々、可被下人之由申入了、予合力分可進者也、定而十二日三日間ニ治定歟、不知實否之間、不及籠居者也、門跡上下悉以竪義方隨其役之間、一人モ不可具、予可有成就院源氏間也、殿上人諸大夫御侍等在之間、可召仕之由申入退出了、

廿一日

一、爲聞三乃國東御方實否、今日差下石左衛門了、百疋粮物下行、彼御事爲實事者、梅津殿、竹内殿以外迷惑也、予千疋分可合力之間、料足事可替旨同仰付了、

廿四日、小雪

一、東御方御違例事、去七月一日邊より蒙云々、自四日御ヲコリ、

十二月三日

一、自三乃國注進到來、東御方去月十八日巳時御入滅、臨終正念、六十九歲、同廿一日於小林寺御葬禮、瑞龍寺長老、梅寺衆僧等參入云々、梅津殿御大儀也、御

葬禮方六千疋餘入了云々、此內御所樣千疋、予千疋、持是院千疋足付了、則
予隨心院殿同所居住成就院源氏間、爲籠僧善久房澄祐房召置之、六時勤
行沙汰之、二時光明眞言唱之、供具燈明等如常云々、良祐召置之、兩殿被籠
者也、東門院僧正爲訪被來、

四日、雨下
一、小林寺殿法名淨貞道號松室

五日
一、訪衆、一乘院殿入御、禪閤、予、隨心院、門外出對、東北院僧正、筒井律師、筑前守、
春覺律師、松林院僧正、
御師祐松、慶、淨土寺坊主、小塔院ハ昨日來、

七日
一、小林寺殿三七日佛事、於淨土寺如形始行、隨門御沙汰也、明日ニ相當者也、
一、訪來衆、慶英、吉田、見塔院、藤鶴丸、與四郎、卜一撿挍、師淳、古市、山村、權中納言、
仁英得業、極樂坊主、楢原代官、鷹司御使、

九日

三七日佛事



一、自淨土寺盆三其外色々送給之、
一、訪衆九條殿、內府御使經胤、菊法師、三郎、德阿ミ、寬尊大僧都、顯融、昨日來訓英、
泰俊、

十日
一、大安寺長老樋坊訪來、

十二日
一、源信房僧都訪來、幸德井三位同、

十四日
一、明日小林寺殿四七日也、百疋遣小塔院羅漢供方也、

十七日
一、春圓大繪所筑前法橋、陽明御使訪來、凡一樽等進之、
一、〇上略小林寺殿御後事等方予千疋進之、渡攝津殿請取到來、爲亡者畏入者
也、

廿二日
一、今日三十五日也、佛事如形於白毫寺修之、

四七日佛事

五七日佛事

一、爲訪光守律師來、

廿四日

一、六七日佛事於淨土寺修之、百疋下行、

文明六年正月七日

〔尋尊大僧正記〕五寺社雜事記

一、今日相當小林寺殿四十九日間、丙々所々巡禮之奉祈彼御菲、福智院、新藥師寺、法花堂、二月堂、念佛堂、大佛、中門堂、戒壇院、講堂、知足院、般若寺、眉間寺、當寺七堂、稱南圓堂新淨土寺、極樂坊也、

二月廿八日

小林寺殿百个日也、於極樂坊逆修、予奉訪之、予多年舍利塔造立之、未演供養間、以供養之儀式爲法會導師大安寺長老良纂房捧物杉原十帖盆一枚送之、僧料一石弁貳百疋送當坊了、願文禪閤(一條兼良)御草、清書四條(隆量)前中納言、予爲聽聞向極樂坊萬陀羅堂北方東第三間也、無爲無事也、可喜悅、

夫以閻王造五逆、猶因韋提希子、不妨彌陀攝取之光明、釋尊具十號、辱爲摩耶夫人、得遺忉利安居之說法吁嗟大權聖者、不忽孝順之道、何況(祝カ)薄地凡夫、寧忘乳哺之恩耶、恭惟先妣小林寺殿禪定尼淑靈柔和、刻心慈仁及物、不啻



六七日佛事

盡日

百ケ日逆修

願文草一條兼良

清書四條隆量

身備婦德、常獲口唱佛名、然自去年七月之比、罹寒瘧之憂、遂以仲冬十八之日、赴冥路之旅、悲哉、呪咀之方無驗、娑婆之緣有涯、哀而更哀、恨而猶恨者、隔終焉於江東之地、叫嘆某(マヽ)於城南之天、碧落歟、黃泉歟、訪亡魂於何方、經卷在、藥爐在、付活計於昨夢、抑亦修何等功德、容易救彼人迷淪、尋尊因憶曾爲後世菩提、聊有平日願望、其故者、則露地之上起三尺多寶塔、水精之中納數粒、設刹羅縱橫之檻、盡金碧丹青諸莊嚴、左右之扉畫彌勒地藏二菩薩、結搆之企雖粗具、供養之儀尙未成、幸矣、今日迎百晬之忌辰、整一會之法席、乃屈請大官大寺長老良纂大德唱導師、便就元興寺之別院極樂坊之名區、調梵唄之音、獻香花之禮、人不知乎、此伽藍則智光法師留掌中之輪具、彌陀如來放眉間之白毫、喜報昊天罔極之恩、恣卜淨土有緣之地、觀夫二月之香落衣兮、似洒天華四種之雨、一枝之梅薰袂兮、不讓海岸六銖之香、時節相應、機緣純熟、只願答孝子之懇念、遂先妣之往生、然則五障之雲速晴、而圓明秋月朗法性之空、三從之風頓息、而莊嚴春花開菩提之樹、乃至餘勳所及、鎭事盡虛空海之諸佛、普濟微塵刹土之群生、所願趣蓋以如斯、稽首敬白、

文明六年二月廿八日　　弟子前大僧正法印大和尙位尋尊敬白

多寶塔ヲ建立ス

導師眞纂

一周忌

〔尋尊大僧正記〕六　寺社雜事記　文明六年十月十三日

一、來月十八日小林寺殿一廻也、其前八萬四千基之五輪可奉摺寫者也、今日摺初之、杉原二束六帖也、一枚ニ六十八基摺之、今日六十八枚摺之、

十一月十八日

一、小林寺殿御一廻也、予時濟、佛事於極樂坊修之、一石百疋下給了、八萬四千基塔摺寫之、被延供養了、夕方予極樂坊參詣了、

〔大乘院寺社雜事記〕五十六　文明六年四月十四日裏

請取申小林寺殿御佛事料

合貳百疋者

右攸請取如件

文明六年二月廿七日　極樂院順圓（花押）

竹內殿

〔參考〕

〔美濃明細記〕十　舊跡　厚見郡下河手村　一靈藥山正法禪寺　相國寺派、在河手城之北、尊氏之比、土岐大膳大夫賴康美濃守護河手在城之時建立、代々之菩提所也、土岐美濃守成賴之時代、執權齋藤越前守利藤號持是院權大僧都妙椿、依歌道謁一條大閤兼良公、依之文明五年癸巳五月二日南都發、

〔美濃國記〕　常在寺ノ事

○上略　利藤ヨリ日蓮宗ニ歸依メ、革手府ニ持是院ヲ建立シ、其晩年自此ニ居ス、文明五年ニ、一條兼良公筆額ヲ求テ法城ト云リ、此兼良公ハ文殊ノ里ニ居住アリ、歌ニ、

舟木山糸貫川の川上にゝふハにをりて明日やきの里

舟木ト云ハ文殊邑ノ事ナリ、○略　○中略　扨利藤法名ハ妙椿ト號ス、○中略　寶德三庚午年三月、京都ヨリ妙覺寺ノ住特世尊院日範僧都ヲ請メ、岐阜山下厚見郡今泉ニ一宇ヲ建立シ、鷲林山常在寺ト號ス、寬正六乙酉年八月、一條關白兼良公ノ額ヲ求メ、寺號ヲ書賜ルナリ、

〔美濃明細記〕四　寺院　厚見郡キフ　一、少林寺、イ勝林

五日乙未、賀茂競馬、

〔親長卿記〕四　五月五日、晴、詣賀茂見物競馬、冷大納言（氣富）、父子、政顯（勸修寺）等同道、

七日、丁酉、山城大和疫癘流行ス、是日、興福寺、藥師圖繪供養ヲ行ヒ、之ヲ

祈禳ス、

〔東院年中行事記拔書〕〇實曉記八所收　五月七日（晴滿）、丁酉去月以來疫癘以外世間ニ增倍之間、爲除病延命、藥師圖繪供養在之、人別錢如先々遣之、呪願東北院前大僧正（俊圓）、導師淨法院（任圓）僧都出仕云々、其役ハ凡人方出仕歟云々、卅日（晴夜小雨下）庚申、病患近日增倍之間、爲祭事簒ヲ三度打て、目數用却ヲ出シテ赤飯幷三木打用意シテ、伊勢大神宮ヘ手向テ、其以後面々令祝着之者ハ無病災云々、彼三木等備進之時ノ歌ニ曰、メイトヨリマウコノウシソキタリケルハマフキカヘセイセノ神風ト可唱云々、今日於當室目出沙汰之人數、修南院、光明院、禪公、予、行專房、加賀丶、宗圓丶、良禪丶、土佐丶、對馬丶、春（光）敎等也、夕飯之時分面々會合了、〇細川勝元、疫癘ニ罹リテ卒スルコト、五月十一日ノ條ニ見ユ、

〔尋尊大僧正記〕四　五月六日、雨下

一、報恩院法印來見參、明日藥師圖（繪脫カ）爲密供養云々、

七日

一、今日供養衆僧衆孝乘威儀師、注記兩人、

〔大乘院日記目錄〕三　五月七日、藥師圖繪供養、開眼有俊法印、導師淨法院、主願東北院、

八日、戊戌、前相國寺住持周鳳（瑞溪）寂ス、

〔翰林葫蘆文集〕七　興宗明敎禪師行狀

師諱周鳳、號瑞溪、日本國明德辛未（五年）之冬佛成道日、生於泉州界南伴氏、旬餘州亂、逃居丹州桑田郡、應永己卯（六年）年、師已九齡、丹州又亂、明年庚辰（應永七年）、父沒于軍事、擧家離索、偕母入京師、託外祖母、外祖母有異母兄、爲浮屠氏、曰性菴主、少林明極（楚俊）之孫、單丁住菴本色之士也、外祖母以師囑焉、菴主知其非常童、撫養者五年矣、甲申年、師十四、依先（宿カ）無（周伸）求於相國、無求領住持事、便命隷名本寺、無求乃正覺（疎石）國師晩子、幼而敏捷、碧岩集百則過目皆誦、稍長工於偈頌、法門昆季間、與絕海（中津）尤親、後歷住天龍、南禪、門庭峻峭、無敢湊泊者、其塔院在東京者曰壽德、今相公改額慶雲、在西山者曰大慈云、丙戌（二十年）年、師十六薙髮、十七披衣受具、十八侍藥大周、癸巳（二十年）年師二十三、無求遷化、心喪畢事、二十四侍香嚴（周猥）中、居擇木寮、戊戌（二十五年）年師二十八赴南京、寓興福寺佛地敎院、從普一玄啓二講師、々々々者皆律家眞虎、兼精華嚴宗義、師探頤於圓宗、普一師所祕之五敎章纂釋三十九冊、一手寫之、告辭北歸、適嚴中住鹿苑院、師寄几硯、嚴中徒弟太多、命師誨之、庚子（二十七年）年三十、結制

傳記
和泉ニ生ル
父軍事ニ沒ス
周伸ニ依ル
披衣受具
周疆ニ侍ス
南都ニ遊ビ律華嚴ヲ學ブ

相國寺東藏主寮ニ居ル
母ノ喪ニ逢フ
義教ニ知ラル
景德寺住持トナル
等持寺住持トナル
義教ノ命ヲ帶テ東國ニ使ス
入東記ヲ作ル
相國寺住持トナル
相國寺住持ヲ退ク
壽星軒ヲ創ス
鹿苑院ニ入リ僧錄司トナル

在相國東藏主寮秉拂、五月丁母憂、職未解奔葬、而乏于資、盡賣所藏書籍、以辨喪事、天性至孝、永享庚戌(二年)年師四十、轉于後板、丙辰(永享八年)年四十六、居第一座、是歲半夏相國丈室大開頌席、以扇面壽星爲題、普廣相公台旆入山、師爲之遨頭、且書且諷、相公一見以爲有道衲子、秋八月降鈞帖住景德寺、○永享八年八月四日ニ其條アリ、就壽德先廬受請、陞堂開法一香供無求、明年夏末相公俄命師住京之等持寺、○永享九年八月十一日ニ其條アリ、一住四年、于時關東有軍旅之事、相公令師往諭、○永享十一年二月十九日ニ其條アリ、著入東記、自京至關以東途中所歷名山大川佛宇僧廬、記而不遺、讀之如東遊者、庚申(永享十二年)年相公修造八坂塔、四月十六日作塔之供養、擧十高僧以嚴法會、師當其選、同年秋相公延師自等持董相國官寺、○永享十二年二月二十九日ニ其條アリ、朝野歡抃、緇素馳賀、如一佛出興也、嘉吉辛酉(元年)相公遽薨矣、夏了撾退歸先廬、諸子胥議、剏軒於相國寺之北邊、爲師退居寮、師名以壽星、壁間掛壽星像、人皆不待揭額、而知軒名爲壽星、此像昔鹿苑相公迎諸尊宿於北山甲第設齋、各有所賜、無求賜此像、僧錄司大岳(周崇)作詩賀之、一時盛事也、師始受知普廣相公、亦在扇面壽星頌席、又有以東坡壽星竹軒眞蹟贈師者、此詩此像二物併按似不偶然、故有此軒名矣、癸亥(三年)年掃崇壽祖塔、文安丙寅(三年)年師五十六、住鹿苑院掌僧錄司事、○文安三年十

鹿苑寺ニ遷ル
再ビ僧錄司トナル
北禪菴ヲ創ス
戰亂ヲ北岩藏ニ避ク
三タビ僧錄司トナル
疎石ノ頂相衣盂ヲ齋シテ參內ス

月是月ニ其條アリ、明年謝事歸先廬、戊辰(五年)年遷北山鹿苑寺、歲餘山下豪民誘官家欲奪寺之田地、期未滿而退、康正丙子(二年)年師六十六、迫公命再掌鹿苑僧錄司事、○康正二年二月是月ニ其條アリ、而經五年、々七十解印歸老矣、搆斗室號北禪、以在先廬之北也、閉門謝絕人事、學者仰之、如天不可梯也、寬正甲申(五年)年師七十四、相公(義政)請師、就三時知恩院講法華經、拒而不允、相公臨場、藤夫人垂簾而聽、明年(六年)乙酉七月廿五日散場矣、錦綉香合贓金居多、分其半贈崇壽祖塔、爲繕脩費、餘以歸先廬、絲忽不爲吾有矣、應仁丁亥(元年)京師大亂、師布衣葛巾避亂於北岩藏、年七十七、耳目未衰、禪定之暇、抄書作文、發揮此道、方今天下瓜裂、以官軍爲東、以賊軍爲西、天子行在相府陣勢以固、相公又集吾徒以謀叢林之復舊、於是乎命師掌僧錄事、○應仁元年是歲ニ其條アリ、師任此職者三回、在古所未覩也、諸山公文僧中規繩、坐而斷之、無一犯法者矣、文明辛卯(三年)孟冬廿五日、天子勅相公、延師於行在所、將爲國師、々堅辭、其志不可奪也、相公奏曰、以天龍開山正覺(疎石)可爲國師、制曰可、天子宣詔曰、降南禪帖加以紫衣、師又辭而不可、天子嘉之、先是兩度斥南禪聘、其韜晦可知矣、師遂齎國師頂相及衣盂、詣于行宮、年八十一、扶杖上殿、宰相及百官皆謂體裁殊勝也、授戒法、安法名、代正覺表師資儀、加錫正覺、曰大圓國師、以爲七朝帝師、々

示寂

勅謚號

蘇軾ノ詩ヲ愛ス

坡詩胚說

黃詩杜詩韓柳文ヲ講ズ

承其三世而不墜其緒、不亦大乎、癸巳(五年)年六月廿四日、値普廣相公遠忌相公建普廣院於陣中、營諸般法事、預請師陞座說法、隨辨隨請、鈞命迫焉、師曰、今年八十三、命在旦暮、況忌辰有餘月乎、且待之、五月四日示微恙、行道不怠、七日召諸徒在城中者、使作冷陶伴食曰、是訣別也、汝等去矣、八日早晨笑談自若、據座逝矣、顏色如生、諸徒塔其全身於北岩之麓、瘞履之後十年、壬寅(文明十四年)適當先帝(後陽)花園院御忌、天子追慕師道風、勅謚興宗明教禪師、輔教重寄不在斯乎、師少小癖于坡詩、年十五侍無求於崇壽、有椿齡中者、在其會下講此詩、纔數紙耳、師聞之、有欲學此詩之志、其後懶雲翁、巖中、蕉雪翁惟肖禪餘玩此集、師謁來二老門、粗得一二矣、又一時諸彥之論、面而問者、耳而聞者幷錄、號坡詩脞說、蓋每句下擧諸說、至未判其優劣、師古注漢書之法也、古人所未注及苟有左證則筆之、是脞說之作也、有客詰曰、釋氏之徒醉心於儒家者之詩集、爲有識所嘲、師解曰、坡公身爲戒禪師再生、而拜照覺爲師、佛印付雲山衲、佛惠點智海燈、如文關西夫鐵脚大通小本皆與之肩拍袂挹、又參寥、海月、惠勤、惠思、琴聰、蜜殊之輩從而遊矣、一箇冠巾老和尙也、曰釋、曰儒、假也、妄也、不二境中何異之有哉、客矍然而起曰、某服矣、又爲後進講黃詩杜詩韓柳之文、五十歲以來講圓覺、維摩、金剛般若、々々心



經、楞嚴、楞伽、盂蘭盆、法華梵網、起信論等、又讀傳燈等諸錄、鞭笞四來焉師以隱退爲心、蚤歲號臥雲山人、普廣相公當軸之初、三條內大臣招師私第、欲使講坡詩、師謂金口以親近國王々子大臣官長爲誡、縱講佛書猶爲不可、何況外典乎、大臣爲相公外戚、人畏其威、師確乎不屈、○周鳳、去年自ラコノ事ヲ記シ、周麟ノ勘メニ因ルト云ヘリ、二月二十二日周麟示寂ノ條ニ收ムル綿谷和尙行狀ヲ參照スベシ、又名師碩德之門、好名之士奔走、而師獨不矣、唯所從游懶雲(周悰)蕉雪(仲芸)與天章(彦澄)耳、天章負命世才、眼高四海、斥前相公寵命、移茅入深、時輩儻得見之、則託以登龍、而與師定忘年之交、批于詩、叙于脞說、跋于四六藁、加之寄書期師以武丘、堆雲、眞淨、湛堂諸師之樣、晚歲說法廣大、果如其言也、蕉雪一代僧、望片言隻字、貴於金璧、勝定相公延居相國西堂、蓋重其人、兼使此山重也、師年二十、日侍席下、蕉雪使師製四六、則日煩大手筆、讀其四六、則日得此文者生前面目也、見推奬如斯、師平居淵默、臨事廉明、江湖諸老有諸法語、皆借潤色、後生晩學、袖詩之傍門、一覽是者添削之、非者卷返之、不以一言當人情、楷法尤妙、始學西丘竹菴書、中年自成一家、獲其寶墨者十襲以藏焉、官寺紛冗、有事未決、寺官謀於師、一言而定、惟理之所有也、建議立論、非兼利天下不爲、凡住山不私一針、護惜常住、意小不合則脫屣而去、故法幢之所臨、廢者修之、絕者興之、懦

夫貪夫有立、有廉、有檀越請佛事、或陞座、或拈香、一切辭之、一室蕭然無異玩、兼味淡如々常僧、有尊宿以來未有如此也、嗚呼盛哉、自稱羯羊僧、號竹鄉子、又號刻楮子、有刻楮集二百卷、四方之書莫不讀、讀則莫不抄、所謂二百卷是也、大藏經七千卷在刻楮內、纔爲七冊、則所讀之書不可勝數矣、語錄二卷、四六一卷、文集詩集若干卷、入東記、溫泉行記各一卷、善隣國寶記三卷、夢語錄一卷、脞說二十五卷同補遺一卷、日件錄六十餘卷、並行于世、師之小師希宗友派藏主、爲人敦實、師所鍾愛也、今年癸卯（文明十五年）吾國入貢于大明、差前相國子璞禪師爲正使、々々以希宗爲從僧、希宗曰、某久欲觀光於中華、今也時哉、其意在求師塔銘及語錄外集序跋、仍命余（周麟）記師之行實、余辭以不文、然而余寓北禪室有年矣、其家世之本支、出處之次第、師友之淵源、竊聽緒餘、佩服惟謹、希宗請而不已、遂漏萬分之一、且告希宗曰、吾船著大明之日、先問在朝大儒之以史文鳴於當世者、吾禪林宗匠之以正知正見儼臨於人天者、卽時拜趨其門、而求其所求、若載船中以歸則不啻光輝吾師之道、爲吾國不朽之榮也、謹狀、

羯羊僧竹鄉子刻楮子

刻楮集二百卷

著述

弟子友派明ニ入ル

友派塔銘序跋ヲ明ニ求メントス

義政ノ問ニヨリ雪車ノ義ヲ對フ

〔蔭凉軒日錄〕　寬正二年十二月十二日、雪車之義可註進之由被仰出也、雪車之義奉問瑞溪和尙、答曰、雪欲降之時、必有地動、喚爲雪車云々、仍披露之、伊勢七郎衛門奏之、

廿日、奉報當軒御成幷點心之事也、御點心幷御祈禱疏御銘被遊也、疏之數被尋下、答曰、其數百三十六云々、談餘有梅花曆之事也、梅花曆意、冬與春何是否之事、奉咨問瑞溪、答曰、冬乎之由被申也、山中無曆日、寒盡不知年、又寒盡已知年、不識何人詩也、舊年之義可乎之由被仰出也、御祈禱疏持參之、諸老宿被參侍、御銘被遊以後有御對面也、奉報來晨景愛寺御成之事、（寶鏡寺殿御入院也、）此梅花曆出處問御相伴諸老、當山住持雪庵和尙書而贈之曰、詩學大成第八、冬至、山中可是梅花曆、開到南枝便是春也、

義政ノ問ニヨリ梅花曆ノコトヲ對フ

〔臥雲日件錄〕二　日件錄第七十三（文明四年壬辰自七月至十二月）　慈雲西軒

十一月十四日、凡史記予二十歲聽瓘叔折居利見軒、爲一二少年、講史記列傳、予陪席末、而以無本爲憂、嚴密印時居西山東源、聞此買玉泉塔頭給圓賣此本、而以付予、蓋價五緡也、

史記列傳ノ講義ヲ聽ク

〔臥雲日件錄〕一　日件錄第十四冊（寶德三年辛未自八月至十二月）　壽德東軒

十二月十七日、讀杜詩二十畢、寶德元己巳五月八日、於鹿苑寺開講、至今凡三十三月而結局也、予三十三歲寓相國方丈嚴中席下時、西胤西堂居于考祥軒、

杜詩ノ講義ヲ西胤得嚴周噩子踰惠供ニ聽ク

講杜詩自一至五而已予聽此講爾後西胤居勝定又講之自十七至二十後十餘年就双桂和尚求聽此講纔五六卷耳蓋所未聞之卷也中間聽嚴中子瑜元璞講或兩三卷或四五卷而止矣諸老之義略記所聞向來爲蝦西堂所告皆是也

周鏡ノ爲メニ四六體疏ヲ說ク

〔臥雲日件錄〕一　日件錄第五　文安四年丁卯五年戊辰至十二月文安五年戊辰二月六十二日周鏡藏主袖疏艸來求講明因告之曰今時四六唯以對偶爲好故意不到者十而八九也

〔臥雲日件錄〕一　日件錄第十一　寬德二年庚午自正月至六月　壽德東軒

正月五日齋罷抄梅野的聞十六予就現住東福柔勝剛借此抄就中抄取者過半試手於戊辰秋畢功今日名曰梅野的聞蓋勝剛少壯聞江西講者再三漢字和字相半而書之梅野乃勝剛齋號也

梅野的聞ヲ抄ス

〔臥雲日件錄〕一　日件錄第廿九冊　康正三年辛丑三月四月五月　鹿苑院

四月八日南補(諏)長老來因出慧關山所書瑞溪二大字拜印子蓋此老本以此爲別號然避於予號改爲瑞雲予曰其號亦國師所書嚴中和尚賜之令爲予號一號二幅无用辭之不聽强留而去

瑞溪ノ號



過午ノ食ヲ禁ズ

〔臥雲日件錄〕一　文安三年七月廿八日自此日禁過午之食昨日眞如長老來自陳住山以來持律齋戒之由予謂過此道不必在戒律中然今時破戒無慚滔々皆是矣眞如誇說不亦宜乎教內曰一切有情皆依食住蓋食亦諸欲之尤也節之則可也予中年以來欲禁過午之食但稟性惰弱不修杜多行故未免爲口忙耳矧與朋友會合不與衆同味則有一人向隅之嗟又平日患頭風々起於空腹爲之間用藥石耳今幸獨居不與人會如頭風則未足深患者乎

日工集ヲ讀ム

〔臥雲日件錄〕一　日件錄第五　文安四年丁卯五年戊辰至十二月文安五年戊辰自正月至六月　壽德東軒　大慈菴

十二月八日南榮凭几偶看慈氏日工集應永六年癸丑正月十日記曰今時例就于方丈室爲住持本命祈禱是乃取唉於識者云々予景德等持相國三處住持乃至鹿苑之日未嘗使徒弟祈禱幸覺有識之唉乎今日予生辰也殊有感於懷故記之烏乎六十年前諸尊宿猶有此弊則今時不足嗟而○以下缺ク

自己ノ爲メ祈禱セズ

〔臥雲日件錄〕二　日件錄第六十冊　寬正七年丙戌自正月至六月　壽德北禪　大慈東亭北禪

五月十五日予檢昨日雜說冊子先是四十二年居母喪時所記者也曰應永廿七年庚子正月遷相國東藏主寮結夏秉拂云々罷尙未得退近時歲旦解夏亦有秉拂一人兩回秉拂故也五月廿三日老母六十三歲卒于京之□條猪熊靜

母ヲ喪フ

居菴、相國住持咨于官府、許予退藏主寮、廿六日遷寓于東山雙林寺等接院內善住菴、

廿日、予赴靜居、此日立秋、菴之西有梧桐樹、一葉忽落、古曰一葉落而知天下秋、寔不誣焉、遂拾其葉書五字曰、庭梧飛一葉、就地手親收、誰信山中客、知天下秋□

相國寺東藏ニ居ル

京極高數ノ齋ニ赴ク

甲斐武田圖天神

男山八幡宮ニ詣ス

槐林寺ニ至ル

〔臥雲夢語集〕　北野天神受衣

○上略按應永二十七年庚子、予居相國東藏、入夏後數日、偶赴佐々木京極(高數)賀州齋請、惟肖和尚自少林來、與江西等諸老對談、肖曰、北野天神參無準傳衣、或以爲妄誕、然佛光(祖元)禪師定中入旛神君來請、佛光遂來于此方、由是天神參無準、又何疑焉、蓋此叱甲斐武田圖天神像、求洛下諸師贊、故肖翁有此論爾、○下略

〔臥雲稿〕　畫軸

萬年湖公侍者乃槐林(○槐林寺攝津三島郡高槻村ニ在リタリ、)一華翁之克家也、一日寄畫索詩、披而視之、某山某水、彷彿曾遊、不知夢耶、一再尋思而得焉、應永癸卯(三十年)春、予與公法叔大圭同詣男山神祠、遂訪槐林、循山而西者數里、臨河喚渡、時風浪大作、不可航之、憩津亭待風定、及晡始達前岸、比入寺既昏黑矣、今儻指殆乎三十年也、吁三人俱老矣、壯心何有、然來往風流尚不可廢焉、近者約大圭以再遊、而因循未果、則此軸宛勸予行、聊題小詩、卷而還之、蓋寫懷舊之情焉耳、請公持此呈翁、々亦不能無感於懷邪





法住寺ニ赴ク

攝津ノ湯山ニ赴ク溫泉記ヲ作ル

憶向津陽尋乃翁、槐林古寺暮村中、畫圖省識長河路、八尺輕舟一棹風、

〔翰林五鳳集〕五十二　丁巳(永享九年)十月望、赴法住寺相公伴筵、道中有感、

曾向山中訪隱君、青鞋蹈破半岩雲、白頭何計(料カ)陪台駕、野寺鐘聲官路聞、　瑞溪

〔臥雲日件錄〕一　日件錄第十四冊　寶德三年辛未自八月廿七日、南禪長老來、東禪和尚來訪、出白帷一領見惠、天下大老枉駕問閑、尚不勝感荷、別有此惠乎、深謝焉、話次曰、曾聞野寺鐘聲官路聞之句、全篇如何、予誦曰、曾向山中訪隱君、青鞋踏破半岩雲、白頭何料陪台駕、野寺鐘聲官路聞、蓋普廣相公一日到北山法住寺、予時自等持寺赴伴筵、途中有此作、其後又到九條大聖寺、予亦伴筵台駕入寺、先與景南(或又)季瓊(或瓊)參語、予偶誦前作、景南蓋記而不忘、今問之耳、八月至十二月

〔臥雲日件錄〕一　日件錄第十五冊　寶德四年壬申自正月至六月　壽德東軒

四月七日、早赴攝州湯山、有溫泉記、詩句等文長略之、

湯店舍八詠ヲ作ル

十一日、凡入湯者、諺曰入湯不入湯、蓋戒多浴也、予續以七事、遂演作八首、每首四句、每句五字、名之曰湯店舍八詠、然止於八何也、曰沈休文東吳八詠、及杜少陵秋興八首、蘇子瞻鳳城八觀、皆足以爲據、今不必取焉、山中不二其價者三物、薪一檐、酒一升、木履一緉、皆不過八錢、俗以表藥師八日云、予八詠亦擬焉耳、有詩一々不抄、

西山ニ寓居ス　栗亭ト號ス

〔臥雲稿〕　次韻和菴拾遺六詩〇五首略ス、

收得淵明故里秋、素封差樂勝王侯、鳳凰村裏栗亭小、我亦同風貉一丘、　栗里（四年）寛正癸未歲、予寓西山弊廬、就栗下構一間屋、戲號栗亭、末詩及之、

西山大慈菴ニ居ル

〔臥雲夢語集〕　髓餅

（文正元年）寛正丙戌夏予居西山大慈先廬、正法菴芳洲聯西堂、初來相見問其嗣法則選文江之徒也文江予少年每々會合、故今爲話舊焉、〇下略

鹿苑院東軒ニ居ル

〔臥雲稿〕　東軒雪中書懷幷叙

鹿苑嚴翁（周雅）丈東軒、先是其賢子弟互居、今茲冬輟以爲予所寓、爾來旬月間雪降數矣、然一室晏溫、團蒲盤膝、曲几閣肘、日遊睡鄉、雖氷酒折綿之寒、不敢畏焉、羨翁與物爲春之一德歟、感幸弗已、聊賦小詩、奉呈同社諸彥云、

家翁泛愛到幽人、一宇冬窩暖似春、衲被百鶉眠正穩、不知夜雪洒松筠、

西禪寺ニ宿ス

〔翰林五鳳集〕十七　經秋憔悴翠烟鬟、無復當時如咲顏、黃葉寺閑僧白首、夕欄吟立瘦於山、　秋後山容鹿苑寺　瑞溪

高雄寺高山寺ニ遊ブ

〔翰林五鳳集〕廿一　南渡詩僧老物初、西禪投宿夜堂虛、踈寒臥月嵐陰榻、心與故人同一如、　初冬宿嵐陰古寺、西禪寺　瑞溪

得巖ヲ訪フ

〔翰林五鳳集〕五十三　六七輩僧狂脫帽、二三里路渴思茶、山中敎寺小天竺、前後春臺無數花、　山寺看花、遊高雄高山二寺　瑞溪

〔臥雲稿〕　予懶而緩、不敢過閱人門、然双桂（得巖）禪翁爲一世龍門、畏敬之情須臾不忘、則所謂懶與緩無遑自（マヽ）而入也、故歲抄春首必袖刺行拜、如是者殆乎廿載矣、丙午（應永三十三年）孟春十一日、詣祇園神君、遂謁双桂翁、今茲亦然、聊綴小詩記焉、以爲每歲張本云、

去年今日祇林外、姸暖佳晴洛水東、童問梅花々有語、從茲相約百春嵐、

丁未（應永三十四年）夏季、余與會翁丈人同謁双桂老師、遂扛道扣巢（周鎭）雲主翁、々出迎升閣、避暑清風、左右咲語亦凉、人皆煩熱、我獨有無煩無熱二天、可謂樂矣、余謂曰、丈人與余正覺（疎石）之後而甲子皆辛未也、矧同學於双桂師席下、顧同門也、

玉田竹坡文叔ノ訪問ヲ謝ス

同年也、其志又同矣、然有一不同者知之乎、見丈人侍翁惻々孝慈之深形於其顔、豈非家肥者也耶、吁余離師已十五歲、單子獨立、今遊名父子間、莫千羨焉萬羨焉、夫謂之三則同而一不同也乎、丈人莞爾未暇措喙、余拂衣而歸矣、後二日贈小詩一首、轉供巢雲主翁采覽、

六月人間苦熱餘、松雲深處訪巢居、乾坤清泚贊公雪、大暑休言酷吏如、

〔翰林五鳳集〕二十四　壬戌（寶曆二年）殘臘、玉由竹坡文叔三藏主來訪、輒作此以謝、不忘舊之意云、　瑞溪

溫卷紛々走熱官、何圖三子慰衰殘、野梅猶被春風識、今夜門庭雪不寒、

雪夕獨坐、忽聽剝啄聲、起見之則竹坡典藏也、左玉田右文叔而來于不速、交情之深、於是乎見矣、歲暮急景、人皆翕々走炎、三客何人也、問予於荒寒僻陋之地、蓋與世背馳者乎、詩而謝焉、明日竹坡和到又寄一絕、同入京僧似出京官、樂事今年三日殘、名字偶然君類我、同遊不厭竹鄉寒

〔翰林五鳳集〕二十八　數日前玉田藏主來過、竹坡文叔從焉、一士千金足以貴弊廬、矧携兩賢乎、軟語半日暖、予凜冽、興殊不淺、叨作小詩謝之、後三日玉田袖和章又來、厚意加多、重用前韻以索一唉、　瑞溪



得巖ノ訪問ヲ謝ス

好句難於得好官、詩林喜子惜凋殘、臘天吟落晴檐雪、座客無氈不道寒、

〔翰林五鳳集〕二十九　雙桂師翁一日屈臨弊廬、仍用前韻道之、書以求心田擊節、　瑞溪

一翁益健古稀年、德色溫和玉有煙、豈意忽來分竹榻、何將相侍缺箇錢、寵光此日諸隣賀、佳話明朝萬口傳、桂子天香吹滿袖、登科愧匪狀元禪、

〔翰林五鳳集〕二十四　希白典藏一日見訪西山隱廬、余偶出不面、齟齬可歎、詩以奉謝之、

天上故人尋散翁、恨吾偶出向城中、已無看院一双鶴、豈有應門五尺童、相送隨車苦逕雨、多情挽袂竹窻風、再遊異日見思否、八九家村草樹叢、　瑞溪

希白ノ訪問ヲ謝ス

雲漢維馨侍者寄人　并叙

〔臥雲稿〕（應永二十八年）辛丑夏五二十有一日、予將赴東山時、雲漢維馨同過陋室、雲漢口作呻吟之聲、面有推敲之色、予怪問之、則曰維馨屬者叩其友卿雲於僑所、弔其兄喪、仍作助哀詩及歸書以見示、故欲依韻也、夫遠交卿雲近交維馨、情好惟深矣、義當爾也、如予唯拭目碎金洗耳戛玉而已、遂相揖出矣、凡寓東麓者三日、然二公往來乎、予懷而不休焉、故用其韻賦小詩七章、初三篇簡二公、

雲漢維馨ト唱和ス

餘外皆口占寫懷云、　瑞溪

青鞋烏傘逐南颸、却立城頭住少時、咫尺社中猶契濶、東西里許爾睽離、
二妙相携來說詩、海榴枝上點紅時、祇應暫別忍三日、未到多憂賦十離、
中年岩壑有幽期、稿竹枯松不入時、二子前程幾千里、天衢竝轡駕纖離、
九衢塵土掣身出、一把茅茨投宿時、雨後青山眞識面、世情暖附又寒離、
前二十年了角兒、青山遊遍已多時、重來事々尙如故、未必彷徨詠黍離、双林乃余舊栖也、
九重城北凝眸屢、第五橋東移步時、一榻山中槐夏半、滿庭兎目認迷離、
雨後木葉軟瑠璃、活佛東方旺化時、應是山中多藥草、何人痼療尙支離　時詣林寺雙師藥

維馨ト唱和ス

次前韻寄卿雲侍者　併叙

予同舍有佳士、字曰維馨、比年執友於永安季子卿雲侍者、齒也相若、位也相若、其風流文采相若矣、皆翩々出乎僧雛之群者也、卿雲有族兄、與之親甚、不暫相見則食不甘味、姜氏之被乎、蘇公之床乎、五王之帳乎、彼則共家居而到于玆、此則緇白異處而其親倍矣、寔可尙焉、今玆孟夏、其兄罹染疾卿雲以居萬年（相國寺）藥局、不能看其病也、然平日愛之深、迨乎啓手足之時、特遣人呼之、斯須頃使者相望于道者三矣、卿雲顚衣而行、遂未命以瞑目焉、凡天倫之親雖出乎其性、而謠尺布焉、議分荊焉者班々有之、則如卿雲之於其兄、吁亦希矣、然後卿雲請急、三旬躬執喪禮、于時維馨弔之、於哭位作挽語一章、同舍諸郎屬和夥矣、予與卿雲有半面之識、而詩筒往復則未之有也、交淺而言深者、君子惡之、豈可與乎諸郎之列乎、竊借其韻作口號七絕而已、今投十章見答于維馨、洎屬和者、其十而一及予之什也、諸郎之得報當矣、予無一辭悼其兄者、何幸枉此賜耶、於焉無語則予罪也、故言嚮欲言而未言者云、

天龍寺雲漢ニ與フル詩

意度眞成大雅詩、只愁不見據鞍時、驚風一夜雁行斷、獨立長天與影離、

又次前韻者三篇、寄卿雲侍者、未一索其法兄南容尊契一咲者、

雲多態度似君詩、五采非烟呈瑞時、紫禁前頭抱朝日、文明喜見屬黃離、
交際論心莫若詩、群英唱和樂淸時、江雲渭樹不堪比、李杜天涯悲亂離、
多方卷入短篇詩、潛子文章幹蠱時、浩々詞源識來處、東南水出自零離、

〔翰林五鳳集〕二十八　次韻雲漢郁侍者　并叙

相國寺江心ニ與フル詩

壬寅（應永二十九年）之春、吾大宗師嚴翁丁慈母憂、起鹿苑居龜嶠（天龍寺）者五旬、雲漢于以侍側、一日作詩見寄、麗新可觀、顧距翁之居才十步、有堂、俗謂之嵯峨釋迦、昔者覺皇九旬說法於忉利、以誘其母、優陀延王景慕之深、命匠人雕栴檀像、今堂中所有者是焉、此亦應化千百億云一也歟、翁乃一代兩足之尊、而孝于母、猶覺皇之於摩耶、吁先聖一揆也、矧其居與彼像偶密邇者乎、可謂一段奇、故章和二絕、其一及焉云、　瑞溪

樗散誰憐似廣文、禁城春暮獨思君、殷勤報與萬松下、一朶須分壠上雲、

又

峨山深處出迦文、往歲傾心于闐君、應是禪齋赴淸供、靈蕪一炷起黃雲、

万年江心丈人、學富才優、爲後進領袖焉、洛之內外曰大慈、曰觀持、皆慈氏祖翁（周信）之棠陰也、家資泊如、人不堪其憂、然丈人平日在彼在此、閉門讀書、一榻蕭然、不知老之將至、蓋獨樂者乎、今茲庚戌（永享二年）秋孟、起首多衆、衆心忻忻然、僉曰、第一座得人、官居旬餘、招要社友、批月抹風、雅集無虛日、昨所獨樂、今與衆同、則不翅夙攀見、於茲青雲異日之心、亦可知矣、吁賢哉、余來往有二十七年之舊、拜賀不已、用向時唱酬韻、呈禪詩一篇　瑞溪

桃溪等ノ詩卷ニ題ス

黃卷青燈三十載、時々請退社關頻、空華結果須令日、枯木回春屬此人、慈氏宮中纔試步、文殊堂裡卽飜身、半千龍象皆瞠若、獨許飛騰誇絕塵、

〔臥雲稿〕　庚戌（永享二年）九月十三夜、桃溪種藏司扣社中諸彥、玩月戰詩、先庚一日問余、以所宜題、戲以明月樓圖命之、樓在湖州、唐楊漢公詩、九月炎凉正得中云者、蓋指此地也、此夕佳月、時亦抄秋、命題之意在是矣、然楊詩則九月望夜之作、今爲十三夜而發之、以爲太早計乎、後二日濛雨及晚、所謂明月樓不可與今夕爲地也則幸哉、用之於前夜、唯口語心以解早計之嘲而已、于茲桃溪寄糊（マヽ）名詩卷、見索批之、此乃藻鑑文章者之職也、余百不能而尤不能者詩也、豈已不能而分人之能不能乎、矧篇篇廿八驪珠、爲之目眩、苟手觸之、恐有生瑕之過、故卷而還之、聊賦俳諧之體一首、記諸彥一時之交會、々者九人、皆富於年之士也、

清旭ノ畫軸ニ題ス

淸風穆々會諸郎、慚愧無由容老狂、九月良霄人亦九、天將奇計配重陽、

〔翰林五鳳集〕四十八　題淸旭侍者畫軸　瑞溪

東山淸旭昇公侍者、敏而好學、標格邁倫、然謙卑自處、不與世競、可謂佳士也、一日介友人寄小畫軸、求作之記、予懶與年加、日廢筆硯、不可得而記焉、

聊題小絕、以應來意耳、

崖樹陰中溪水灣、歸休此地占寬閑、科頭箕踞眼無白、不見世人唯見山、

成甫ノ畫軸ニ題ス

〔翰林五鳳集〕四十七　松竹書齋　瑞溪

玉府佳士成甫集侍者、遠寄畫軸、見索拙詩、長松脩竹屋在其下、因題曰松竹書齋、蓋取諸元人虞集、滿山松竹夜如何之句也、幸同其名、無乃景慕其人乎、一絕以應來意耳、

元良ノ畫ニ題ス

學古風流似伯生、滿山松竹不勝清、書中閑對聖人面、有客臨門懶出迎、

聖福元良策公侍者、紫陽秀士也、不遠千里、寄畫索詩、其風流好事可想也、予比年杜門深居、雖竝隣者不識焉、公處乎四海之濱、何相隔之遠而相識之深也耶、於是不能無感、聊題小詩、以應來意云、

玉汝ノ藁ニ題ス

童子開門欲掃塵、主人堂上候何人、朝來恐有探梅客、竹外枝々已放春、

〔翰林五鳳集〕五十六　天龍乾公首座、雙桂老人甞字曰玉汝、蓋祝成人也、今在集龍諸孫之行而爲稱首、實龍有龍孫者也、雙桂命意於是乎見矣、一日寄畫幀求拙詩、漫題一絕、　瑞溪

湖亭避俗伴梅花、知我者希堪自誇、舊日携琴門下客、過橋今夕向誰家、



大規ノ長門ニ歸ルヲ送ル

〔翰林五鳳集〕二十六　壬子（永享五年）夏、大規圓侍者、歸覲長門、雙桂老人詩而賜之、畫錦益光、以予有半面之素、見求贈言、蓋觀隋和者難爲珍、然督不已、扞塞其責云、　瑞溪

慈親白髮入相思、去袂翩々難挽之、風露早行禽未越、海山歸路馬先知、千金休買長門賦、一首爲多雙桂詩、京國重來能記我、西嵐北畔小藩籬、

相國寺璋童ノ韵ヲ次ス

〔翰林五鳳集〕十　丙辰（永享七年）春、萬年璋童試毫賦詩、仍索拙和、予時在告、以閑爲樂、未可爲和詩、忙既而逾月、督責不已、叨依押寄呈、三絕、

東福寺九華ノ詩韻ヲ次ス

天公嘉子讀書功、吟助信常春院中、試向牡丹枝上看、閏年花片十三紅、

經世渾無一線功、惟應老境託閑中、青雲已入青年手、新樣文意剪相紅、

勞苦不動爭見功、玉成元在琢磨中、青春易過君須惜、眞箇花無十日紅、

〔翰林五鳳集〕十一　次韻東福九華年少戊寅（長祿二年）新正試毫、　瑞溪

山似南屏勝境開、誰麾慧日暮光回、竹非人悟（語カ）任風擊、花與君詩被雨催、老輩已稀雖可恨、少年爭出豈無才、大慈恩塔題名後、賀客門前幾箇來、

德升新居ノ詩韻ヲ次ス

〔臥雲稿〕　永享丙辰（八年）歲、龍皐（南禪寺）德升西堂新作居詩、北隣双桂老人和三章而賜之、予今爲榮辛酉（應永廿八年）秋、過予求追和、爾來每過督而不已、聊依其韻、

雪ヲ賞ス周晧ノ詩韻ヲ次ス

二年三度過吾廬、猶有求詩心未除、爲報歸聽(ヤ、)松竹說、北隣禪老齒牙餘、

〔翰林五鳳集〕二十八　永享已未(十一年)孟春廿一夜、香雪亭上燒燭賞雪、於是侍衣周皓藏主作詩記之、聊依韻索洛社諸友一唉、

適中ト唱和ス

袈裟定起看飛雪、紅燭前頭相映新、缺月修來餘玉屑、狂風吹落作瓊塵、花鬚亦白應羞老、柳眼不青如負人、莫怪深更興難盡、明朝簷滴雨聲春、

〔碧山日錄〕二長辰壬九　壬九月四日丁未　命匠修敗屋、得庸適中病中寄其第建仁之瑞溪記室之偈、曰、紙衣布帽病浮屠、髮禿顏頹臂半枯、自合空華歸變滅、已將大塊付虛無、藥爐火老暖烟濕、燈盞油乾冷燄孤、弟雁兄鴻行斷後、是誰相喚又相呼、瑞溪有和、適中又答之二首曰、成佛已超廣額屠、草間莫管髑髏枯、室中準擬毗耶默、格外提撕趙老無、妙性靈然寒月皎、幻身飄爾片雲孤、塵埋研匣深三尺、兎顯爲君今得呼、老視利名如嚼蠟、亂山深處萬緣枯、飄蕭瓶錫再來也、問訊親朋太半無、姜被遮寒眠重熟、蘇床聽雨夢何孤、他時若解小兒祟、瘦策尋君日日呼、適中之作甚有逸韻故記之以示不逸也、

建長寺叔仁ニ寄スル詩

〔翰林五鳳集〕二十四　望入江雲無鯉鴻、天涯一信問東風、逢春閣外雪吹盡、花與君顏孰嫩紅、　寄相



相國寺省球ニ與フル詩

易(陽)福山叔仁侍者

京居昔日不相知、萬里阿陽去見思、滿世超名人翁々、海山烟雨獨吟詩、寄阿陽景陽記室　瑞溪

〔翰林五鳳集〕十二　次韻省球童子試毫

球童隷名萬年之明年、方乎三元之辰、染毫賦詩、凡過香月主翁、攸叙者十而八九屬和之、余亦翁之莫逆也、不可無語矣、想諸公和出奇見巧、余將何云乎、然師子岩前有詩家公案、昨夜吟次冥搜而得焉、昔幻住(明本)國師答海粟老人而詠梅花者百篇、此人宋廣平心鐵而詞麗者也、球廼幻住的孫而侍香月主翁、故以之爲煦和、其詩曰、　瑞溪

相國寺古瑞ニ與フル詩

梅散春香月影晴、來遊人宿水沈城、期君百詠續家集、未送飛花入笛聲、

〔翰林五鳳集〕二十八　萬年古瑞侍者、曾受先相公之知、予常見之月地雲階之間、風望共如邇來氷雪辛勤、自落紈綺、蓬戸茅簷、負笈來遊、有志如此、必爲後來之秀乎、於是和寒字韻、見示詞翰之妙、足以起予、又次前韻答之、　瑞溪

東閣官梅今不官、舊人猶愛舊香殘、春風天上曾相見、歲晩山中共一寒、

寶山ガ養政ノ和歌ニ答フル韻ニ和ス詩

和鹿苑寶山答相府和歌之韻　　瑞溪

和歌禪偈倡酬新、盛事今逢千一辰、金縷添光朝日暖、授衣天氣探支春、

信濃櫻細川氏ノ第ニ花ヲ觀ル詩

〔翰林五鳳集〕五　細川典厩源公宅庭花盛開、俗所謂信濃櫻者也、一日招召諸老看之、匪啻養花亦能養老、予偶陪席、公就求詩、聊呈小絕、　瑞溪

主人胸宇浩無涯、四海九州春一家、庭下白櫻千樹雪、洛陽坐看信陽花、

畠山氏ノ第ノ詩會

〔畠山匠作亭詩歌〕　瞿麥　相國寺僧　梵僧周鳳

堂前繡竹小嬋娟、碧黛紅裙日鬪妍、誰識杜陵曾入寺、山庭寂寞麝香眠、

〔翰林五鳳集〕二十八　追和双桂答匠作詠雪之韻　　瑞溪

先帝潛宮山雪寒、憶歌黃竹慰艱難、詞臣一詠太平日、銀闕登臨天地寬、

子英ニ贈ル書詩

〔臥雲子尺素〕

昨足下曳風雅之杖于城西、以偸半日閑、予陪其後塵、吁東野看長安一目花之意乎、於此村鐘喚晩、絮飛花落、及其緩々而歸、予牽衣一咲留玉趾於陋室、卜日卜夜、寔壯遊者也、聊綴小詩以奉謝聖恩云、　臥雲子頓首

再渡橋邊遊事濃、與君昨日曳吟笻、釋迦院裏隔花聽、春暮講時村舍鐘、

子英尊君足下

周鳳筆蹟

雲子尺

内閣記錄課所藏

原寸

縱九寸八分

横一尺二寸

代商

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右一絶世 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

周鳳筆 [illegible]尺 内閣記録課所藏

原寸 縦九寸八分 横一尺二寸

周鳳筆蹟 卧雲子尺素ノ内

内閣記録課所藏

原寸 縱九寸八分 横一尺二寸

代簡

經居日景易雨斜之地無情

催鶯華幸有

君家引其夢影如氷玉服

雲霞

右一絶世 所速之 謝臨之

子英[illegible]

代簡

經居日景易雨斜　之地無情

催驚華幸有

君家引夢影如水玉服

雲霞

右一絶世　所速之謝臆之

子英[illegible]

三榮社製版

鳳筆蹟
卧雲子尺素ノ内
内閣記録課所藏
原寸
縱九寸八分
横一尺二寸

代簡

經旬日景易西斜、天地無情催髻華、幸有君家引吾夢、顏如氷玉服雲霞、

右一絶泄寵速之謝臆云、

臥雲子頓扒

子英尊君閣下



言懷者五章、奉呈上子英尊君梅花帳下、以述區々之萬乙云、臥雲子頓首

春融天闕五雲東、拔俗清標屬我公、未契深慚唉身拙、多情只在不言中、

相思不忘思依々、十事關情九每違、安把佳人眉斧刃、胸中百萬破兵圍、

賢愚雖異共天民、草野胡爲獨著臣、杜老莫言無弃物、君恩不及一閑人、

白鷗骨肉只嚴君、夢遠鴛鸞臺閣群、自識劉郎非舊要、一蓬殘雨半簑雲、

花謝鳥啼春日閑、何時豈侍玉門關、無媒逕路草吹綠、夢落佳人書案間、

情見于詞

文明五年五月八日

昨接佳人共見形、東漂西泊似浮萍、可憐幽處礀邊草、縱得春風猶未青、
玉貌飄然思不群、眼中何處是非君、當時難續荊王夢、日暮生憎一碧雲、
謾結新愁髩點星、吟親灯火坐虛櫺、多情若使罌曇說、不減五千餘軸經、

臥雲子九拜々

奉謝
前夕不意之恩遇云、

臥雲子頓首

昨夜迎君喜有餘、對談何況解衣裾、不才慚我接三顧、殘月春深小草廬、

臥雲子頓首

蜂腰一章、奉呈子英尊君研右、以謝前夕不意之恩遇云爾、

臥雲子頓首

倒衣曳履作推敲、□意籠前（月カ）□上嵩、一夜相双合歡枕、君臣論道又論交、
林鐘十又八

代簡

何日聖恩枯却榮、玉墀斜拂箔輕明、胸中積欝以那比、霖雨未晴心又晴、
右奉謝恩意之厚云、
子英尊君閣下

臥雲子頓首

代簡

衣帶水清南北涯、過橋幾度到朝階、西風吹雨三更後、疎響不酸聽好偕、
右奉謝前夕恩遇之萬乙云、
子英尊契閣下

臥雲子頓首々々

代簡

雲霧牕前侍玉堂、麝談席上送微涼、西斜易變恩情重、滿袖歸時携御香、

臥雲子頓首

奉謝恩情之萬乙云、

播磨ニ赴カントシテ子英ニ別ル

余將赴播陽之行、子英尊君忝招余、作連日之語、一歡一悲、其情可知、謹矢小詩以謝恩意、且以叙睽別云、

臥雲子頓首々々

聖恩重矣客身輕、西報陽關墮淚情、半說歡逢半離緒、啼螿替我兩般聲、

丹波ヨリ歸リ子英ニ詩ヲ贈ルル

走自丹陽歸之後數日、扣子英尊君左右、其翌日賜佳招、實慰連旬羈旅之懷者非小々、不亦快哉、謹奉呈小詩、漏謝忱萬乙云爾、

懶雲

叙別丹陽行路輕、歸來此日沐恩榮、歲寒休怪髯莖雪、應是思君多夜情、

臥鷗

代簡

微染聞君臥在床、安心用得誌公方、落梧雨滴花無恙、春入秋風睡海棠、

臥鷗子拜呈



子英尊契閣下

代札

溽暑南州山又山、秋風歸錫入秦關、旅愁三尺如湯雪、昨夜佳人一笑間、

滄洲子拜々

滄洲

著述

臥雲夢語集序

前宵辱應佳招、寔披霧初歡夕也、所聽之雨歡聲、所過之草忘憂花有合歡、松有連理、鳥有比翼、是唐人所謂也、予亦指帶礪山河之誓、今此夕也、其寵誠出不意、感佩不可言因裁唐體一章、呈上子英尊君梅帳下、奉謝恩遇萬乙云、（詩缺ク）

〔日本禪林撰述書目〕

夢語集　竹鄉集　臥雲稿　刻楮　日件錄

入東記　脞說東坡詩集抄　善隣國寶記

〔臥雲夢語集〕　臥雲夢語集序

吾達磨氏之徒、無文字則可也、若不得已、著書遺後亦可也、如明教覺範不其然乎、予少寡聞孤陋、學無師法、遊戲翰墨、中年知非而止矣、匪啻才盡技窮也、然猶（刻誤）

爲人所强、不得一向杜絕、蓋多生綺語之餘習歟、此皆駁雜無實之說、終無一字
黜黜宗教焉、抑不能乎不爲乎、曰不能也、又不爲也、夫如明教覺範、或爲僧中此
郎、或爲天下英物、不可得而學焉、雖然師其迹而彷彿萬一、則縱不得睎驥、何不
如駑有驥一毛哉、吁今已耄矣、悔之何及焉、文正（應仁元年）丁亥秋、都下大亂、予寓于北岩
藏、無可與語者、惟臥榻側雲從之爾、於是乎平昔師友齒牙之餘、耳剽而未決疑
者、時々上心、紛紜恍惚如夢寐然、且記一二、名曰臥雲夢語集焉、爲之猶賢乎已
者乎、一夕客來偶見此集曰、夢有四種、其一則無明熏習也、又了義經不云乎、此
無明者非實有體、如夢中人、夢時非無及至於醒了無所得、然則夢已與無明同
一無所得也、今示人以無所得法、無乃非乎、予曰、唯此無所得、予所取也、凡世出
世、苟以無所得爲得、則治亂存亡苦樂逆順一切二邊境界、那事不易消遣哉、此
卽夢中佛事、亦名夢中在□法門也、子欲原予夢、且坐喫茶、々未點客旣退矣、于
时文明二年龍集庚寅孟夏初吉、臥雲八十老衲瑞溪周鳳書于北岩慈雲、

## 〔善鄰國寶記〕 善鄰國寶記序

日本與震旦相通、蓋始於垂仁天皇之代乎、其通書信、則推古朝聖德太子自製
隋國答書焉、予錄兩國使者、及禪敎名師竭來年月、乃至近時往返之書、號曰善



隣國寶記、或問、此記之首、略述神代事何也、曰、此方學徒讀震旦書者、知其國山
川人物、讀天竺書者亦然、吾國雖有六國史等書、而讀者鮮矣、故知本國事者幾
希矣、捨近取遠、無乃左乎、今錄兩國相通之事、先當令人知吾國之爲神國之由、
故述十一二耳、此皆神皇正統記中所載也、其記過半倭字、今改作漢字矣、又問、
既是神國、然錄學佛者往來何也、曰、未知神國之所以爲佛國乎、凡此國諸神、皆
垂迹也、其本則三世諸如來、十地大薩埵也、北野神曰、此國普賢龍樹流傳密敎
之地、又應化諸聖、以悲願力、借名明神、遊住諸處、覆護衆生、誠哉斯言、法華曰、諸
佛救世者、住於大神通、爲悅衆生故、現無量神力、傳聞、熊野權現之神、就六萬餘
言中、特擧此偈、告解脫上人、其意不待言而可知也、況八幡神請佛光禪師來此
國、日吉神勸智證大師入大唐、皆爲佛法流通也、神能如此歸佛、非佛國而何耶、
慈覺大師云、雖神明應跡國、而大日應現故號日本、亦有旨哉、吾國第三十代欽
明天皇御宇、佛敎始來、旣而聖德太子始講法華勝鬘二經、雨華放光、聳動四衆、
昔在天竺、爲勝鬘夫人、親聞金口說、後生震旦、爲南岳思大、密承達磨之誨、來化
吾國、託胎之初、自稱救世菩薩、實欽明神孫、用明聖子、而輔推古政、居儲君位、寰
中不令而化、塞外不征而從、或時乘烏駒翔虛空、而凌士峯之雪、或時駕青龍橫

大洋、而入衡岳之雲、皆出於思議之表、所謂救世而現神力者乎、遊片岡逢達磨、見其飢臥推衣々之、磨乃逝矣、空棺留衣、太子特服其衣、聖意深矣、虎關竊以爲表傳衣、未爲誣焉、然則三十二字和歌、亦可以擬傳法偈也、吁佛法東漸、祖師西來、太子皆爲之地乎、夫天竺則外道六師交起、提婆之逆、瑠璃之難、在佛世尚然、況佛後乎、震旦則佛氏纔齒于三教之一、而互相推奪、三武廢教、又未免其數也、吾國則王承神、々承佛、三卽一、而此外無他、太子生神國爲王子、四十九年所修之行、無一下佛事焉、爾來聖武帝、清和帝、宇多帝、同是吾國明天子、而讓位出家、蓋異國之所希者乎、如八王子十六子之父、捨王位成佛道、皆在無央數劫之前、不圖粟散之地、劫濁之代、復覩過去久遠之風、國王旣然、將相以降至于士民、無男無女、垂老薙其髮圓其顱、皆唱南無爲口實、豈非吾國之爲佛圀也邪、實太子遺風餘烈之使然者也、如通書於震旦、亦出推古之朝、則善隣爲寶、豈非太子之意乎、凡商舶往來、常得貨財以富吾國、亦善隣爲寶之一端乎、然此皆入海求七寶之類、專爲利爾、恐非太子之意矣、按十七條憲法、第二曰、篤敬三寶、々々佛法僧也云々、震旦乃三寶所自來也、太子善隣必以三寶爲國寶矣、又吾國佛法始自百濟而傳焉、今屬之震旦何也、百濟蓋震旦之域也、泛而言之耳、此記多載新羅高麗事、亦攝之震旦之故也、

文正龍集丙戌八月十日

泉南臥雲山人 周鳳于萬年 北禪室



予按國史、聖德太子攝推古政、始通信於隋朝、太子見隋書曰、此天子賜諸侯王書式也、然稱倭皇、皇字有禮、遂製報書有東皇帝敬白西皇帝之語、又有謹白不具之語、蓋太子不欲臣服、又不欲絕好、其意可觀也、厥後桓武天皇朝、屢有遣唐使、如弘法傳敎、皆隨國使入大唐、此時恐無天子書、而惟使者以通事諭來意乎、至于烏羽院代、大宋國附商客孫俊明、鄭清等通書、因命諸儒議之、終無報書矣、然則平氏重盛施黃金於育王、源氏實朝求佛牙於能仁、平氏時宗請建長住持於明州牧、亦皆非兩國王相通也、由是觀之、推古以來、東皇西皇抗行之義、于今惟同焉、元朝令蒙古軍來侵我西鄙、戰不利而退矣、大明太祖老皇帝屢遣使者、賚詔書來告開國建大明號、而太宰府不聞于朝、使者不得入京師而歸矣、老皇帝知吾國王臣皆信佛法、密命天寧禪寺住持闡仲猷、兀官敎寺住持勸無逸、來諭通好、當知唐宋時、吾國未聽命也、應永初、筑紫商客肥富自大明歸、陳兩國通信之利、於是大將軍源朝臣義滿、便以肥富爲使者、始通信書獻方物、故大明建

勘合符ノ由來

臥雲日件錄目次

文帝遣禪敎長老天倫一菴來、將軍又遣密堅中隨天倫一菴行、船未達大明、而建文帝內難、叔父燕王卽位、改元永樂、堅中能通使命而歸、從此連年兩國使者往來幢幢、今所謂勘合者蓋符信也、此永樂以後之式爾、九州海濱以賊爲業者、五船十船、號日本使而入大明、剽掠瀕海郡縣、是以不持日本書及勘合者、則堅防不入、此惟彼方防賊、此方禁賊之計也、自古兩國商舶來者往者相望於海上、故爲佛氏者、大則行化唱道之師、小則遊方求法之士、各遂其志、元朝絕信之際尙爾、況其餘乎、有勘合以來、使船之外決無往來、可恨哉、

文明二年龍集庚寅臘月二十三日臥雲八十翁瑞谿周鳳書于善隣國寶記後、

## 〔臥雲日件錄〕

目次 ○內閣本全一册

臥雲日件錄拔尤 北禪和尙自所筆也、永祿五年壬戌光源惟高安和尙拔書焉、

日件錄第四 至二月廿一日終、時八十三歲

文安三年三月晦、予退崇壽、移壽星軒、退圖無事、記日用事、名曰日件錄、蓋取諸永明壽禪師傳、所謂錄其行事、曰百八件也、

日件錄第二 鹿苑院文安四年丁卯自正月至三月

日件錄第三 文安四年丁卯自四月至六月

日件錄第五 文安四年丁卯、五年戊辰自正月至六月、文安五年戊辰自七月至九月

日件錄第六 文安五年戊辰自七月至九月

日件錄第七 文安五年戊辰自十月至□月

日件錄第八 文安六年己巳自正月至四月

日件錄第九 文安六年己巳自正月至四月

日件錄第十冊 寶德元年己巳自十月至十二月

日件錄第十一 寶德二年庚午自正月至六月

日件錄第十二 寶德二年庚午自七月至十二月

日件錄第十三 寶德三年辛未自正月至七月

日件錄第十四冊 寶德三年辛未自八月至十二月

日件錄第十五 寶德四年壬申自正月至六月

日件錄第十六 寶德四年壬申自七月至十二月、七月廿六日改元享德

日件錄第十七冊 享德癸酉自正月至七月

日件錄第十八冊 享德二年癸酉自八月至十二月

日件錄第十九冊 享德三年甲戌自正月至七月

日件錄第二十冊　享德三年甲戌自八月至十二月　壽德東軒

日件錄第二十一冊　享德四年乙亥自正月至五月　壽德書院

日件錄第二十二冊　享德四年乙亥六月至十二月　壽德東軒

日件錄第二十三冊　康正二年自二月至三月　壽德鹿苑院

日件錄第二十四冊　康正二年丙子四月五月　鹿苑院

日件錄第二十五冊　康正二年丙子六月七月　鹿苑院

日件錄第二十六冊　康正二年丙子八月九月　鹿苑院

日件錄第二十七冊　康正二年丙子十月至十二月　鹿苑院

日件錄第二十八冊　康正三年丁丑正月二月　鹿苑院

日件錄第二十九冊　康正三年丁丑三月四月五月　鹿苑院

日件錄第三十冊　康正三年丁丑六月七月八月　鹿苑院

三十一冊失却缺之、（第四十九冊ノ次ニ、第三十一冊アリ、コヽニ編入スベキモノトス、）

日件錄第三十二冊　○此冊、年ヲ詳ニセズ、十二月五日ノ條一件アルノミ、　長祿二年戊寅二月廿　壽德鹿苑

日件錄第三十三冊　長祿二年戊寅正月閏正月　鹿苑院

日件錄第三十四冊　長祿二年戊寅以下缺、三日　鹿苑院

日件錄第三十五冊　長祿二年戊寅四月　鹿苑院

○コノ次、第三十六冊缺ク、

日件錄第三十七冊　四カ　○此冊、年ヲ詳ニセズ、八月十五日ノ條一件アルノミ、　无外題、不知何、忠賓云、長祿三年歟、

日件錄第三十冊　四カ　无外題、不知何、忠賓云、長祿三年歟、四十一冊子失缺之、長祿三年己卯七月八月　鹿苑院

日件錄第四十二冊　長祿三年己卯九月十月　鹿苑院

日件錄第四十三冊　長祿三年己卯十一月十二月　鹿苑院

日件錄第四十四冊　長祿四年庚辰正月二月　鹿苑院

日件錄第四十五冊　長祿四年庚辰三月四月五月　鹿苑院

日件錄第四十六冊　長祿四年庚辰六月七月　鹿苑院

日件錄第四十七冊　長祿四年庚辰八月九月閏九月　鹿苑院

日件錄第四十八冊　長祿四年庚辰十月十一月十二月　鹿苑院

○コノ次、第五十冊、第五十一冊缺ク、

日件錄第四十九冊　長祿四年庚辰十一月十二月　鹿苑院

日件錄第五十冊　寬正三年壬午自正月至十一月　壽德院

日件錄第五十一冊　寬正三年壬午十二月　壽德北禪

日件錄第五十二冊　寬正三年壬午自正月至十一月　壽德院

日件錄第五十三冊　寬正三年壬午十二月　壽德北禪

日件錄第五十四冊　寬正四年癸亥自正月至閏六月　壽德北禪大慈東亭





日件錄第三十五冊　長祿二年戊寅四月　鹿苑院

○コノ次、第三十六冊缺ク、

日件錄第三十七冊　四カ　○此冊、年ヲ詳ニセズ、八月十五日ノ條一件アルノミ、　无外題、不知何、忠賓云、長祿三年歟、

日件錄第三十冊　四カ　无外題、不知何、忠賓云、長祿三年歟、四十一冊子失缺之、長祿三年己卯七月八月　鹿苑院

日件錄第四十二冊　長祿三年己卯九月十月　鹿苑院

日件錄第四十三冊　長祿三年己卯十一月十二月　鹿苑院

日件錄第四十四冊　長祿四年庚辰正月二月　鹿苑院

日件錄第四十五冊　長祿四年庚辰三月四月五月　鹿苑院

日件錄第四十六冊　長祿四年庚辰六月七月　鹿苑院

日件錄第四十七冊　長祿四年庚辰八月九月閏九月　鹿苑院

日件錄第四十八冊　長祿四年庚辰十月十一月十二月　鹿苑院

○コノ次、第五十冊、第五十一冊缺ク、

日件錄第四十九冊　長祿四年庚辰十一月十二月　鹿苑院

日件錄第五十冊　寬正三年壬午自正月至十一月　壽德院

日件錄第五十一冊　寬正三年壬午十二月　壽德北禪

日件錄第五十二冊　寬正三年壬午自正月至十一月　壽德院

日件錄第五十三冊　寬正三年壬午十二月　壽德北禪

日件錄第五十四冊　寬正四年癸亥自正月至閏六月　壽德北禪大慈東亭

日件錄第五十五冊　寛正四年癸未自七月至十二月　大慈東亭壽德　北禪

日件錄第五十六冊　寛正五年甲申自正月至六月　壽德北禪

日件錄第五十七冊　寛正五年甲申自七月至十二月　壽德北禪

日件錄第五十八冊　寛正六年乙酉自正月至八月　壽德北禪

日件錄第五十九冊　寫正六年乙酉自七月至十二月　壽德北禪

日件錄第六十冊　寛正七年丙戌自正月至六月　壽德北禪　大慈東亭北禪

日件錄第六十冊　寛正七年丙戌自正月至六月　壽德北禪大慈東亭北禪

日件錄第七十二冊　文明四年壬辰自正月至　慈雲西軒　此冊无可抄欠之

日件錄第六十二冊　文正元年丙戌自七月至十二月　大慈東亭北禪壽德　○コノ冊第五十二冊六月中拾遺、二十三日ノ條一件アリ、

日件錄第六十一冊　文正元年丙戌自七月至十二月　大慈東亭壽德北禪

日件錄第六十二冊　文正二年丁亥三月改應仁自正月六月　北禪大慈

日件錄第六十三冊　北禪慈雲　○コノ次、十月五日、二十七日ノ條二件アリ、應仁元年ナルベシ、

日件錄第六十五冊　應仁二年戊子自八月至十二月　北岩藏慈雲庵

日件錄第六十六冊　應仁三年己丑四月廿六日改元自正月至六月文明　北岩藏慈雲庵　○コノ次第六十七冊缺ク、

日件錄第六十八冊　文明二年庚寅自正月至六月　北岩藏慈雲庵

日件錄第六十四冊　應仁二年戊子自正月至七月　慈雲庵　此冊內无可抄之事略之、

日件錄第六十九冊　文明二年庚辰自七月至十二月　北岩藏慈雲庵　○コノ次、第七十冊、第七十一冊第七十二冊缺ク、

日件錄第七十三冊　文明四年壬辰自七月至十二月　慈雲西軒

日件錄第七十四冊　文明五年癸巳自正月至五月三日　至八日示寂慈雲西軒

〔瑞溪和尚書幅〕○山城相國寺塔頭慈雲庵所藏

小溪深處綠陰繁、隱退何人獨掩門、身世悠々春似夢、上方鐘鼓又黃昏、

臥雲老人印　○此詩、翰林五鳳集四十六ニイキラセリ、

〔本邦禪林諸師別稱〕

竹鄉　柔僧　臥雲　刻楮　瑞溪周鳳

相慶雲

勅諡

〔日本禪林諸師賜號〕　勅諡興宗明敎禪師　瑞溪周鳳

〔翰林五鳳集〕二十八　萬年瑞溪鳳公首座、禪文兩熟、時輩推之、數過退居、存慰窮老可念也、一日以頻字倡酬數篇見示、多益出筆力不衰、衰莫之賜莫大焉、乃述拙和、以答來意、而懶廢日久、甚無發越、倚玉露醜、以年恕之可矣乎、一莞、　惟肖

得巖唱和ノ詩

寶唾隨風寂寞濱、手之不釋卷舒頻、孰知薝蔔林間佛、元是梅華樹下人、詩眼要窺徐半面、話頭先了倩雙身、文章於道又何礙、無相伽梨不惹塵、人生餘七鬼嫌隣、喜子時來慰藉頻、退筆龍鐘憐退士、佳書雋永對佳人、小山種樹栖避跡、滄海桑田見在身、更酌湘茶談祖偈、本來無鏡亦無塵、小山河邊墻不仭、介然無黨免頻々、隣梅陋室清如聖、缺竹僧居俗却人、三宅升沈從有順、四禪苦樂豈無身、滿庭仍舊普通雪、佛祖當頭眼裡塵、

澄彧宗沅ノ唱和

予友瑞溪師、自禁城來看花嵐岫、遂訪予、因出詩卷告曰、是吾與南江詞伯賞春唱和者、其佳處則圈而批之、否者幸賜改抹、南江於公亦猶吾也、毋辭焉、予咲曰、羅磵谷選放翁集之義也、敢不從命乎、乃展卷諷則才富語奇者宋也、格高而思遠者唐也、皆完粹矣、弗可去取、然且批之圈之、亦管窺之一班也、不訝々々、予閑居老孏忘句律久矣、强依韻末以致降嘆之意云、

澄彧唱和ノ詩

三日春晴從古少、流年催者擲梭頻、隱廬那有千金子、吟社唯聞兩玉人、旖旎風來匂柳色、玲瓏雨情(瀟カ)瘦花身、不固新什能撩我、濃唾難分混沌塵、　呆庵(澄彧)

靈彥唱和ノ詩

〔村菴稿〕上　次鹿苑瑞谿見寄雲居竺雲之韻

二甘露作一門春、揖讓畫圖今又新、可喜蕤林重復古、傳聞盛事慰閑人、

龜後山容　瑞溪老人時寓北山

秋後清癯屋上山、凜然如見主人顏、急流勇退身無事、千仭高哉不可攀、

周鳳北山ニ寓ス

〔雪巢集〕乾　次韻鹿苑瑞溪老人於典廐第看花

芳樹名園冠雒涯、況招諸老主人家、不聞昔日耆英會、滿座春風有此花、

宗沅唱和ノ詩

〔翰林五鳳集〕二十五　微恙書懷寄瑞溪上人　南江

溪房小雨燕來天、門外履痕苔似烟、口不言詩春雨月、身緣多病瘦三年、墻根野薺橘(マヽ)敎少、瓶裡村梅老可怜、今日青雲公道在、念將鷁退見鶯遷、

集九唱和ノ詩

〔梅花無盡藏〕四　謹依尊韻　瑞溪和尙住鹿苑作雪頌、投崇壽堂上龍岡和尙、

地積曼陀非雪深、祇林大法中興今、南無佛也南無佛、並座同時放紫金、

〔心田和尙語錄〕　東山建仁禪寺法語

周鳳畫像　京都帝國大學所藏

文明五年五月八日

除夕小參　拈提

記得北禪賢禪師、除夕示衆云、無可與諸人分歲、且烹露地白牛、大家喫了、唱村田樂、北禪老漢口甜心苦、東山今夜分歲、分松上雪、敲梅花氷、供養大衆去、普何故人情若好飲氷可肌、

清播建仁寺除夕小參ニ周鳳ノ語ヲ拈提ス

五山之上瑞龍山太平興國南禪寺入寺法語

鹿苑謝語　瑞溪和尚

清播南禪寺入寺謝語

鹿苑堂上大和尚、位迫左街、道重方外、張公一生、江海人望光風、坡翁七世、文章天輔宗敎、久陪玉塵、餘論剏接青雲、後塵所祈、長保春秋、不倦槌拂、　尊察、

靈彦ノ周鳳畫像賛

〔村菴小稿〕　北禪瑞溪和尚眞賛

卿雲景星、郁々煌々、惟師之典刑、照乘夜光、溫潤堅剛、惟師之文章、得松風十二時遺音、足以提撕先師公案、傳花月三千篇絕唱、足以黼黻季運宗猷、衆論諸佛機、而喚水潦鶴、獨弄村田樂、而烹露地牛、三轉鹿苑法輪、徽號加一國之師、而讓之不足貴、一辭龍峰疏幣、極位在五山之上、而視之不爲尊、痛掃今時影迹、力究古道淵源、無乃賣佛祖以漁利、自然容龍象而駿奔、氣折萬夫、砥柱屹立、身殿諸

周鳳畫像　京都帝國大學所藏

三榮社製版



除夕小參　拈提

記得北禪賢禪師、除夕示衆云、無可與諸人分歲、且烹露地白牛、大家喫了、唱村田樂、北禪老漢口甜心苦、東山今夜分歲、分松上雪、敲梅花氷、供養大衆去、普何故人情、若好飲氷可肌、

清播建仁寺除夕小參ニ周鳳ノ語ヲ拈提ス

五山之上瑞龍山太平興國南禪寺入寺法語

鹿苑謝語　瑞溪和尚

鹿苑堂上大和尚、位迫左街、道重方外、張公一生、江海人望光風、坡翁七世、文章天輔宗教、久陪玉塵、餘論矧接青雲、後塵所祈、長保春秋、不倦槌拂、尊察、

清播南禪寺入寺謝語

〔村菴小稿〕　北禪瑞溪和尚眞贊

卿雲景星、郁々熒々、惟師之典刑、照乘夜光、溫潤堅剛、惟師之文章、得松風十二時遺音、足以提撕先師公案、傳花月三千篇絕唱、足以黼黻季運宗猷、衆論諸佛機、而喚水潦鶴、獨弄村田樂、而烹露地牛、三轉鹿苑法輪、徽號加一國之師、而讓之不足貴、一辭龍峰疏幣、極位在五山之上、而視之不爲尊、痛掃今時影迹、力究古道淵源、無乃賣佛祖以漁利、自然容龍象而駿奔、氣折萬夫、砥柱屹立、身殿諸

靈彥ノ周鳳畫像贊

老靈光巍然存、蓋其非尋常阿師之跂望、所以致七百甲子之願言、夫是之謂承天万年大禪佛正覺三世的骨孫者也、

萬年前席北禪瑞溪大和尚慈像神足春英芳公首座、以師遺命、來索予陋贊、拒焉不獲、謹爲之贊云、文明甲午（六年）仲夏末學比丘、

〔瑞溪畫像讃〕（○京都帝國大學所藏）　興宗明教禪師大和尚慈像（○本文剝落シテ讀ミ難シ、今省略ス、下シ同ジ）

哲資今鹿苑文摠大和尚、寄此像需贊詞、峻拒弗允、謹以應命、

文龜二祀壬戌孟夏吉辰

前南禪惠昌焚香拜讃圃

〔北禪禪語〕　新造興宗明教禪師像點眼

傑出叢林文字禪、可知嘉號合前賢、儼然刼火洞然後、淨供吸得壽星泉、

〔瑞溪疏〕　禪之四六、古人所難、必有才學識、而後議論可以精到矣、而的其對屬、工其翦裁、加以着語之奇、集句之妙、其體則或雄偉、或華暢、各自成家焉、華岳峰尖秋集、巴歌聲外陽春、天隱剪裁何工也、白水眞人青溪道士、斷江對屬何的也、濟北陰凉有待葛藟纍之蒲室著語之奇也、先輩(ママ)匣中三尺氷、桐江波上一絲風、洎川集句之妙也、此邦耆碩嘉製甚多、近代則不敢論、姑擧一二舊語曰、弊李

亭前拾得摩尼一顆、搏桑國裏傾出栲栳許多、（音東振語）豈非翦裁之工者乎、三山半落青天外、九仰高標、五湖春水白鷗前、母渝舊好、（中大本語）是亦妙於集句者歟、予素弗能文、又不嘗習四六、然自幼時聞前輩論已熟矣、是以觀他人著述、則好與不好略能辨之耳、予友承天首坐瑞谿師、廼我大慈叔祖克家、才高識達、學該內外、而於詞也駢儷尤長、一日持舊藁壹編來示予曰、公固知我者、幸是正焉、予受而讀之、卽向所謂、衆體粲乎備矣、予試摘警句以評之、若乃對的者、若東有啓明、西有長庚、天象昭爾、南至濮鉞、北至祝栗、地圖判然、仲尼素王丘明素臣、乃翁位弗稱憙、高祖御龍、光武御虎、此郎出則爲人及思、其人至其鄉、巧者勞、拙者逸、前六客、後六客、彼一叱、此一叱、百子駿兩歐陽是也、裁工者、若英氣絕類紫陽花生仙壇藥、臨時黃檗樹結蜜菓、水之万折所朝、地多勝踐、金於七寶爲首、山有佳名、經濟回彼旣倒瀾輿、望甚於初晴月、及大慈山頭領、略寰中玄旨、少林直下復覩双桂成陰、高於童者黃鵠也、雨華大與小交四是也、著語則有松源留楊岐之衣、吾家舊物、佛海繼鷲峰之席、君子抱孫、四州管內南方佛法如何住持三秀嗑前西山朝來、致有爽焉、法戰坐斷兩堂、秦軍墨守、慈濟橫行四海、蜀船越舲之類焉、集句則有佛法入中國、文章渚上台、文王我師也、夫子聖者與隴上多白雲井間收





紫氣、上界鐘清下界聞、東邊日出西邊雨、侯王將相寧有種乎、左右前後皆正人也之類焉、蟠桃閱三千年、卯時獻瑞、古鏡照二百里、舉世稱珍、梵宮壯麗五百年開神山、江水鮮明三千丈濯蜀錦、可謂雄偉矣、子瞻爲人、中龍錦江揚清於万古、魯直是日下鶴、金華孕秀於千尋、吾心似秋月、乃翁游于万物初、慈顏如春風、有子用于百年後、可謂華暢矣、天彰周公之勛、元子封魯、人美管仲之器、諸侯會齊、望稽紹於稠人所恨、見其父者少識嚴武於世、舊復發有此兒之言超遷、可謂白衣脩撰甲子、矧同緯縣老人雖公子牟、戀魏闕而韓忠獻請相州慈明、道得楊岐而大行、下生辰超梅里者幾劫、盧能膺三藏之懸記、旣整東山祖綱、佛惠負萬卷之才名、遂據南禪玄席、往事回思二十年龍山如故突兀、倾高三百尺鳳樓復新海鵬共擊三千里、高才雖多、先帝親收十五人、前輩稍少、此皆才地有餘議論精到者也、雖然別人評之、決與予反、蓋以漢江之芰曲阜之棗嗜好不同也、抑吾瑞溪他日人天推轂榮遷名刹、則其提倡復古也、必矣、吾將見武丘省數堆雲直截焉、然則斯編當爲語錄外集、而行於世矣、豈不盛也哉、

歲舍庚戌初秊日劣屬澈或謹題

## 〔翰林葫蘆文集〕五　四六後序 有詩

景徐ノ周鳳四六體疏ノ後序

四六體疏ノ由來



蓋禪四六之盛行于世也、始于蒲室、々々出乎皇元之間、一手定其體格、整其句法、而自編其集、雅頌各得其所也、繼于蒲室者、曰季潭、曰用章、皆有家法、而季潭開闔關鍵可觀矣、吾朝蕉(中津)堅蚤入大明、從之以游者洎乎十年、故罄其所蘊以歸、於是乎海東禪林、四六具體、而後登其門者、双桂(得嚴)太白(眞玄)曇仲(道芳)爲之頭角、其體格也、有蒼老而敷腴者、其句法也、有勁正而婉娩者、各以其所長、並馳乎一時、又繼而起者兩三人、續翠(龍派)聽雨(清播)與北禪也、或其妙如讀詩焉、或其奇出于着語焉、皆可以法之、此一段佳話、村菴爲予語之、村菴則夙從双桂、以受其敎者、双桂一代龍門、一得識荊者、華袞莫以若焉、嘗使北禪製疏也、曰被下大手筆、千万所望、又曰、疏語拭目展翫、此僧生前面目、手澤尙在、其崇重如此矣、北禪之嗣文摠老人、篤學强識、棠棣行中推以爲保家主、與予往來無虛月、頃寄此軸、求予之題其尾、予曰、乃翁盛作之美、詳乎天章之序、老人之不墜箕裘者、見乎栖芳(周鏡)之跋、予復奚瀆告哉、然而有一說、請試言之、古人曰、攢花簇錦、四六文章、洪兄而得、所謂洪乃古之北禪也、其名偶同、其實過之、近代學者不古、割截古蜀錦、補綴梅花衲、以欲衒賣於人之耳目、而天吳顚倒、不可甚見、老人謂何以此箴後輩、則此文之幸也、仍賦八句四韻、塡之於軸之空處、以塞其責云、

景三周鳳ノ北野天神贊ノ後ニ書ス

乃翁日本嵩明敎、誰敢論文到面前、自試亨龍老坡手、不嘗孤鶩子安涎、緇衣禮樂三千字、白髮江湖四六篇、袖裏瓣香直拈出、君家風月任流傳、

〔京花集〕七　書北禪和尙天神贊後

京等持景蒲睦首座、持其師北禪大和尙所讃北野神君畫像、來徵予後語、展而視之、世所謂神參徑山佛鑑者是也、然予於北禪老門生也、則命可辭乎、因記、予昔與北禪道話、々及此事、北禪曰、善哉問、双桂惟肖師謂曰、北野君參無準事迹、或以爲妄誕、而佛光祖定中、八旛神君來請、此事相類、何疑之有哉、偶得天神受衣記、其理昭然、記乃薩州福昌寺剏基之日、於岩石之罅隙得之矣、太宰府有一富人、夢天神告曰、請淨侶萬指、一日中讀誦妙經千部、爲子惠也、而法末世染淨不易擇、爲之如何、東福國師見住承天、具以前夢白師、々曰、是非難也、仍求水晶念珠一百串、懸之丈室、燒燭四隅、坐於中央、而誦經一部、翌晨神現室中、異巾奇幅、袖間挿紅梅、且謝千部之經、且執師資之禮、國師曰、吾師尙存、指見佛鑑、卽日再見而曰、某親入徑山室、示腋下衣袋以爲證云、而此贊也、佛鑑不來、菅君不往、大唐與日本、只有梅花耳、盖徑山一枝佛法、一四偈而盡矣、吁大哉、長安宣風坊、有菅君甲第、其辭京也、詠和歌留別梅花、々之戀主千里咫尺、飛香度海、今之挿

袖者豈此花耶、于時春之仲也、香雪亭下紅梅一兩枝、香影可愛矣、予曰、北野乎、北禪乎、一枝佛法乎、梅花乎、敢請我首座自知可也、文明己(十一年)亥二月吉日、等持小長老景三、

北禪贊白佛鑑不來扶桑菅君不徃大唐、無傳授處有傳授、一朶梅花遍界香、

## 〔補菴京華集〕

次韻正宗統公首座寄呈瑞松希世師詩幷序

東山蕭菴正宗老人、予故人也、自亂以降、東西鴻溝不相聞者有年于茲矣、癸巳(文明五年)之冬、適有岐人之入京者、蕭菴寄書起居岩栖瑞松師翁、楮尾又係以詩兩篇、瑞松大喜、和而答焉、兼命蘭坡天隱與予和之、蓋以三人善於平生也、於是乎予知其寓岐下而操履頗佳也、可慶矣、抑北禪古佛隻履西歸、師門凋零莫甚焉、然蕭庵愛客於北禪、而所遇爲渥、想不覺老淚之橫臆也、予識北禪也熟、而識瑞松也生、今也旦夕親炙、熟其所生、今日之瑞松、乃三十年間之北禪也、雖生亂世、而所不恥者、識此二老也、但無才之美之一酬其知者、是可恨矣、噫北禪今則亡矣、長庚殘月獨望瑞松於前輩落々之曉而已、蕭菴其謂之何乎哉、感嘆之餘、謹依嚴韻聊寫卑懷云、伏希采納、

身世悠々目送鴻、君居岐下我關、中贏顚劉蹶兩蝸角、獨嗅梅花倚晩風、

景三周鳳ヲ追懷ス



千萬般愁頭有雪、兩三年亂口無詩、瑞溪不在瑞松在、來往可同君受知、

文明五年小春廿九日萬年村僧景三

小春初八日、是々菴物初翁至、話次及北禪京兆之事、不覺老淚之又橫臆也、翁出其重陽詩示予、此日適北禪痤履之辰也、卒依其韻、以寓所感云、

嗟我師檀俱逝矣、百年三万六千場、壽星舊院少寒碧、京兆新阡多夕陽、天地無情君獨老、雨雲一變世皆狂、小春何以謝來訪、菊後凄涼梅未芳、

景三物初ト共ニ周鳳ヲ追懷ス

## 〔補庵京華後集〕

紅雨亭(會松鶴齋、北禪師七年忌在近、○梅溪集ニ、同題ヲ以テ、次ノ詩以下五首ヲ收ムト雖、皆京華後集ヨリ攬入セルモノ如シ)

欄滴何聲人不知、見桃始悟是臙脂、臥雲吹起七年雨、一刻春宵花落時、

七年忌近シ

## 〔宜竹殘稿〕

閏七月會友人閏七月七夕會于北禪

七閏推行十九年再逢此夕會樽前、一門諸彥似星聚、北斗藏身白髮禪、

周麟等北禪菴ニ會ス

## 〔蔭涼軒日錄〕

十三年忌

文明十七年四月二日○中略來月八日、瑞溪和尙十三年忌、祖堂入牌有其企、以故壽芳首座出世事、以內議有訴訟、雖未勤秉拂瑞溪和尙事者、普廣院殿樣別而御崇敬云、當御代亦同前、然者不可準自餘、可有御免、以此旨可達鹿苑院之由、台命有之、乃達之鹿苑、々々曰瑞溪和尙事者、別段之儀也、

景三拈香
入牌佛事

可應台命云々、
五月八日、瑞溪和尙十三回忌、祖堂入牌、住持橫川和尙拈香讀揚半齋、々會在慶雲院、

## 〔補庵京華新集〕

瑞溪和尙入牌佛事

舉牌云　不動寂滅道場、於一毫端上湧現寶王刹、只這箇不起莊嚴國土、入一微塵裏、撥轉大法輪、只這箇々々、是居東土而西土、三赴鹿苑化儀、坐北禪而南禪、再付龍山疏幣、興宗明教禪師、機呑佛祖、道合王臣者也、

大日本國山城州万年山相國承天禪寺慶雲禪院北禪軒小師比丘壽芳等、龍集乙巳文明十七年五月初八日、伏値當山第四十二世勅謚興宗明教禪師瑞溪大和尙一十三白示寂之辰、唯百丈淸規之法、設入牌祖堂之儀、謹集合山比丘衆、同音諷誦大佛頂萬行首楞嚴神咒之次、借手本寺住持僧景三、擧入牌佛事、淸規曰、待新住持至入祖堂有佛事、山僧前月之末入寺、吾師今月之始入牌、因緣幸會有待此日、豈偶然哉、抑山僧於吾師也、恩超父母、義過師資、非以二十年三十年、學其所學、傳其所傳、自號老門生者之比也、那伽定中、眉毛厮結、仲夏甚熱、尊候萬福、共惟興宗明教禪師大和尙、七八生知識、天



百年異人、慈悲處、炎天降雹、嶮峻時陰谷生春、日月星辰之、山川草木之、在地在天、吾師文章也、未開其口、而流傳万口、殺盜婬妄之仁義禮智之、在儒在佛、吾師戒律也、未修其身、而兼備全身、有千首詩、如花弄影、無一點欲、似蓮出塵、佛日誕生、記東坡再來之歲、壽星出現、當南極下降之辰、耆年碩德、沐慈誨於片言隻字者、一生氣盈志得、賤緇雛道、賣佛法於分文半錢者、諸方嫌蹙眉顰、盖古之明教起日沒處國、繡梓三百餘板、黼黻宗猷、天子覽其書、詔付傳法院、宰相愛其才、留居憫賢寺、嗚呼此郎所以爲郎、僧中禦侮、盖今之明教起日出處國、刻楮二百餘卷、潤色僧史、天子欽其風、召受梵網戒、宰相崇其教、命講法華經、嗚呼吾師所以爲師、天下歸仁、以德推之、紫衣銀鉢、坐沈香之座、雖万乘師表而無所讓、以道樂之、蔬飯藜羹、住把茅之菴、雖一箇野僧、未如此貧、百億分身、涵月衆水、一十三年掩光今晨、々々小師々孫酬恩報德、珊瑚銀椀、飜案三句、蘋蘩蘊藻、羅列八珍、仍授牌山僧、定位安眞、舉牌云　此牌安過去佛上、覓劍刻舷、安未來佛下、見彈思炙、安現在佛前後、釋迦不前、吾師不後、孰踈孰親、不如持入祖堂、與達磨大師任運相見、左以百丈爲主、右以臨濟爲賓、一昭一穆、兩々相朝、千秋萬歲、修香火因、雖然恁麼這裏、若有如定上座者出來問、無

位眞人與非無位眞人相去多少、山僧對他如何指陳、喝一喝　大千沙界一禪
榻、五月榴花照眼新、

〔延寶傳燈錄〕二十六臨濟宗　相國瑞溪周鳳禪師法嗣

京兆相國景甫壽陵禪師、出住洛北等持、入佛殿曰、天藏在天、地藏在地、看々、分
我慶雲白毫光、現他閻浮忉利、土地堂、將謂紫衣官人、元來山中土地、善哉善哉、
丕旌神功重興佛寺、拈衣、當初陵虛谷夢中得楊岐百衲、今日陵上座覺後拈家
傳一絲、要知夢覺一致麼、風光綜錯天經緯、艸木文章帝杼機、後移相國闡揚祖
道、

〔鹿苑僧錄歷代記〕亨祿四辛卯景甫壽陵　嗣瑞溪鳳

南叟號偈、爲能忠大德賦之、
嶺梅迎暖一枝開、盧老潛傳示法來、明鏡非臺誰□會、北人可笑拂塵埃、
亨祿五年壬辰二月日鹿苑八十一翁壽陵、

〔相國寺塔頭末派畧記幷歷代〕慶雲派　通玄軒　附合慈雲菴

景甫壽陵　嗣瑞溪鳳、住相國位于南禪、居鹿苑、掌僧錄事、善楷書、曰景甫樣、自
號栖雲子、

法嗣　壽陵

僧錄トナル　南叟號ノ偈

楷書ヲ善クス　景甫樣



〔本邦禪林諸師別祿〕　棲雲

〔相國寺塔頭末派略記幷歷代〕慶雲派　通玄軒　附合慈雲菴

希宗友派　嗣瑞溪鳳、位于建長、宜竹製文瑞溪行狀曰、師之小師友派藏主、爲
人敦實、師鐘愛也、今年癸卯（文明十五年）吾國入貢于大明、差前相國子璞禪師爲正使云々、
以希宗爲從僧、希宗曰、某久欲觀光於中華、今也時哉、某意在求師塔銘及語錄
外集序跋仍命余記師之行實云々、

慶雲派　慈雲菴

默堂壽昭　嗣瑞溪鳳、不見住持籍、古記曰、住相國、南禪、居自牧軒、居于北岩藏
慈雲菴、於此迁化、蓋瑞溪迁化之地也、請瑞溪稱慈雲之始祖、勤精梵唄爲一流
稱首、傳之子建、住駿州善德寺時、有宜竹送之二絕（見于芳集）　入寺之日、擧揚此送
行代跋云々、示寂年月不知、

〔翰林葫蘆詩集〕一　寄默堂老人

端叔嚴公（同僚）藏主、有千里之行、臨其發足、出扇求贊、予不辭而題二詩其上、就詳
此行日、默堂老人住駿之古寺者二年于茲矣、地角天涯杳不聞音耗、欲往省
之、駿之去京師、歷江濃尾參遠五州、而群盜梗道、又二豪對壘於遠江、危邦不

別稱　友派

壽昭　北岩藏慈雲菴ニ居ル

周麟詩ヲ贈ル

駿河ノ善得寺ニ住ス

牛黄圓

可入也、問舟則出京入伊、解纜東海之上、風波甚惡、唯以無海寇爲幸耳、今踐此二難、換老人千里一唉、其義可貫金石矣、吁近代叢林、兄弟於朝、寇讎於暮、滔々皆是、視此豈不汗於顏耶、想老人握手於天末謝之、以予此言乎、因賦禪詩一篇授之、寄上且寓來暮之意、

滿肚家傳文字禪、聞招富士日陪筵、何時握一由旬雪、抛向塵埃漆桶前、

〔翰林葫蘆詩集〕二　默堂老禪師中歲有緣于東人、

往董駿之善(德カ)得、道路脩遠、久絶書問、去冬之藺適當其先無求大祖師一百年遠忌之辰、遣使助其忌齋、因作偈見及于予、繫以青銅貳百錢、行厚意也、今年使回、謹次韻言報恩之一叉、頗感其孝心也、牛黄圓貳貝副之、寄去道躰健安惟所禱也、其偈曰、

無縫團々塔樣新、山花不改舊時春、黄金一國誰論債、鑄出百年堅固身、

〔翰林葫蘆詩集〕四　默堂老禪師僻居於駿之蓧寺者有年矣、道路艱難、久之絶音問、今秋遣僧至洛、賀予之住官院、仍領華偈二篇、青銅三百文、交義之厚、何以報之耶、吁都下叢林凋零莫甚於今日焉、名宿文武欲盡、當是時也不可必私于一方、東人惜其去、而西人待其來、請早圖之、謹次高韻、以致其意



景三詩ヲ贈ル圓覺寺住持ノ命ヲ受ク

云、

詩禪雪月任流傳富士按圖多少年、三國跨雲天下白、一峯換眼句中玄、
別來秋穀十嘗新、想見霜顱各老人、衰柳官街甚多病、五株烟雨葛天民、

〔補菴京華外集〕下　寄默堂西堂詩

駿州大富山默堂禪師、今玆壬子夏(延德四年)、特奉大人相公鈞命、董蒞瑞鹿山圓覺禪寺、吾徒聞此盛擧、抃躍倍恒、嗚呼北禪翁道已東矣、在禪師一人耳、禪詩一首寄呈法座下、以賀瑞世云、昔中山和尚入寺建長、以空華所寄禪詩準疏、付西藏主令讀拈語曰、鐔津語脉筠溪詞源、日工記曰、日本以詩準疏讀者始於此矣、予雖不敏、以詩準疏、取則二師可也、一唉、

伏聞領帖沐台恩、圓覺伽藍万德尊、鵝雪蠟氷是何物、千秋富士玉崑崙、

延德四年五月廿六日　　前南禪橫川景三

〔翰林葫蘆詩集〕四　次小補韻賀默堂住圓覺

大丞相降劄公選前眞如默堂禪師領相州瑞鹿寺、專使嚴藏主捧公文赴于駿之大富、小補大和尚作偈代疏、一段佳話也、謹依韻奉賀、

出世一香先報恩、君師千五百人尊、相逢耳語不容髮、東有士峯西鷲崙、

壽芳
壽文
文摠

〔相國寺塔頭末泓略記幷歷代〕　慶雲派　通玄軒　附合慈雲菴

春英壽芳　嗣瑞溪鳳、住天龍、

〔蔭涼軒日錄〕　長祿四年十一月廿五日、殿中小童成喝食、而可使爲瑞溪和尙弟子之由被仰出、愚僧同道而行、瑞溪卽名以壽文也、伊勢守奉之、

〔翰林五風集〕　二十八　和文摠首座韻幷序　天隱

萬年松鷗首座、服勤北禪明教(周篤)師左右者歲久矣、以故有衝樓偉作、朋輩皆避一頭地也、○(下略全文明應九年九月二十三日龍澤示寂ノ條ニ收ム)

○周鳳ノ景德寺住持トナルコトハ、永享八年八月四日ニ、等持寺住持トナルコトハ、同九年八月十一日ニ、義敎ノ命ヲ帶ビテ東國ニ使スルコトハ、同十一年七月十九日ニ、相國寺住持トナルコトハ、同十二年八月二十九日ニ、僧錄司トナルコトハ、文安三年十月是月ニ、義政ノ命ニヨリ畫障ノ贊詩ヲ作ルコトハ、寶德元年七月十一日ニ、再ビ僧錄司トナルコトハ、康正二年二月是月ニ、義政ノ問ニヨリ額字ノ來歷ヲ對フルコトハ、長祿三年正月二十二日ニ、義政ノ召ニヨリ觀音經ヲ講スルコトハ、同年八月二十七日、及ビ寬正五年九月二十八日ニ、遣唐ノ疏ヲ



一乘院奉書

製スルコトハ、寬正五年二月十二日ニ、明ニ求ムル書籍ノ目錄ヲ評定スルコトハ、同年七月十八日ニ、三タビ僧錄司トナルコトハ、應仁元年是歲ニ、京都ノ亂ヲ避クルコトハ、同年是歲(第八編之二所載補遺)ニ各其條アリ、參看スヘシ、又延寶傳燈錄、本朝高僧傳等、周鳳ノ傳ヲ收ムレドモ、異事ナキヲ以テ略ス、

九日、己亥　奈良一乘院所管鹽座衆目安ヲ捧ゲ、大乘院座衆ト稱シテ、恣ニ鹽ヲ賣買スル者アルヲ訴フ、一乘院敎玄、因テ大乘院ニ牒シ、之ヲ嚴禁センコトヲ請フ、

〔尋尊大僧正記〕　寺社雜事記　五

一、自一乘院奉書到來、自是可返事之由仰了、

五月九日

就當門跡鹽座之事、名主方申狀、次彼座衆等目安被召進候、巨細見彼面候哉、誠如歎申入候、近來橫入(違カ)之輩、於奈良中商買之條、且遣先規候歟、如今非分商人令增倍候者、御座忽不可有正體之段無勿體候、所詮被經盡理之御糺明、彼橫入之輩商買事、自今以後堅令停止候樣、被加御下知候者、可目出之旨可申入之由候、以此趣可然樣可有御披露候哉、恐々謹言、

五月九日

當番申次御中

名主方申狀

就鹽座事、如此捧目安申入候、奈良中鹽座事者、自往古商買有法度事候處、近日商人增倍候條、誠座衆等歎申候處、非無其謂候歟、早々被經御糺明、被禁制横入之輩候樣、御成敗可畏存之由、可有洩御披露候、恐々謹言

五月九日　　名主等

越前上座御房

鹽座目安

一乘院殿樣鹽座等謹言上

奈良中鹽座事者、依爲鄭重之儀、就子孫致相續令賣買候條、古今之御掟旨候也、然處近年號大乘院殿樣御座衆、三良五郎、七郎次郎、六郎四郎、十郎、平六以下輩、直付駄鹽致賣買候條濫吹之沙汰、曾以無先規之題目候、殊於正願院座商人者、如八郎次郎男荷下箕（今ノ）令所々於往來可致商候處、於只今者如居座、一圓於家内賣買段、太以無其謂次第候、如今者御座零落不可有其疑候、早々爲御名主被經御糺明、任先規被停止横入輩候者、併御座繁昌基可忝畏入存候、然者彌々御所役等可致慇懃沙汰候者也、



孝乘



仍粗言上如件、

文明五年（癸巳）四月廿二日　　芝辻　正乘　　椿井　三郎

廿九日

一、正願院鹽座居賣事、自一乘院承之、巨細糺明之處、座衆等注進如此、則申遣一乘院者也、名主高矢云々、及數代於私宅居賣之由申遣了、

正願院座鹽賣シタミノ座ノ居座ノ事

キノ辻ニアリ、

一、五郎、其子ヲイ（脇戸）三郎五郎、其子彦三郎（同所）、以上三代、

一、左衛門次郎、其子衛門次郎、以上二代、

（高畠）

一、七郎次郎（廊ノ辻子）　一、清次郎（今筵）

一、八郎次郎（廊ノ辻子）　一、源五郎（池ノハタ）　一、清三郎（井ノ上）　一、六郎（ニサカ）

右以上是等人數代々居座ノ鹽賣ノ事分明候、

文明五年（癸巳）五月廿八日　　中院　三郎五郎判　　鶴　十郎判

春幸時春ニ大乗院座鹽駄問職ヲ司ラシム

〔大乘院寺社雜事記〕五十三　三月廿七日

一、大乘院座鹽駄問職事、春幸五郎 時春 以由緒申入之間、當座衆方先日以寬
圓相尋之、不可有子細之由申入之間、今日宛文 於給了、遣繼舜法橋方內々
申入故也、多聞院之大工番匠云々、筆師信承也、予則給之了、
抑此駄者百二十疋也、平群郡立野龍田世屋以下者共商賣也、此內三十疋
ハ一乘院方座自專也、其餘ハ當座衆 大乘院方 自專也、月迫ニ馬一疋ニ百文宛
年貢出之、自問方一貫□□文門跡ニ進之、其餘ハ問得(方脫カ)分也、已來ハ百二十
疋ハ無之云々、此間ハ大乘院方ニ二人 西御門ニ一人、紀寺ニ一人、一乘院ハ一人 芝辻ニ
在之云々、

十日、庚子、御鞠アリ、

〔親長卿記〕四　五月十日、晴、於殿上庭前有鞠、

十一日、辛丑、右京大夫管領細川勝元卒ス、子政元嗣グ、

〔親長卿記〕四　五月十一日、晴、細川右京大夫管領勝元朝臣自去四日歡樂、今日命終、四十四歳、

菲禮ヲ地藏院ニ行フ

天下重事歎而有餘、

廿二日、雨下、雷一聲、細川右京大夫 勝元 今日葬禮、悲田院之內地藏院云々、敵
山名入道三月十八日死去之時、雷鳴雨下、今又葬禮之時如此、不審、

〔東寺執行日記〕十一　五月十一日未刻ニ、細川右京大夫殿 勝元 例風ニテ
死去之由聞及、兩方大將 山名入道殿、三月十八日死去、七十歳、細川右京大夫殿、八、五月十一日死去、四十四歳、 曲事也、

〔大乘院日記目錄〕三　五月十一日 午刻、細川右京大夫勝元逝去、四十四、于時
官領、東方大將也、

十三日、夜、八方大衆蜂起、寺社領違亂事、東西大名所行也、殊更細川幷朝倉事、
自兼日及其沙汰之處、今日聞分細川入滅云々、希有神慮也、

〔尋尊大僧正記〕四 寺社雜事記　五月十五日、夕立
十六日、雨下
一、成就院ニ參申、予細川同年也、可說之由云々、正月儀致其沙汰了、
一、筒井自昨日罷上云々、細川方事仰天云々、去十日 午刻 他界、東方大將也、神
罰也、
十七日

寺社領違亂ノ神罰